

シンポジウム 神子柴系 石器群

神子柴遺跡発掘
60周年記念

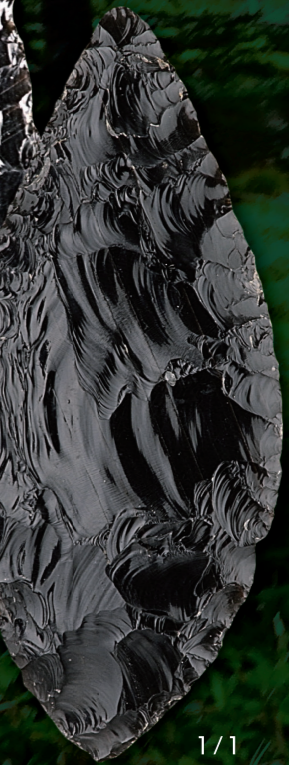
その存在と影響

2018

伊那市創造館
上伊那考古学会
明治大学黒耀石研究センター
八ヶ岳旧石器研究グループ

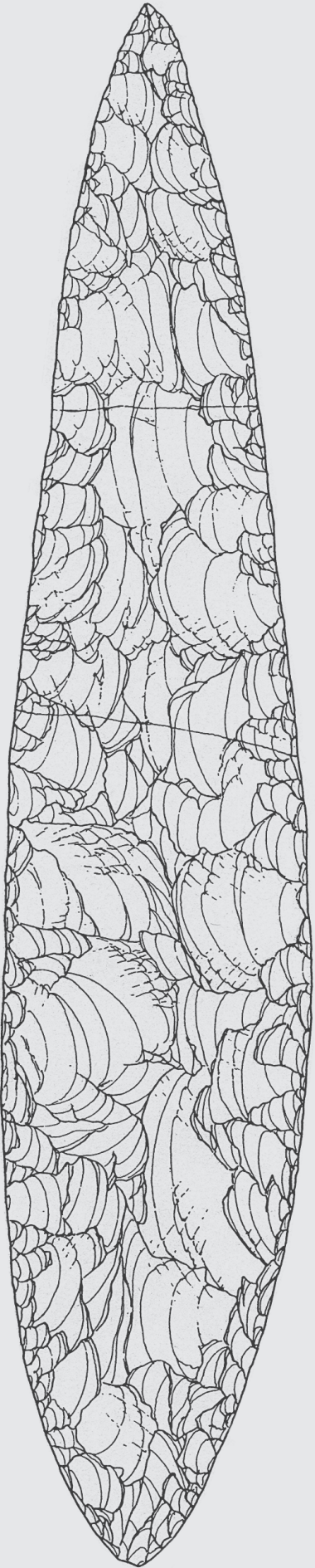
シンポジウム
神子柴系石器群
その存在と影響

2018
八ヶ岳旧石器研究グループ編



神子柴遺跡発掘60周年記念
シンポジウム

神子柴系石器群 その存在と影響



神子柴60年の軌跡と議論のこれから

天竜川に臨む神子柴の丘、林茂樹らによって発掘のスコップが突き立てられたのが1958年、そして60年という歳月が流れた。人生でいうなら還暦という節目にあたるのが本年である。

岩宿の発掘が1949年、長野ではその後、茶臼山（1952）、杉久保（1953）、上ノ平（1953）、馬場平（1953）、矢出川（1953、1954）、と重要な「プレ縄文」遺跡の調査がなされ、1958年の神子柴へと続く。「発見の10年」といえる時代である。

その後半世紀、神子柴はさまざまな論争を学会に提供し続けた。性格論・機能論・出自論・時代論、調査者の林をはじめ、多くの研究者がこの謎に取り組んだ。

いくつか事態の進展はあった。発掘から50年後の2008年には発掘調査報告書の刊行、2011年には伊那市創造館神子柴展示室のオープン、バールに包まれていた神子柴はある程度人口に膾炙した。本年は東京国立博物館、そしてパリでの公開。遠い空の上から林茂樹は喜んでくれているのだろうか、今となっては聞くすべはない。

しかしながら、議論が終結した訳ではない。けれどおそらくは60年を記念したこのたびの講演会とシンポジウムが、神子柴の理解をいっそう深化させてくれるに違いあるまい。

2018年9月29日

主催者を代表して

八ヶ岳旧石器研究グループ

堤 隆



神子柴遺跡を記録する(1958)

神子柴遺跡発掘60周年記念シンポジウム 神子柴系石器群 その存在と影響

プログラム・目次

■9月29日（土） 13：30～17：30

◎シンポジウム基調報告（発表各40分・質疑10分）

- 1 神子柴系石器群の石器石材 13：40～14：30 中村 由克..... 9
- 2 神子柴集団の石器製作技術 14：30～15：20 大場 正善.....11
- 3 神子柴遺跡再考 15：40～16：30 栗島 義明.....18
- 4 西日本の非神子柴的世界 16：30～17：20 池谷 信之.....29

■9月30日（日） 9：00～15：00 基調報告・講演

◎シンポジウム基調報告

- 5 北海道における神子柴系石器群の存在性 9：00～9：50 中沢 祐一.....38
- 6 神子柴遺跡とその石器群 9：50～10：40 堤 隆.....45

◎関連報告・資料見学ほか 10：40～11：30

◎講演 11：30～12：30

神子柴遺跡はなぜ残されたか 佐藤 宏之（東京大学大学院）..... 5

休憩・昼食 12：30～13：30

◎パネルディスカッション 13：30～15：00

■ 伊那市創造館常設展示 神子柴遺跡出土石器

開催 伊那市創造館 上伊那考古学会 明治大学黒耀石研究センター 八ヶ岳旧石器研究グループ共催
会場 伊那市創造館 〒396-0025 長野県伊那市荒井3520番地 電話：0265-72-6220
事務局 八ヶ岳旧石器研究グループ 堤 隆 tsutsumi@avis.ne.jp
○ Web 情報 <http://mikoshiba.blog.so-net.ne.jp/>

神子柴遺跡はなぜ残されたか？

東京大学大学院人文社会系研究科

佐藤 宏之

1. はじめに

後期旧石器時代末期から縄文時代へ移行する段階の遺跡として、神子柴ほど繰り返し語られてきた遺跡は少ない。発掘当初から、その特異な遺物の出土状態は研究者の注目を集め、時々の考古学的議論の趨勢を鋭敏に反応した議論が行われてきた。今回の講演では、屋上屋をなす誹りを免れないかもしれないが、あえて議論の題材をもう一つ提供してみたいと思う。それは神子柴遺跡をめぐる最大の謎と言って良い「神子柴遺跡はなぜ残されたか？」についてである。換言すれば、神子柴遺跡の性格をめぐる新たな解釈の可能性を提起するものである。

2. 神子柴遺跡をめぐるこれまでの性格論

神子柴遺跡をめぐるこれまでの性格論については、堤が手際よくまとめている（堤2013）ので、ここでは堤に従って、概観してみたい。

これまでの性格論は、大きく分けて5つにまとめることが可能であろう。

- (1) 墳墓説：林茂樹や芹沢長介によって、発掘当初に想定された説である。ロシア・シベリア等の新石器時代墳墓から石器等の多くの副葬品が出土する事例を参考として、墓の可能性が想定されたが、のちになると「立ち消え」となった（堤2013）。
- (2) 住居説：神子柴を特殊な遺跡ではなく、通常の遊動生活の一環として形成されたと考える説である。神子柴出土の石器類を初めて本格的に整理した稲田孝司は、成人男子7-8人を含む女性・子供・老人からなる10数人の集団が、複数回の移動と居住の過程で残したテント状の住居の跡と理解した（稲田2001）。白石浩之・藤山龍蔵・森嶋稔・林茂樹等も生活跡または住居跡説を採用している。
- (3) デポ説：一方神子柴を新石器時代の所産と理解する山内清男や佐藤達夫は、ヨーロッパ青銅器時代等に発達した交易品の収蔵（埋納）施設であるデポに類似した遺跡とみなした。岡本東三もこれに賛成している。田中英司は、さらに踏み込んで、オープンスペースに道具類を整理・保管した「収蔵複合デポ遺跡」と積極的に解釈した（田中2001）。

ちなみに堤隆は、消費行為を伴う居住地であり、同時に交換のための各地からの物資を備えたデポとしても機能したと考えている。(2)(3)(4)の複合説とも言

えようか（堤2013）。

- (4) 交換の場説：栗島義明は、デポの考えをさらに積極的に展開し、神子柴は石器交換の場であると解釈した（栗島1990）。
- (5) 象徴的空間説：安斎正人は、(1)から(4)までの説が、何らかの日常的な生活行為の所産と考えるのに対して、非日常的な空間である可能性を強調する。神子柴が立地する場合は、周囲を見通せる優れた景観をもつことから、祭祀の場であり、同時に集団的・社会的な象徴空間として「選ばれた場」であったと解釈した（安斎2010）。

こうした従来の性格論を通覧すると、安斎や堤等による最近の説は、近年の狩猟採集民考古学やポスト・プロセス考古学の発展を背景として、何らかの生活行為を想定する単純な性格論から、未分化な行動の集積あるいは象徴景観の場としての説明へと変化していることが見て取れる。

しかしながら筆者は、結論から言うと、墳墓説で説明できるのではないかと考えている。つまり、神子柴遺跡は、テント状の住居に遺体を安置して、その周囲に完成品等の石器類を副葬した廃屋墓なのではないかと考えた。日常的生活行為の結果残された住居が、墓として選択された瞬間から、非日常的な聖なる空間へと転化した。当然そこでは、葬送儀礼の執り行われた祭祀の場でもあったであろうし、これまで類例に乏しいことから判断できるように、当時の狩猟採集民にとって、ある意味で特別な象徴的空間でもあったと思われる。言わば(2)(5)と複合した(1)墳墓説とも言えよう。

したがって、デポ説や石器交換の場説は、筆者は取らない。デポは、もともとヨーロッパ青銅器時代に発達した青銅製品のような商品を地中に隠匿・収蔵した施設であり、一定程度の交易・交換経済の存在が前提とならざるをえないので、遊動生活が卓越していた後期旧石器時代末期の日本列島に、そのような経済状況を想定することはできないと考えられる。また石器交換の場という理解をするためには、市のような機能空間を想定する必要があるように思われるが、同時代の他の遺跡に類例がほとんど知られておらず、やはり解釈に飛躍があるように思われる。

筆者は、最近沖縄県石垣島で発見された白保竿根田原洞穴遺跡の確認調査を指導する機会があったが、調査団の結論は同洞穴遺跡が、日本の更新世で初めて確認され

た崖葬のような墓域を形成していたとするものであった。この解釈の妥当性を検証する過程で、世界の更新世墓制の検討を行った(佐藤2017a, b, c)。この研究によって、神子柴が墓であるとする解釈が異例ではないと理解するようになった。

3. 前期旧石器時代の最初の「埋葬」

そもそも埋葬行為を考古学的に確認することは容易ではない。アウストラロピテクスや初期ホモ属が出土するアフリカでは、肉食獣による捕食の結果として残された化石人骨例が著名であるが、そうした行為によらないと推定される人骨もあり、何らかの広義の「埋葬」行為の結果と積極的に解釈する例もある(Pettitt 2001)。しかしながら、具体的にその存在が主張された最古の事例は、おそらくスペインのシマ・デ・ロス・ウエソス洞窟遺跡の事例であろう。同遺跡では、ホモ・ハイデルベルゲンシス¹⁾(400-350ka)が、洞窟の入り口付近にある深さ14mの縦穴の底部から、28体が折り重なるように出土した。調査者のアルスアガは、ハイエナ等から死体を守るために縦穴に意図的に投棄し、「予定された正確な場所に遺体を〈積み上げた〉」世界最古の埋葬慣習であると主張している(アルスアガ2008;佐藤2014)。また最近調査された南アフリカのライジング・サン洞窟遺跡でも、ホモ・ナレディと新たに定義された初期ホモ属が同様な方法(意図的の廃棄)で「埋葬」されたと報告された(Berger et al. 2015; Dirks et al. 2015; シュリーブ2015)。

最初の「埋葬」は、仲間の死体を動物の捕食から隔離して「守る」という意識から始まったのかもしれない。

4. ネアンデルタールと早期ホモ・サピエンスの埋葬：中期旧石器時代

ヨーロッパや西アジアを中心に、ネアンデルタール人の全身骨が洞窟等から単独で出土する例は比較的多く報告されている。これらには「墓穴」を伴う例もあるが、そうした施設がない例も普遍的に観察される。ネアンデルタールの化石人骨の出土例は300近くにのぼるが、このうち少なくとも30例以上は、埋葬の可能性が高い。

ネアンデルタール人の埋葬例では、明確な副葬品がともなわないとされているが、西アジア・レヴァントのアムッド洞窟遺跡から検出されたアムッド7(80-50ka)では、アカシカの上顎が骨盤付近から検出されている。

現生人類の出現が20~15万年前のアフリカにあることはすでによく知られているが、最古の現生人類の埋葬例は、アフリカではなく西アジアのレヴァントから報告されている。代表的な早期ホモ・サピエンスの化石人骨を出土したスフル遺跡とカフゼー遺跡からは、それぞれ10と13個体に及ぶ全身骨格が出土した。スフルではそのうち4個体が、浅い墓坑を伴うと推定されており、他の個体の多くも自然の窪みを利用していたと考え

られている。このうちスフル5(100-30ka)ではイノシシの下顎骨が、カフゼー11(120-90ka)ではダマジカの角が人骨に伴う形で検出されている。多くの個体は屈葬とされる。ただし装飾品等の明瞭な副葬品の存在は、現生人類が出現する後期旧石器時代以降となる。

かつて現代的行動性を高く評価するあまり、ネアンデルタールの「墓」は、肉食獣から居住地を守るために死体を処理しただけであると主張されてきた(ストリンガー・ギャンブル1997)が、現在では解剖学的位置を保った全身骨の出土をもって「埋葬」の可能性を考慮することは広く了解されており、墓穴の普遍的存在に先行して埋葬行為が行われていたと考えられる(Akazawa & Muhesen 2002; Pettitt 2001)。

5. 現生人類の埋葬：後期旧石器時代

レヴァントの早期ホモ・サピエンスの埋葬例ではすでにその萌芽(動物骨・角の副葬)が見られるが、装飾品等の明瞭な副葬品を伴う墓坑への埋葬は、後期旧石器時代初頭から認められる。ヨーロッパではオーリニャック文化(40~34ka)から開始されているが、頭部や着衣を多数の装飾品で飾り、多くの副葬品を伴う埋葬が発達するのは、後期旧石器時代中葉のグラベット文化(34~25ka)である。

グラベット文化は、氷期の寒冷気候のもとでユーラシア北部の草原や疎林に展開した文化であり、マンモスやウマ等の大型獣狩猟に適応した集団によって、西ヨーロッパから南シベリア(東方グラベット文化)まで広く分布していた。東ヨーロッパからウクライナにかけての地域では、マンモス骨を利用した住居を構築したことも知られており、各種のヴィーナス像や骨角製装飾品が発達した。モスクワ近郊のシングル遺跡や南ロシアのマリタ遺跡等の墓坑からは、単独または血縁関係が窺われる複数個体の全身骨格が検出されており、屈葬が多いが伸展葬もある。しばしば遺体の上には大量のオーカーがまかれるため、墓全体が赤く染まって見えることもある。特別に選択された地中海産の貝殻やオオカミ・キツネ等の歯牙に尖孔を施したネックレス、線刻・点刻のあるプレスレット、マンモスの骨や牙に抽象的な線刻・点刻や動物文様を施した装飾品、石器・石刃等が副葬されていることが多い(佐藤2014)。

後期旧石器時代になると、墓坑以外に住居跡等が墓に利用されるようになり、パルマ・グランデ遺跡(イタリア)やドルニ・ベストニツェ2遺跡(チェコ)等の3体合葬、グロッタ・デ・フランシウリ遺跡(イタリア)等の2体合葬などの合葬墓が知られている。またプレドモスティ遺跡(モラヴィア)やアレネ・キャンディッド遺跡(イタリア、エピ・グラッベッティアン)等では、複数個体からなる集団墓の存在も報告されている。屈葬も伸展葬もあり、活発な埋葬儀礼が行われた。

中期旧石器時代までの埋葬は、主として洞窟が選ばれ

ていたが、後期旧石器時代になると、洞窟・岩陰だけではなく、平地も選択されるようになる。

6. 東アジア・東南アジアの後期旧石器時代埋葬例

しかしながら、グラベット文化のような北方狩猟民の間で著しく発達した埋葬は、アジアの後期旧石器時代では、それほど厚葬を見せることはない。が、顔料の使用、副葬品、墓坑、埋葬儀礼といった諸要素を看取できる例もある。

東・東南・南アジアの後期更新世化石人骨は、中国国内を始めボルネオのニア洞窟、スリランカのファ・ヒエン洞窟やバタドンバ・レナ洞窟等から出土しているが、その多くは部分骨であるため、埋葬行為の有無は判断しがたい。しかしながら、中国北京郊外にある著名な周口店山頂洞（山頂洞人）近くにある田園洞から、後期旧石器時代初頭の年代測定値（34,500~44,000cal BP）を有する現生人類の略全身骨格が出土しており、おそらく埋葬行為によるものと思われる（Shang & Trinkaus 2010）。オーストラリア最古の埋葬は、南東オーストラリアのマンゴー湖遺跡群のひとつウィランドラ遺跡で確認されている。ウィランドラからは200個体以上の人骨が検出されているが、40ka 頃の若い女性と推定されている全身骨格 WLH1と、43ka 頃の老齢個体（おそらく女性）と考えられている WLH3の2例のみがよく分析されている。WLH3は遺体の上にオーカーを振り撒いた墓坑から出土しており、本格的な墓域が形成されていたと考えられる²⁾（Johnston et al. 1998；Hiscock 2008；佐藤 2011）。

詳細な出土状況は不明であるが、インドネシア東部のアル島から、後期更新世後半（18~16ka）の全身骨格が検出されており、墓と報告されている（O'Conner et al. 2005）。

マレーシアのゲア・グヌン・ルントゥ洞窟遺跡から、13ka と年代測定されたペラク人と呼ばれる屈葬の全身骨格が出土している。明瞭な墓坑は認められていない。埋葬人骨の周囲からは、ヘマタイトの顔料が付着した石皿と磨石（敲石）、石斧等の石器や礫、イノシシ・トカゲ・シカ・サル等の動物骨や貝が出土しており、何らかの葬送儀礼が執り行われていたと推定されている（Majid 2005）。またタイのタム・ロッド岩陰遺跡からは、ほぼ同じ年代値を示す3個体の化石人骨が検出されている。このうち2個体はほぼ全身骨格が遺存しており、骨の放射性炭素年代は、個体1が 12100 ± 60 BP、個体2が 13640 ± 80 BPであった。個体1は伸展葬の成人で、敲石と淡水・陸生貝が副葬され、個体1の直下から出土した成人女性の個体2は屈葬で、遺体の直上にはサークル状に3つの礫が配置され、やはり敲石と動物骨が副葬されていた。Burial と報告されているが、明確な墓坑は認められない（Shoocongdej 2006, 2008）。

7. ドルニ・ベストニツツェ遺跡と神子柴

ドルニ・ベストニツツェ遺跡は、現在チェコに所在し、パヴロフ遺跡群の一部を構成している。グラベット文化中の地域文化のひとつであるパヴロビアン（26~24ka）に属するが、同2遺跡から3体合葬墓が検出されたことで著名である。同16遺跡からは、明確な廃屋

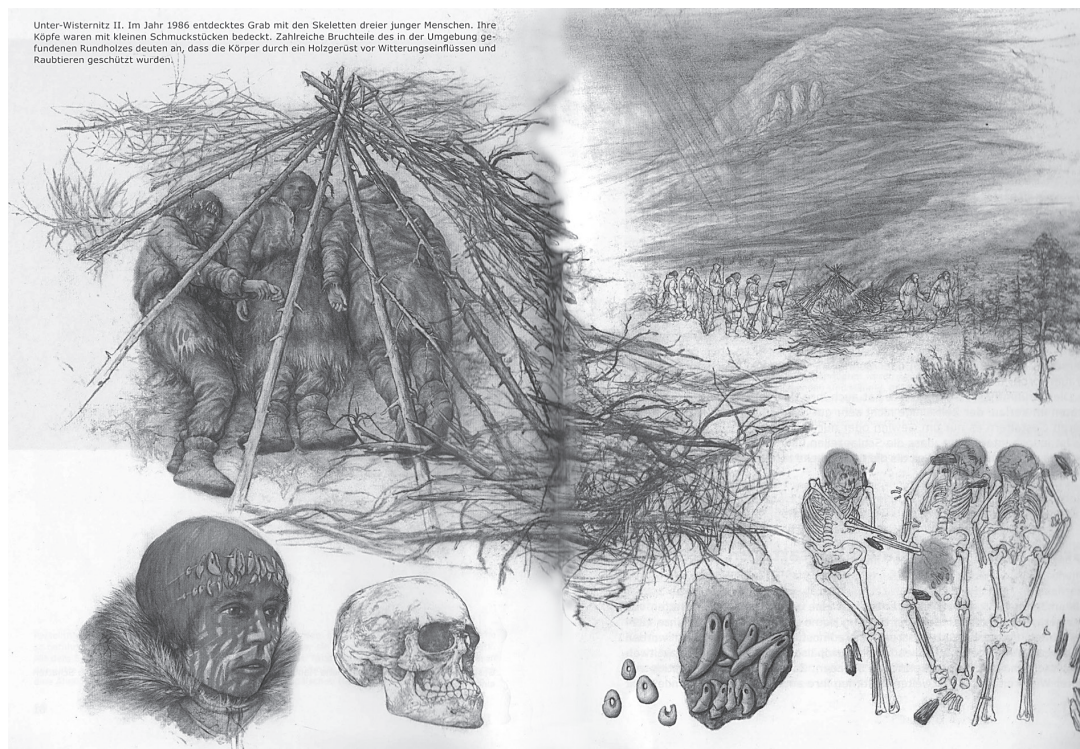


図1 ドルニ・ベストニツツェ2遺跡の3体合葬廃屋墓の想像図

墓が検出されているが、同2遺跡の3体合葬墓もテント状住居を利用した廃屋墓であると考えられている。遺体は穿孔された貝・歯牙・象牙製装飾品で飾られ、周囲に赤色のオーカーが撒かれていた。自然科学的分析の結果、ギンギツネ等の毛皮が副葬されていたらしい(図1)(Svoboda 2010)。

こうした墓の特徴は東方グラベット文化の墓とよく共通し、神子柴遺跡は、これとよく似た廃屋墓だった可能性が高い。ただし遺体と有機質遺物は消失してしまったものと思われる。

註

- 1) 調査担当者のアルスアガは、初期のネアンデルタール人と考えている。
- 2) マンゴー湖出土の更新世人骨は、出土資料を含めて全てが、2017年11月に地元のアボリジニ・コミュニティに対して正式に返還された。今後の調査・研究は、該当する地域コミュニティとの協議に委ねられることになった。

引用・参考文献

- アルスアガ J.L. [藤野邦夫・岩城正夫訳] 2008 『ネアンデルタール人の首飾り』新評論
- 安斎正人 2010 『日本人とは何か—考古学がいま語れること—』柏書房
- 稲田孝司 2001 『遊動する旧石器人』岩波書店
- 栗島義明 1990 「デポの意義—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』7号、1-40頁
- 佐藤宏之 2011 「オーストラリア大陸への人類の移住」『旧石器考古学』75号、101-108頁
- 佐藤宏之 2014 「考古学から見た死と儀礼」秋山聡・野崎敏編『死者との対話』93-107頁、東京大学出版会
- 佐藤宏之 2017a 「旧石器時代の埋葬：白保竿根田原洞穴遺跡の埋葬行為を考える」『白保竿根田原遺跡確認調査報告書2総括編』182-185頁、沖縄県立埋蔵文化財センター
- 佐藤宏之 2017b 「埋葬の起源」『科学』87巻6号、501頁
- 佐藤宏之 2017c 「白保竿根田原洞穴遺跡の考古学的成果」『科学』87巻6号、565-569頁
- シュリーブ J. 2015 「眠りから覚めた謎の人類」『ナショナル・ジオグラフィック』10月号、36-61頁
- ストリンガー, C.・ギャンブル, C. [河合信和訳] 1997 『ネアンデルタール人とは誰か』朝日新聞社
- 田中英司 2001 『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学叢書1
- 堤 隆 2013 『狩猟採集民のコスモロジー 神子柴遺跡』新泉社
- 林 茂樹・上伊那考古学会編 2008 『神子柴』信毎書籍出版センター
- Akazawa, T. and Muhsen, S. (eds.) 2002 *Neanderthal Burials: Excavations of the Dederiyeh Cave, Afrin, Syria*. International

Research Center for Japanese Studies.

- Berger, L.R., Hawks, J., Ruiters, D.J., Churchill, S.E., Schmid, P., Deleuzene, L.K., Kivell, T.L., Garvin, H.M., Williams, S.A., DeSilva, J.M., Skinner, M.M., Musiba, C.M., Cameron, N., Holliday, T.W., Harcourt-Smith, W., Ackermann, R.R., Bastir, M., Bogin, B., Bolter, D., Brophy, J., Cofran, Z.D., Congdon, K.A., Deane, A.S., Dembo, M., Drapeau, M., Elliott, M.C., Feuerriegel, E.M., Garcia-Martinez, D., Green, D.J., Gurtov, A., Irish, J.D., Kruger, A., Laird, M.F., Marchi, D., Meyer, M.R., Nalla, S., Negash, E.W., Orr, C.M., Radvcic, D., Schroeder, L., Scott, J.E., Throckmorton, Z., Tocheri, M.W., VanSickle, C., Walker, C.S., Wei, P.P., Zipfel, B. 2015 *Homo naledi*, a new species of the genus *Homo* from the Dinaledi Chamber, South Africa. *eLife*, 4, doi: 10.7554/eLife.09560.
- Dirks, P.H.G.M., Berger, L.R., Roberts, E.M., Kramers, J.D., Hawks, J., Randolph-Quinney, P.S., Elliott, M., Musiba, C.M., Churchill, S.E., Ruiters, D.J., Schmid, P., Backwell, L.R., Belyanin, G.A., Boshoff, P., Hunter, K.L., Feuerriegel, E.M., Gurtov, A., Harrison, J. du G., Hunter, R., Kruger, A., Morris, H., Makhubela, T.V., Peixotto, B., Tucker, S. 2015 Geological and taphonomic context for the new hominin species *Homo naledi* from the Dinaledi Chamber, South Africa. *eLife*, 4, doi: 10.7554/elife.09561.
- Hiscock, P. 2008 *Archaeology of Ancient Australia*. Routledge.
- Johnston, H., Clark, P., and White, J.P. (eds.) 1998 Willandra Lakes: People and Paleoenvironments. *Archaeology in Oceania*, 33(3).
- Majid, Z. (ed.) 2005 *The Perek Man and Other Prehistoric Skeletons of Malaysia*. Penerbit Universiti Sains Malaysia: Pulau Pinang.
- O'Connor, S., Spriggs, M. and Veth, P. eds. 2005 *The Archaeology of the Aru Islands, Eastern Indonesia*. Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Pettitt, P. 2011 *The Palaeolithic Origins of Human Burial*, Routledge, London.
- Shoocongdej, R. 2006 Late Pleistocene activities at the Tham Lod Rockshelter in Highland Pang Mapha, Mae Hong Son Province, Northwestern Thailand. Bacus, E.A., Glover, I.C. and Pigott, V.C. (eds.) *Uncovering Southeast Asia's Past: Selected Papers from the 10th International Conference of the European Association of Southern Asian Archaeologists*, pp. 22-37, National University of Singapore.
- Shoocongdej, R. 2008 *Archaeological Heritage Management at Ban Rai and Tham Lod Rockshelters in Pang Mapha District, Mae Hong Son Province, Northwestern Thailand*. Mae Hong Son Province: Silpakorn University.
- Shang, H. and Trinkaus, E. 2010 *The Early Modern Human from Tianyuan Cave, China*. Texas A&M University Press.
- Svoboda, J.A. 2010 *Dolní Věstonice - Pavlov unter-Wisternity und Pollau*, Regionalmuseum Mikulov, Mikulov.

神子柴系石器群の石器石材

下仁田町自然史館／明治大学黒曜石研究センター

中村由克

1. はじめに

神子柴系石器群はまとまった石器が集中して発見された神子柴遺跡などをのぞいて、単独出土の状態の発見例も多い。とりわけ、石斧は表採資料も多く、全国で1295点知られているという（橋本2018）。これらの内で筆者が詳細に石材を観察できたものはごくわずかであるが、長野県域における事例を紹介しながら、この石器群に内在する石材の特徴について論じたい。

2. 神子柴遺跡の石器の石材

神子柴遺跡（林ほか編2008）では、石斧には、凝灰岩（TU）5点、黒雲母粘板岩（SL-Bio）4点、砂岩ホルンフェルス（SA-HOR）3点、緑色岩（GRS）1点、尖頭器には、黒曜石（OB）10点、白色玉髓（CL）3点、下呂石（GE）2点、凝灰岩（TU）・珪質頁岩（SH-S）各1点、剥片石器には、黒曜石（OB）17点、珪質頁岩（SH-S）8点、白色玉髓（CL）7点、碧玉（JA）1点、礫石器には、安山岩（AN）2点、砂岩（SA）2点などが使用される。

とりわけ、大型優美な尖頭器は、岐阜県の下呂石、長野県の黒曜石、新潟県の白色玉髓など中部地方各地を代表するような良質石材から構成されるのは特徴的である。

尖頭器を含む剥片石器に用いられる石材は、それ以前の旧石器時代やその後の縄文時代に普通に使用される石材に共通するものである。一方、石斧には黒雲母粘板岩など前後の時代にはほとんど見られない石材も含まれる。

3. 神子柴型石斧の石材

この石器群で注目される唐沢B遺跡、そして野尻湖周辺の遺跡の石斧石材を検討する。

上田市真田町の唐沢B遺跡（森嶋ほか編1998）の石斧は、黒色頁岩（SH-B）7点、珪質頁岩（SH-S）、砂岩（SA）、ホルンフェルス（HOR）、安山岩（AN）各1点である。黒色頁岩は群馬県三国峠周辺などに分布する中新世のものと共通する。

野尻湖周辺（中村ほか2008）では、七ッ栗遺跡、上ノ原遺跡（第1次）に酸性凝灰岩（TU-acid）3点、小丸山遺跡、砂間遺跡、狐久保遺跡に凝灰岩（TU）3点、そして立が鼻遺跡に黒色頁岩（SH-B）1点が出土している。

野尻湖周辺で多い凝灰岩は、信濃町星光山荘B遺跡や十日町市久保寺南遺跡にも共通する石材であり、信州北部から新潟、群馬に多くみられる。

4. 石斧と石材

①旧石器時代の石斧

後期旧石器時代前半期の局部磨製石斧・打製石斧は、全国で報告数800点以上である。その石材は集中分布する野尻湖周辺や富山地域を中心に、日本海沿岸域には透閃石岩（TR）が多い。このほか緑色凝灰岩（GT）、凝灰岩（TU）、ホルンフェルス（HOR）などが補完的に使用される。太平洋側地域や中部高地では、緑色片岩（SCH）、緑色岩（GRS）、緑色凝灰岩（GT）、ホルンフェルス（HOR）、砂岩（SA）などが用いられるが、日本海側と異なり広範囲に共通する石材は少なく、地域ごとに主要石材は変化している。

②縄文時代の石斧

新潟県、富山県の縄文時代前期以降の遺跡では、姫川・青海川流域原産の透閃石岩（TR）製の定角式磨製石斧が多くみられる。これらの石斧は東北地方をはじめ関東、中部、関西地方までひろく流通している。また、新潟県北部など原産の粗粒玄武岩（DOL；輝緑岩ともいう）の磨製石斧は、日本海沿岸域の東北地方までみられる。太平洋側地域では、旧石器時代と同様に地域ごとに分かれた石材使用傾向がみられ、石材も旧石器時代に共通するものが多い。一方、東北地方北部には、北海道原産の日高・平取町産の緑色岩（アオトラ石；GRS）や旭川・神居古潭産の青色片岩（SCH-B）製の磨製石斧が持ち込まれている。

③神子柴型石斧石材の特異性

神子柴型石斧の石材は、東北地方にみられる珪質頁岩、唐沢B遺跡や立が鼻遺跡にみられる黒色頁岩、神子柴遺跡の黒雲母粘板岩など、旧石器時代や縄文時代の石斧には用いられることがない石材を多く使用している。そして、神子柴より前後の時代に多くみられた透閃石岩が全く石斧に使用されないことは、この石器群の特徴といえる。透閃石岩や緑色岩（アオトラ石）は、透閃石、アクチノ閃石（緑閃石）の、粗粒玄武岩は斜長石の針状結晶が多方向に絡む岩石組織をもつことで衝撃に対して大変丈夫な性質を持ち、また、比重が2.9～3.0前後のずっしりと重いことが石斧石材として適した岩石である。

旧石器時代の石斧と縄文時代の石斧は、その間に2万年間以上、断絶した石器であるが、それらが共通する石材を多く使用することは示唆的である。すなわち、これらの石斧は、日本列島で長い期間に製作・使用され続けることで、列島内の石斧に適した石材を探し当て、列

島内の石材環境に適応した石器群だといえる。一方、神子柴型石斧は、衝撃に対して丈夫であるわけではなく、比重も大きくない石材で、剥片石器にも用いられる岩石を使用しているという点で、日本における先史時代の石器石材の選択傾向には異質的である。神子柴型石斧の出自について定説はないと思われるが、これらは時間的に短期間に日本列島に現れ、列島内の石材環境に十分適応することなく、消えていった石器群だと評価される。

引用文献

- 橋本勝雄 2018 「神子柴型石斧の実像とその意味」、堤編 『第20回長野県旧石器研究交流会／シンポジウム神子柴系石器群とはなにか?』 pp.38-43
- 林茂樹・上伊那考古学会編 2008 『神子柴』信毎書籍出版センター
- 森嶋 稔ほか編 1998 『唐沢B遺跡』信毎書籍印刷株式会社
- 中村由克・立木宏明 2008 『七ッ栗遺跡』信濃町教育委員会



図1 神子柴遺跡の石器と石材

神子柴遺跡の槍先形尖頭器はどう作られていたのか？

—神子柴遺跡出土の槍先形尖頭器に対する動作連鎖の概念に基づく石器技術学的検討—

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

大場正善

1. はじめに

日本でもっとも有名と言える神子柴遺跡出土の槍先形尖頭器は、石器づくりをする者ならば誰しものが、同様の尖頭器が作れるようになりたいと願うだろう。そんな羨望の尖頭器が作れるようになるためには、まず手本となる当該資料が、どのように作られていたのかを知る必要がある。

その製作技術については、第一次発掘調査概報からすでに「柔軟槌打法」による成形と「押圧剥離」による整形、すなわち軟質ハンマーの直接打撃による成形と押圧による整形が示唆されていた（藤沢・林1961）。これらのテクニックを駆使して製作されたとする尖頭器は、「優美」と讃えられ、のちに「スペシャリスト」の作と解釈された（栗島1990、稲田2001など）。たしかに、完形品の尖頭器は、一見して「優美」なものであり、「高い技量」を想像する。しかし、これらは残念ながら実験を踏まえたうえでの解釈でないために、あくまでも検証すべき仮説に過ぎない。当該尖頭器の製作技術と作り手の技量を知るには、実験と検証が不可欠なのである。

本遺跡は技術的な情報を残す剥片や接合資料がほとんどなかったため、技術的分析をするうえで大きな制約となっていた。そのことから、これまでに当該尖頭器に対する技術分析は、十分に行われてこなかった。一方で、筆者は山形県日向西洞窟遺跡西地区における草創期隆起線文土器段階の槍先形尖頭器製作について、剥片や接合資料によらず未製品や欠損品をもとに石器技術学分析を行い、尖頭器製作技術の復原を示した（大場2006・2007・2009）。そこで本発表は、本遺跡出土資料を基に民族誌学的研究方法である動作連鎖の概念に基づく石器技術学分析を行ない、槍先形尖頭器の製作技術復原を試みたい。はたして、当該尖頭器はどのように製作されていたのか、そしてどのような技量の手によって製作されたのか。

2. 方法

技術学の鍵概念・資料認識の操作概念である“動作連鎖”とは、原材から製作、使用、廃棄に至る過程に絡んでいた一連のヒトのジェスチャーのことを指す（ルロワ＝グーラン1973、山中2007、大場2015）。石器技術学分析では、製作技術に対して頭脳のなかで描かれる原材から完成に至る石割りの戦略である“メソッド”と、実際の剥離具の質と形状、力の加え方、保持の仕方である“テクニック”の2つの概念に分ける（Tixier 1967、

ベルグラン・山中2016）。メソッドとテクニックの両方が復原されてはじめて、資料に絡んでいた動作連鎖が浮かび上がるのである。分析の過程は、資料観察から始まり、メソッドの復原、テクニックの仮説の提唱、考古資料と同じメソッドと石材を用いた製作実験、考古資料と実験資料との対比による検証といった、科学的方法に則って行う。分析では、個々の資料をシェーン（連鎖）に置き戻し、そして資料の背後に絡んでいたヒトの姿を見出すことを第一の目的としている。なお、他者や自身の技術的な解釈・見解に対する検証法としては、科学の基本的、かつ一般的な方法である再現実験により行う。

当該資料の観察は、2009年9月29日に伊那市立高遠町歴史博物館、2018年7月28日に伊那市創造館において全資料に対して観察を行った。観察は、剥離面の切り合い関係や工程間の前後関係はもちろんのこと、剥離開始部やバルブの観察のほか、技量が顕著に表れる剥離の連続性（規則性）と規格性、縁辺のクラッシュ痕、ヒンジやステップの有無とその状態、平面・側面形の状態、側縁の捻じれ具合などについて注視した。実験では岐阜県湯ヶ峰産下呂石と山形県最上川産珪質頁岩のほか、本遺跡出土黒耀石（諏訪星ヶ台群）の剥離性に近いと考えられる北海道置戸町所産黒耀石を用いた。本来は、遺跡出土の石材と同じ石材を用いて実験を行う必要があるが、現状では困難であるため、剥離性が近い石材を用いた。同じ石材を用いる実験については、今後の課題としたい。

3. 神子柴遺跡出土の槍先形尖頭器づくり

3-1 メソッド

(1) コンセプト

まず、製作者は頭の中で目的とする石器の完成形を思い描く。これが“コンセプト”であり、“第一意図”である（大場2015、ベルグラン・山中2016）。本遺跡の場合は、最終生産物が多く残されているため、コンセプトの推定が容易である。それらの尖頭器の形態からは、長さ8～25cm（8～18cmに集中）、幅4～5cm、厚さ1.1～1.9cm、先端の角度がおおよそ60°、基部の角度がおおよそ90°、横断面が凸レンズ状、最大幅が基部から長軸のおおよそ1/3上にくる左右対称的な木葉形・柳葉形というイメージがコンセプトとして想定される。尖頭器の幅や厚さが比較的まとまるのに対して、長さはばらつきが大きい傾向にある。そのため、尖頭器の幅や厚さがある程度強い規制があった一方で、長さは臨機的であったと

言える。おそらく、木葉形と柳葉形との間に明確な境界がないため、尖頭器の長さは元の素材の長さに起因するものと思われる。

(2) 素材と荒割り

すべての尖頭器は、両面調整が進んでいるため、素材が礫か剥片かの判断が難しい。しかし、尖頭器 No.25 と、石質や流理構造から No.25 の素材剥片を剥離した可能性がある石核 No.63 の存在からは、剥片が尖頭器の素材として用いられた可能性がある（林・上伊那考古学会編2008）。また、尖頭器の横断面は、素材の形状が反映されやすく、剥片素材であれば比較的直線的な腹面形と凸面となっている背面形から、上下非対称的な断面形状となる。その横断面形からみると、以下の資料が剥片素材であった可能性がある。玉髓：14・15、珪質頁岩：26、凝灰質頁岩：17、下呂石：18・21、黒耀石・和田土屋橋北群：20、黒耀石・諏訪星ヶ台群：23～25・28～31。18点中14点が、剥片素材であった可能性がある。

ところで、石刃を剥離した No.57 と上述した No.63、および No.61 を除く「石核」と分類された資料は、規格的な剥片が剥離されていない。また、No.40「搔器」を除いて、これらの「石核」から剥離されたと考えられる剥片を素材にしたツールもない。一方で、これらの「石核」は扁平な形態であり、求心的な剥離が表裏面に及んだものである。つまり、それらの状況から、「石核」は尖頭器製作の前半段階の“ミー・ザン・フォーム”（ブランク）、すなわち尖頭器未製品であると考えられる。その意味で、No.40 は初期工程の剥片がツール素材として用いられたと言えよう。このほか、No.49「削器」についても、1 側縁を弧状に両面を平坦剥離で調整しており、尖頭器の縁部を意図していた可能性がある。使用痕が認められなかったことも含めて、No.49 もまた尖頭器のミー・ザン・フォームであると考えられる。

上述の「石核」のうち No.58～60・62・64 は、表裏面や側面に自然面を残しており、その残存状況から素材が角礫と判断される。尖頭器 No.22 についても表裏面に原礫面を残しており、素材が薄くて扁平な角礫が素材であったと言える。そのため尖頭器の素材には、剥片だけでなく角礫も用いられていたことが考えられる。なお、玉髓製「石核」No.56 についても尖頭器のミー・ザン・フォームと言え、その断面形からは剥片素材と推定される。

一方、薄手の石刃が剥離された No.57 は、その裏面に求心的な調整剥離がなされ、ゆるやかな凸面に仕上げられている。また打面の右側は、この求心的剥離により石核背部との境界が不明瞭となる。打面と背部の境界をなくし、背部全体を緩やかな凸面に仕上げるという一連の工程は、剥離される石刃との関連性が低いという点に、石刃が剥離できるボリュームを減じさせてしまっている。つまり、この求心的剥離は石刃剥離に関係する工程でなく、縦横断面の形状や厚さも考慮すれば、むしろ尖頭器

製作に関係する工程と考えられる。したがって、No.57 はほかの「石核」と同様にミー・ザン・フォームとみるべきであろう。No.57 のような石刃核から剥離された石刃が存在しないため、石刃剥離終了後のミー・ザン・フォームの転用か、面的な調整としての石刃剥離という二つの可能性が考えられる。

関連して、石核 No.59 についても、中央に2枚の連続的な縦長剥片が剥離された石刃核である可能性が示唆されている（林・上伊那考古学会編2008）が、剥離導線となる稜があるにもかかわらず、その稜を使っての石刃剥離が行われていない。また後述するが、表面中央の縦長剥片の剥離面の痕跡は、ミー・ザン・フォームを成形した際のテクニクと同じ可能性があり、No.34 の素材石刃を剥離したテクニク、すなわち有機質製ハンマーの直接打撃と異なっている。そのため、No.59 もまた「石核」ではなく、ミー・ザン・フォームとみるべきと言える。なお、本遺跡の石刃は、総じて剥離開始部が明確な弧を描くリップで、バルブの発達が弱く、剥離後石核前面角（大場2016）が浅いなどの状況から、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が高い。

これらの「石核」からは、厚手で大型の剥片を剥離して、扁平な楕円体を製作しているのが読み取れる。

(3) 成形

尖頭器の表裏面の面構成からは、少なくとも三段階の面構成が認められる。1 つ目は中央の比較的大きな剥離群、2 つ目は1 つ目に重複する比較的小さな剥離面群、3 つ目は縁辺部の小剥離群であり、この面構成からは段階的な製作上程が窺われる。1 つ目と2 つ目は成形で、3 つ目は整形となる。

両面調整の成形の際には、縦断面形に対して中間部が凹まないようレンズ状に、かつ均等に両面を減らしていかななくてはならない。なぜならば、縦断面形の中間部に凹みがあると、その凹みが折損、すなわちエンドショックの原因となるからである（大場2009）。エンドショックは、中間部に凹みあって、そのうえ端部付近を打撃した際に前面角の設定が不適切、あるいは調整が不十分であった場合に発生しやすい。とくに、その凹みの内部に傷や夾雑物があると、さらに発生するリスクがより高まることになる。そのため、製作時に縦断面や表面を観察することで、エンドショックをある程度予知することが可能となる。もちろん、内部の傷や夾雑物は確認できない場合があるので、完全には回避できない。しかし、つねに縦断面形の中間部の凹みや傷、夾雑物に気を付け、適切にどう割り進めて行くかを考えながら作業を進めていく必要がある。

中間部の凹みが少ない No.15・16・26・29 は的確に、かつエンドショックを警戒しながら剥離を進めていった可能性がある。それら以外の尖頭器は、縦断面形に大なり小なりの凹みがあり、エンドショックに対して油断していた、あるいは生じる前に作業を止めた可能性がある

る。なお、完成品の縦断面形に凹みがある場合は、その最凹部が薄くて折れやすくなることから、刺突具としての耐久性にも問題が生じるとされる。

エンドショックの典型的な剥離面は、打点がなく、剥離開始部が不明瞭であるものの、傷や夾雑物から剥離が発生し、開始部から中間付近まで比較的平坦に広がって、末端付近で大きくヒンジを呈する。末端付近は、ヒンジにより舌状に張り出す。エンドショックの側面形は、器面に対して直角になる。折れ面が観察できるNo.19の上面と20の下面は、折れ面の状況から、傷や夾雑物によるエンドショックの可能性はある。なお、エンドショックは1か所、あるいはまれに複数か所で生じる。No.20は複数か所で生じた例と思われる。

(4) 調整

「搔器」No.41は、背面構成と厚さから素材が中間段階に剥離されたポイントフレークであるが、打面部が残存していない。そのため打面や前面角に対する調整について知ることはできない。しかし、本遺跡のような尖頭器を製作する場合は、打面と前面角（打面と作業面のなす角度）の調整が不可欠であると経験的に言える。したがって、調整については経験に基づく想定となる。

その調整とは、まず剥離導線となる稜線と作業面の盛り上がりを決める。作業面が平坦な場合は、小型ポイントフレークを剥離して、作業面上に盛り上がりを作る。そして、その延長上の縁辺部に打面を凸状に作り出す。前面角は約70°～80°に設定。場合によって、打面の両端部の作業面側に小さなノッチを入れる。さらに、前面角に対してハンマーストーンなどでおもに側縁と平行方向に擦りをかけて、少なくとも微細剥離と稜の潰れが生じる程度に鈍くさせる。それぞれの調整には役割があり、凸状の打面はハンマーが当たった際に力を1点集中させること、打面両端に入れたノッチは剥離の幅を規定させること、前面角を鈍くさせるのは打撃時における前面角のクラッシュを防ぐこと、および有機質製ハンマーの損傷を抑えることなどの意味がある。

このほか、ポイントフレークの剥離をすると、その末端が折れて残るごく薄いステップ、すなわち末端片が石器素材のネガ面側の末端に残ることがよくある。この残存末端片は、次の剥離の際に更なるステップを生じさせ、器面の形状に影響を及ぼしてしまう。そのため、残存末端片を爪で引っ搔くなどして取り除く必要がある。玉髓製のNo.15や下呂石製のNo.21は、残存末端片が少ないため、製作時に残存末端片を取り除いていた可能性がある。対して、No.28の裏面の下部には、比較的に大きな残存末端片が認められるため、残存末端片の除去を実施しなかったか、あるいは不徹底であった可能性がある。

両面調整において、基本的には1回の剥離ごとに打面と前面角の調整を抜きにして、本遺跡の尖頭器のような尖頭器を作ることができない。1回の調整にかかる

時間は、およそ30秒前後、場合によって1分、あるいはそれ以上となることもある。とくに後半段階では、前半段階の調整よりも入念する必要がある、その分の労力と時間が費やされることになる。どこをどう割るかという思考、および数十から数百回に及ぶ調整と打撃回数を考慮すれば、1点の尖頭器製作にかかる時間は、2時間程度、あるいはそれ以上となる。丁寧な作りほど、時間がかげられることになる。逆に、短い時間で製作された尖頭器は丁寧さに欠け、分厚くて雑なつくりとなる。

(5) 整形

尖頭器の整形は、5～10mm程度の小剥離によって外形や側縁の調整、稜線上の高まりを減じる調整が行われる。とくに、No.18・15・21の両側縁は、整形によってより直線的となる。整形の剥離面をみると、剥離の連続性・規則性や剥離面形の規格性は、あまり看取されない。

(6) 小 結

あらためて未製品、および製品の面構成を検討すると、当該尖頭器のメトードは、①剥片、角礫、石刃核を素材とし、②周縁の荒割りから、③平坦で長軸を越えるような大型ポイントフレークの剥離、④長軸に届く程度の小型ポイントフレークの剥離、⑤外形と側縁を整形する小剥離といった①～⑤の工程があることが判断される。両面調整では、素材から荒割り、大型・小型ポイントフレークの剥離、そして整形と段階的にメトードを進めていくのが基本である。本遺跡の尖頭器についても、例に漏れず同様のことが言えよう。なお、側縁の振れを防ぎ、かつ平面形を左右対称にするうえでは、側縁や平面形を適時整える必要がある。

一方で、完成品と未製品を残して動作連鎖が止まってしまっていることには、不自然さを感じざるを得ない。

3-2 テクニーク

(1) メトード①と②

石核 No.63から剥離された素材剥片は、幅14cm程度、厚さ3cm程度の厚手剥片と推定される。No.63の大型剥片を剥離した剥離面に残る剥離開始部には、大型の割れ円錐とバルブが発達し、とくに円錐上にもみるはっきりとしたリングや円錐から生じているフィッシャーが認められる。これらの痕跡からは、相当大きな力が加わったと考えられる。経験的には、1kg程度の重さの硬石製ハンマーによる直接打撃の可能性が考えられる。その意味で、安山岩製敲石であるNo.51(984.3g)と完形であれば1kg程度とみられるNo.52(667.0g)は、適当な材質と重さと言える。石材別では、剥離性に富む黒耀石や下呂石では1kgが適当であるが、それらよりも剥離性が劣る玉髓や頁岩では、1kg以上の重さが必要となる。ただし、ハンマーを振るスピードを上げれば、1kgでも可能ではある（その分、打撃位置の精度に問題が生じる）。

メトード②を示すNo.57の裏面に残る剥離面の剥離開

始部は、明瞭な1～3mm程度の割れ円錐、発達したバルブ、剥離面の深さ、剥離面全体の波状面などの痕跡から、石製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる(大場2016)。ハンマーの硬軟については、剥離性に富む黒耀石に対して硬すぎる石質では、打面部を砕いてしまいやすくなるため、軟石を用いていた可能性が考えられる。(2)方法③と④

残念ながら、方法③の大型ポイントフレークを剥離した剥離面の開始部は、確認できなかった。しかし、尖頭器中央付近に残る大型ポイントフレークの剥離面の平坦さと末端付近の波状面からは、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる(大場2016)。経験的に、ハンマーの重さはおよそ400～600g程度のものが想定される。素材保持は、太腿上か掌中において剥離が深部まで届くようにするために、素材を50～60°に傾ける必要がある(大場2007)。掌中の保持でも、剥離進行のブレを防ぐためにも、保持した手の甲を太腿上に置くなど保持を強化する必要がある。ハンマーは、遠心力を利かせるために肘の回転を利用して振る。基本的には、ハンマーの端部を側縁部に引っかけるような打撃、つまり接線打撃となる。また、剥離には大きな力が必要となるため、ハンマーの振りや速度が大きくなる。あるいは、重めのハンマーを用いる。そのため、打撃位置の精度とともに、大きな力を加えることで生じる素材の折損を恐れない勇気が求められる。素材が薄くなればなるほど、長時間かけて製作したことが無に帰さないためにも、技と度胸が必要となる。

方法④の小型ポイントフレークの剥離は、リップとなる剥離開始部、発達しないバルブ、末端の波状面などの痕跡から、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が高いと考えられる(大場2016)。その際には、ハンマーの重さが200g程度のもを使用する、あるいは大型ポイントフレーク剥離で使用するハンマーと同じ重さで、かつ力を弱めて振るといった工夫が必要となる。ハンマーの振り方は、大型ポイントフレークの剥離の際の振り方よりも振り方や速度を弱めた接線打撃となる。素材保持は、太腿上か掌中において素材を水平にして行う(大場2007)。

(5)方法⑤

黒耀石製と下呂石製、および頁岩製における方法⑤については、剥離開始部位置と剥離面形の規則性・規則性の無さ、剥離開始部の砕けなどの痕跡から、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が高い(大場2016・2017)。最長で形の整った下呂石製 No.18は、側縁が直線的に整えられているものの、右側縁の先端部がわずかに振れている。仮に押圧で整形した場合、この振れの修正は容易である。一方で直接打撃では、この薄い先端部を欠損してしまう恐れがある。つまり、あえてこの振れを修正しなかったと考えられ、このことが押圧で整形しなかったことの裏付けとなろう。玉髓製については、

No.15に認められる砕けていない剥離開始部などの存在から、押圧の可能性も疑われる。しかし、剥離開始部位置と剥離面の規則性・規格性の無さからは、やはり有機質製ハンマーの直接打撃による可能性のほうが高いと考えられる。

その整形の際のテクニックについては、ハンマーは小型ポイントフレークの剥離で用いたものと同等、ないしそれ以下の重さのものを用いる。ハンマーを振るジェスチャーは、縁辺を擦り取るようなイメージで行う接線打撃となる。素材保持は、素材を水平にだして作業面側に親指や人差し指など指の腹を沿わせる。作業面を指の腹で覆うのは、剥離の拡散やステップの防止し、さらに剥離を薄く伸展させるなどの効果がある。この保持の仕方は、刃部を作る二次加工や石核調整などの際にも用いる。

3-3 製作者の技量

(1)幅と厚み

上述したように、幅と厚みはまとまる傾向にある。両面調整では、元の素材の長さや幅を縮めながら、薄くしていく。そのなかでも、幅の減少を抑えながら厚さを減じていくのは、長さを維持するよりも技術的に難しい。なぜならば、両面調整は長軸に対して直交方向に進めていくのが基本であり、打面・前面角を作る分と、ポイントフレーク自体の剥離で減少する分とで長軸側よりも短軸側のほうが、減少幅は大きくなる。そもそも、長さのあるポイントフレークを剥離すること自体が難しく、幅があるほど中央の厚みを減少させるのが難しくなる。さらに、薄くなればなるほど素材が軽くなって打撃時に素材が動いてしまうので、剥離自体が生じにくくなる。また、打撃力が強ければ、末端がウツルパセを起こして打面と対向する縁辺を大きく巻き込み、平面形を損なってしまうオーバーショットによる事故も起こしかねない。そのため、幅と厚さは、技量を測る基準となる。

絶対値ではなく、また剥離性の高いと剥離性が劣る石で数値が異なるものの、およそ幅が5cm以上で、厚さが1cm、あるいは1cmを下回る場合は、かなり難しく、上級者の手による作とみていい。幅が5cm程度で幅が1cmの場合は、中の上程度の技量。幅が5cm、あるいはそれ以下で、厚さが1cm以上であれば中級。同じような幅で、厚さが2cm、あるいはそれ以上であれば初級といったところである。

したがって、幅と厚さの点において本遺跡の尖頭器は、総じていえば中から中の上の技量といったところである。具体的なところでは、No.19は幅が4.10cmで厚さが0.95cmであり、幅と厚さの点でもっとも評価が高い。しかし、エンドショックを起こしているため、この点で評価が大きく下がる。最長のNo.18は、幅が4.70cmで厚さが1.35cmであり、剥離性に富む下呂石素材にしては、やや厚い印象を受ける。そのため評価は中の上。No.55は幅が4.30cmで厚さが2.80cmで、まったく厚さが

減じられていないことから、評価が最も低い。ほんの数mmの差と思われるかもしれないが、そのわずかな差こそ難しいのである。

(2) 剥離の連続性

剥離を一方方向に連続的に実施するのは、素材の形状や先行剥離の状況が起因してしまい、以外にも難しい。部分的にではなく、とりわけ器面全体に実施することは、相当に難しいと言える。連続的な剥離を実施するには、器面を常に規則的な形状にしなくてはならない。それは、押圧でも直接打撃でも同様のことが言えるが、とくに直接打撃でこれを実施できれば、かなりの上級者と言える。本遺跡の尖頭器の場合、残念ながらそうした剥離の連続性、規則性を看取することはできない。

また、作業面側に指の腹を沿わせた保持での有機質製ハンマーの直接打撃では、作り出した剥離面の連続性や規格性や刃角のでき具合が、技量判断の基準となる。

(3) エンドショック

上述したように、エンドショックの発生を予測することができる。この予知ができるか否かが技量の分かれ目であり、エンドショックを起こしてしまうのは、それに対する油断や無知が原因である場合が多く、技量が中級かそれ以下であったと言えよう。上級者であれば、縦断面形の中間部を凹面にならないよう剥離を進め、そして傷や夾雑物が中間付近にあったとしても、エンドショックを回避することができる。

(4) ヒンジとステップ

基本的にヒンジやステップは、表面形や側面形の規則性、剥離面の並びや連続性を損なわせる。また、厚みを減じるうえでの障害にもなる。一定程度の上級者であれば、基本的にヒンジ・ステップを回避して割り進めるが、仮にヒンジ・ステップになったとしても、問題部分を除去しながら器面を滑らかに仕上げていく。No.15・19・21・24・29は、比較的に大きなヒンジ・ステップが少ない。そのため、これらはヒンジ・ステップを回避して剥離を進めた可能性もある。あるいは製作過程でも問題部分を除去していたことが想定される。それに対して最長のNo.18は、ややヒンジ・ステップが目立ち、ヒンジ・ステップの回避や除去が徹底されなかった可能性がある。

ヒンジ・ステップの除去の対処は、(1) 対向する打面から剥離を加え、末端に問題部分を取り込む(小菅2004)、(2) 問題部分の剥離面の両端の稜線を直線的に修正して、その両端の稜線を剥離して除去する、(3) ヒンジ・ステップとなった突出部の剥離、叩き潰し、擦りなどで突出をある程度なくし、問題部分に向かう剥離導線を作って、剥離して問題部分を一気に取り去るなどが挙げられる。対処は、1つだけでなく(1)から(3)を組み合わせる場合もある。ほかに、(4) ヒンジ・ステップを起こした剥離面を打面にして問題部分の手前まで除去、打面を入れ替えて問題部分を剥離すること(小

菅 前掲)もあるが、形状を大きく損なうため、極力したくない対処である。ちなみに、(3)は裏技的調整で、遺物としてまだ確認していない。今後、製作址などで発見されることを期待したい。

ほかに、No.18の縁部にはステップを呈した複数の小剥離が重複する部分や、剥離開始部から放射状にフィッシャーが拡がるステップを呈する剥離面がみられ、そのような剥離面は打撃時にクラッシュを起こしてしまった痕跡と言える。同じようなクラッシュ痕は、No.18以外にも多くの資料で確認できる。

3-4 考察

上述の観点から18点の尖頭器に対して点数化し、総合的に評価すると、最も高いIから、最も低いVの5つの段階の技量が読み取れる(表1、図2)。

I : 15・21・29

II : 16・17・18・24・26・27・28

III : 19・22・23・30・31

IV : 14・20・25

V : 55

もっとも評価が高いのはNo.15で、逆にもっとも低いのはNo.55となる。これらの読み取った技量差からは、5人の作り手の存在が予想される。あるいは、IとII、IIIとIVの間に明確な差がないことから、作り手が3人の可能性もある。少なくとも本遺跡ではI・IIが上級者で、III・IVが中級者、Vが初級者と言える。つまり、本遺跡に残された尖頭器は、技術学分析により、上級者と中級者と初心者の3、ないし5人によって製作された可能性が考えられる。現実的には、3人が妥当であろう。

製作時間は、1点につき2時間程度。単純に、18点×2時間として、のべ36時間程度と考えられる。集中力や体力などを考慮し、1日に1人が2点製作したとすれば、のべ9日間となる。たとえば製作者が3人として、上級者がI・IIの10点を5日間で製作している間に、中級者がIII・IVの8点製作し、初級者がNo.49とNo.55の2点を製作(練習・遊び)したとも考えられる。

一方で、本遺跡には、完形の尖頭器とともに製作途中のものも持ち込まれていることが言える。厚さが1.1~1.9cmに仕上げられた尖頭器は、非常に壊れやすい。狩猟での刺突はもちろんのこと、地面に落とただけでも簡単に壊れてしまう。だからこそ、尖頭器の製作址では大量に尖頭器を製作するのであり、遠隔地に行く際には完形品とともに未製品も一緒に予備として携帯していたと考えられる。運搬痕跡が認められたNo.19・20・31(堤2018)のほかにも、No.25・40・49・55・58・59・60、また可能性としてNo.23・64に同様の痕跡が認められることから、完成品と未製品の携帯を裏付けていよう。対して折損品であるNo.19・20は、切削具などに使ったようであったために、持ち込まれたものと思われる。

一方で、もっとも技量が低い No.55は、何かしらの思い入れがあったことから、遺跡内に持ち込まれたのだろうか。

上述したように、幅広に対して厚さを薄くすることは、技術的に難しい。年代的に近い大型槍先形尖頭器の製作址である山形県日向洞窟遺跡西地区（隆起線土器段階：佐川・鈴木編2006）では、幅6cmで厚さ1.2cm、幅5cmで厚さ1.0～1.1cm、幅4cmで厚さ0.6～1.0cm、幅3cmで厚さ0.5～0.7cmの尖頭器が、そして北海道奥白滝1遺跡（北海道埋文2002）では、両面調整剥片の接合資料である Sb-22～25母岩資料61・接合資料2314から、推定で25cm×8cm×1.5cmの尖頭器が製作されている。さらに宮城県野川遺跡（多縄土器段階）では、デポより出土した大型両面調整石器は、22.5cm×10.1cm×1.06cmとなる（仙台市教委1996）。いずれも、本遺跡の尖頭器より幅に対して、厚さが薄い両面調整石器が作られている。また、これらの尖頭器には、大きなヒンジやステップが少なく、剥離の連続性が認められるものもある。つまり、これらは本遺跡の尖頭器に比べて、より製作の難易度が高い尖頭器と言える。もちろん、これらの尖頭器と本遺跡の尖頭器は、詳細な時期や地域などのコンテキストが異なっており、単純に同列的に扱うことに問題があるが、日向洞窟遺跡西地区と野川遺跡の資料からみれば、時期が下るにつれて両面調整技術が技術的に向上していることが考えられよう。

5. さいごに

本遺跡の槍先形尖頭器は、角礫か硬石製ハンマーの直接打撃より割り出した大型剥片をおもな素材に、石製ハ

ンマーの直接打撃で荒割りし、有機質製ハンマーの直接打撃で大型ポイントフレークの剥離から小型ポイントフレークの剥離で成形し、有機質製ハンマーの直接打撃で整形して仕上げるといった一連の動作連鎖が読み取れる（図1）。技量差からは、5つのレベルが認められ、技量の異なる3人、ないし5人の製作者の存在が、そして18点の製作時間は36時間程度と想定される。

技量判定でIとなった尖頭器は、たしかに本遺跡において逸品と言えよう。製作者にはその技術に対して大いに敬意を表するものの、経験的に言えば数年の鍛錬を積むことで、同様の尖頭器の製作が可能になると言える。スペシャリストが作る石器とは、50cmにも及ぶ石刃や、長さ30cm・幅8cmで厚さが1cmを下回るような両面調整石器、マヤ文明の「エキセントリック」のような製作が極めて困難なものである。したがって、当該尖頭器は上級者の作とはいえども、スペシャリストの作と評するほどのものと言ひ難い。逆に、経験を積むことで習得できる技術であることを考慮すれば、本遺跡の尖頭器製作技術は、狩猟、婚姻、力の誇示などの生存、および社会的な競争のうえで必須の技術であったと考える。

謝辞 今回の発表にあたり、下記の方々より諸々ご教示、ならびにご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

熊谷亮介、後藤信幸、鈴木 雅、堤 隆、濱 慎一、前田幸治（五十音順、敬称略）

※引用文献については、紙面の都合により省略する。

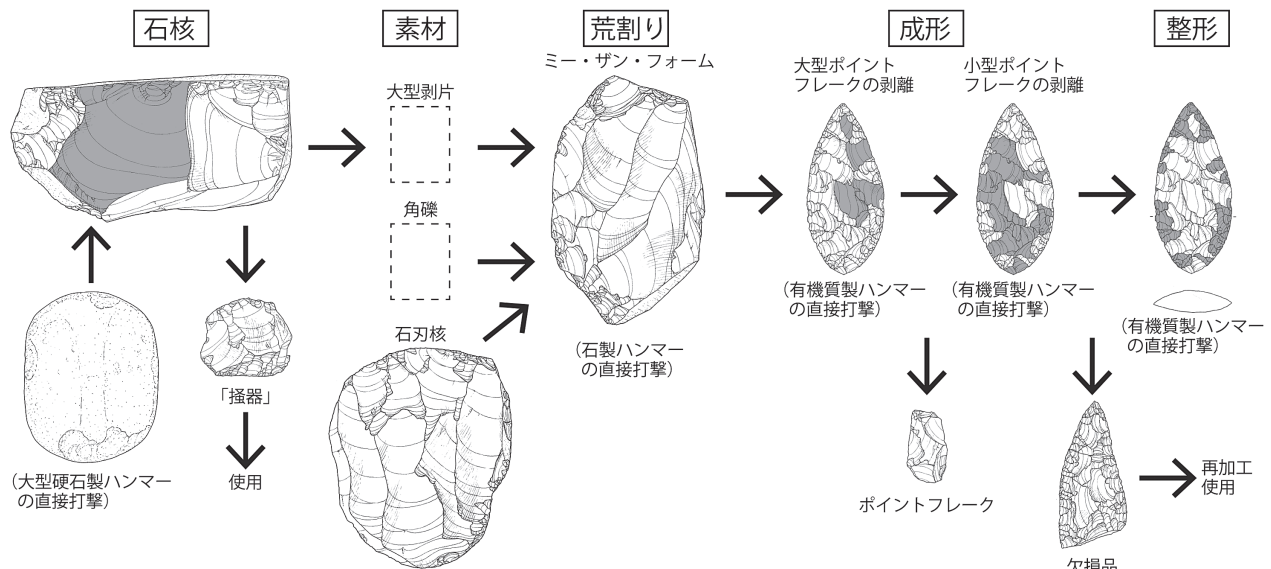


図1 神子柴遺跡における黒耀石製槍先形尖頭器製作に関する動作連鎖模式図

表1 槍先形尖頭器の評価表

No.	石材	長	幅	厚	厚/幅比	厚/幅点	左右対称性	側面観	側縁の通り	横断面	ヒンジ・ステップ	エンドショック	合計	技能レベル
14	玉髄	15.35	4.80	1.50	0.31	3	3	2	3	2	2		15	IV
15	玉髄	17.10	4.95	1.50	0.30	4	5	5	5	4	5		28	I
16	玉髄	13.95	4.80	1.85	0.39	2	5	5	4	4	4		24	II
17	凝灰質頁岩	17.60	4.65	1.45	0.31	3	5	4	5	4	4		25	II
18	下呂石	25.10	4.95	1.35	0.27	4	5	3	4	4	3		23	II
19	黒耀石	8.05	4.10	0.95	0.23	5	0	4	4	4	5	-5	17	III
20	黒耀石	9.05	4.15	1.20	0.29	4	0	3	3	2	4	-5	11	IV
21	下呂石	16.45	4.70	1.20	0.26	4	5	3	5	4	5		26	I
22	黒耀石	14.25	4.15	1.50	0.36	2	4	3	3	3	2		17	III
23	黒耀石	11.95	4.05	1.50	0.37	2	3	4	4	1	4		18	III
24	黒耀石	10.95	4.70	1.35	0.29	4	5	4	3	3	5		24	II
25	黒耀石	12.35	4.10	1.70	0.41	1	3	3	2	1	1		11	IV
26	珪質頁岩	11.30	3.95	1.10	0.28	4	5	5	4	5	2		25	II
27	凝灰岩	9.60	2.50	1.15	0.46	1	5	3	4	4	4		21	II
28	黒耀石	10.55	4.70	1.35	0.29	4	4	3	3	4	3		21	II
29	黒耀石	9.95	4.25	1.10	0.26	4	5	5	3	4	5		26	I
30	黒耀石	9.55	4.50	1.30	0.29	4	3	2	2	3	4		18	III
31	黒耀石	8.60	4.35	1.10	0.25	5	3	2	1	3	4		18	III
49	黒耀石	8.18	6.27	3.50	0.56	1	1	1	1	1	2		7	V
55	黒耀石	8.50	4.30	2.80	0.65	1	2	1	1	1	3		9	V

※5段階評価（1から5へ評価が上がる）。

※実行できていない場合や、重大な失敗をしている場合は-5。

※厚/幅点→0.2～0.25：5点、0.26～0.3：4点、0.31～0.35：3点、0.36～0.4：2点、0.41～：1点

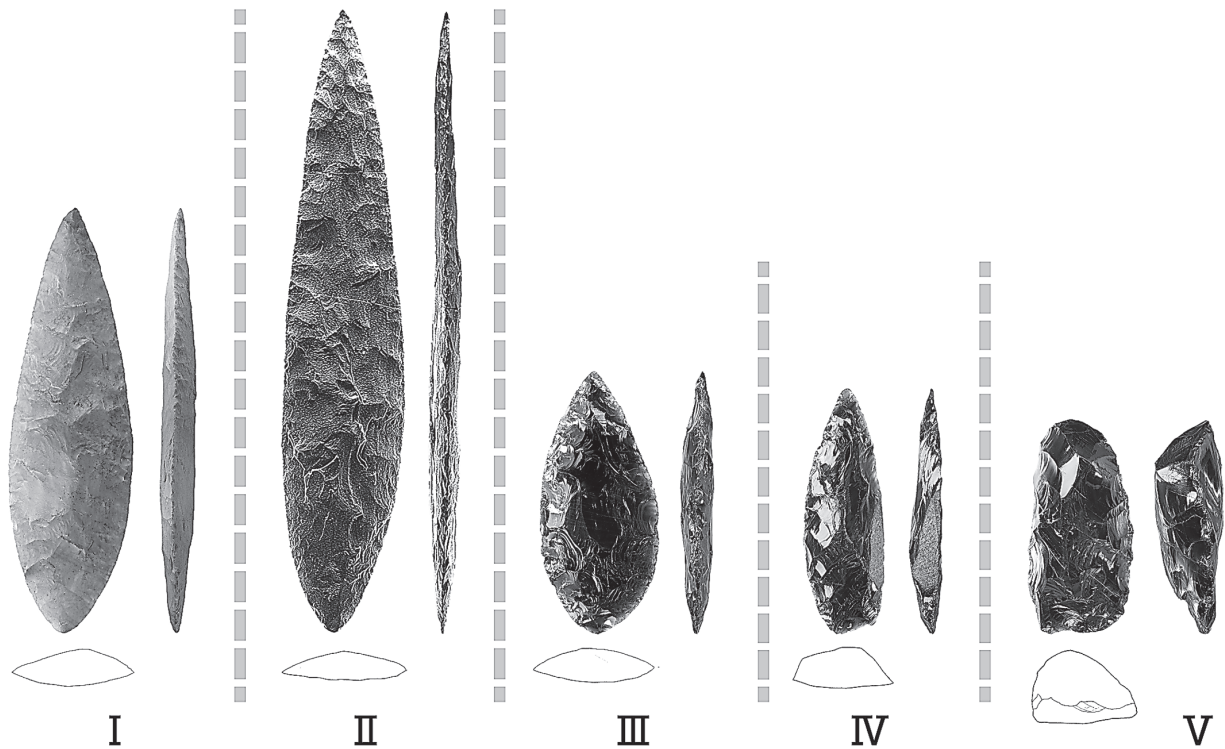


図2 技量レベルごとの槍先形尖頭器

1. はじめに

1958年の11月8日に神子柴遺跡に最初の発掘調査のメスが入られ、その直後とも言える1961年には雑誌『古代学』第9巻第3号に藤沢宗平・林茂樹両氏による「神子柴遺跡：第一次発掘調査概報」が投稿され、石斧や石槍を中心とした優美で重厚な神子柴石器群の概要がいち早く公表されるに至った。以後、多くの研究者は基本文献たるこの古代学報告に依拠しつつ、神子柴遺跡に残された石器群の由来・機能・帰属時期等々の問題について、半世紀以上の長きに亘る研究深耕を試み続けたのであった。この間に研究者の誰もが待ち望み希求した、そして恐らく調査者であった林茂樹氏が最も待ち望んだ正式報告書『神子柴 後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究』（2008信毎書籍出版センター）が、調査後半世紀の年月を要して刊行されるに至った。今、我々は上梓された大部の報告書に依拠して神子柴遺跡発見の経緯や石器群の出土状態、詳細な実測図と素晴らしい遺物写真などを分析・検討することが可能となっている。

周知のとおり、神子柴遺跡と出土石器を巡っては半世紀にも及ぶ長い学問的論争がある。第一に出土した石器群の性格付けについての問題、第二として石器群の残され方や配置等を巡る遺跡形成に関する問題、第三として石器群の系統性・組成に関する問題。そして最後に神子柴遺跡を中心とした当該期の帰属時期についての問題である。ただし、これらの問題は個別に扱われることなく、総体として神子柴遺跡の評価と密接に係わる問題として顕在化する場合が殆どであり、いずれにしても旧石器時代終末、縄文時代の起源、旧石器から縄文への移行など多くの研究局面で神子柴遺跡とその出土品を欠いた議論・研究は皆無であると言っても決して過言ではない。未だに学問的評価が定まっていないう遺物・遺跡の評価に取り組むに当たって、どこまで問題点を整理しつつ研究課題に迫り得るのか心許ないものの、本論では神子柴遺跡の報告書を導きの糸として、改めて神子柴遺跡の成因や石器群が残された背景について検討しつつ当該期の石器群を巡る社会的関係についての言及も試みたいと考えている。

2. 石器群構成の単位

既に神子柴遺跡については幾つかの論考にて言及したところであり、また遺跡と残された石器群に関しての認識については2004年に指摘以後（栗島2004）、基本的に

著者の考えは変わっていない。1958年の神子柴遺跡調査以後、東日本地域を中心として膨大な発掘調査を通じて当該期石器群の発見・蓄積もなされてきたが、同様な石器群の構成や分布を持つ遺跡はほぼ皆無に等しく、唯一、類似するとされる唐沢B遺跡にしても神子柴遺跡と比較した場合の石器群の組成内容や分布構成等々の点で異質との印象も拭いがたい。いずれにせよ広く日本列島全域を見渡した場合でも特定の類似要素を備えた遺跡・石器群は多数存在するものの、全体的な石器群の組成・構成・分布に於いて比肩し得る比較資料は未だ発見に至っていないと言わざるを得ない。

神子柴遺跡の石器群は是までも再々に亘り繰り返し指摘されてきているように、当該期に一般的に認められる石器組成である石斧、石槍、搔器、削器類、石核、砥石などが出土してはいるものの、各石器形態の大小バラエティの存在と技術的な完成度の高さ、非在地系石材を用いた多様な石材構成など突出した様相を持った石器群でもある。加えて後に論争の火種ともなったのが完成品の占める圧倒的数量とそれらの特異な出土状態が研究者を悩まし続けてきた点は改めて指摘するまでもない。圧倒的多数を占める石槍や搔・削器類、そして石斧、石核などが相互に、或いは個別に幾つか有意な分布上の纏まりを有している点については疑いない。だが、その分布の意味や単位、生成の要因・背景についての評価は定まっておらず、そもそも根本的な遺跡成因についても研究者の間での評価は統一されていない。

ところで従来の研究で唯一、検討視点として欠落していたものが石器群形成の時間幅という問題点であったように感じる。神子柴遺跡の石器群は数カ所の石器集中（スポットと呼称）に囲まれて中央が空白になる、或いはC字状の南側に開口した石器分布などと指摘されることがあったが、しかし略円形、或いはC字状の分布にしてもこれが同時に形成されたという確証はないし、その可能性も低いものであったと考えざるを得ない。本論では新たにこの点に目を向けるなかで遺跡形成の問題に切り込んでゆこうと思う。最初に石槍集中のスポットb、石斧と搔器、黒曜石塊からなるスポットd・f、そして石槍、搔器、削器等で形成されるスポットcを取り上げて問題点の整理を順次進めてゆくことにしたい。

最初に石槍が集中するスポットbに注目する。石槍5点から構成されるこのスポットは出土写真からも明確に指摘できるように黒曜石製石槍は除外して評価すべきであり、この上位面に浮くようにして出土してい

る石槍 No.28については、寧ろ近接して出土している No.29、30などと共に一体的な関係性を有していたものと考えている。石材は無論のこと相互にその形態や製作に関わる技術的特徴も3点は酷似しており、採取・加工に際しての個人的関与が強く想定される。同じ意味で No.14～17と番号の付され凝灰質頁岩を含む玉髓製の石槍4点についても、石材系統の由来と共にその形態及び製作技術に見る同一（酷似）性は看過することができない。しかも出土状態を目を向けると No.14は器体がやや斜位状態で出土していることが写真からも明瞭に確認でき、他石槍がその器体の一部（先端部）を重ねるように検出されていることも考慮するならば、これらの石槍が意識的且つ計画的に纏められ、且つ小さなピット等に保管・埋納されていた蓋然性のたかいことを示唆している。この玉髓製石槍の集中箇所近接して黒曜石製品が北側に並び、その西側に平行するように珪質頁岩・玉髓製の搔器が分布し、スポットの東側には刃部を西側に揃えた磨製石斧が並べられている点にも注目しておこう。

このように石器群が単に纏められていただきでなく、明らかにその保管・埋納の状態を彷彿とさせるスポットがここ神子柴遺跡には他にも二か所存在している。先ず一つが剥片と搔器、そして黒曜石塊（破片）から構成されるスポット d・f である。当該箇所の特徴として先ず注目しなくてはならない点は搔器類の出土状態にあり、最初に南北方向に黒曜石製搔器（No.42）が置かれ、それに直行するように大型の珪質頁岩製搔器が積み重ねられている。その珪質頁岩製搔器に直交（黒曜石製搔器に平行）するような位置に玉髓製削器と磨製石斧が並んで出土している。注視すべきことはいずれの剥片石器も裏返しの状態、即ち石器主要剥離面が上面に向けられるような置き方がなされていることから、何らかの意図的設置を予想せざるを得ない。加えてこれら石器群のスポットの南側に隣接して径50cmの範囲に黒曜石塊（17片）の分布が形成されている。このスポット f を含めたこれらが相互に分布だけでなく形成背景としての単位制を保持していた蓋然性のたかい点については、黒曜石製の搔器42と共に削器50、そして大型の搔器34が互いに接合関係を成立させていることから肯首されよう。一連の連続した剥片剥離技術の基に製作された製作由来を一にする素材剥片が、時間を超えて石器へと仕上げられ持ち運ばれたうえでここ神子柴遺跡内の同一スポットへと残された意味は決して無視すべきではない。

もう一つがⅢF区を中心分布する石槍、搔器、削器等を含む石器集中スポット c である。このスポット c はその中央部に下呂石製石槍と大型の珪質頁岩製削器が軸を揃えて置かれ、その長軸方向の両端部上位面に黒曜石製・玉髓製削器が上位に重ねられている。これらに直交するほぼ西側の位置には、珪質頁岩製の石槍と搔器とがやはり長軸を揃えつつ一部が重なった状態で出土した様子が見られ、更に黒曜石製の大型削器を挟んだ左右

（東西）方向には珪質頁岩製の柳葉形削器各1点、打面部を内側にして「ハの字状」に配置した様子を確認することができる。加えてこれらの纏まりを取り囲むように4点の石槍と1点の搔器が出土しており、いずれもその軸方向を同じくして基軸となる石槍・大型削器とは直交するような関係性を保持していること、また碧玉製搔器は裏面側を上にして出土している点は注視されよう。このスポットの東南50cm程の場所には2点の凝灰質岩製小型磨製石斧、北側には珪質頁岩製削器と玉髓製の削片がそれぞれ1点ずつ分布している。

神子柴遺跡には上記した3箇所のスポットの他にも、報告書中では黒曜石製石核が3個並んだスポット e や石斧を中心に砥石、石核、石槍などを含むスポット a などの存在が指摘されている。これら総ての石器集中単位としてのスポット群の有機的関連性や構成上の特徴を理解することは極めて困難であることは、これまでの長い学史が雄弁に物語っている通りである。そうしたなかで今回、3箇所のスポットを取り上げることによって神子柴遺跡の形成と構成に関する幾つかの問題点について一つの解釈の糸口が見えてきたのではないかと思う。

3. 遺跡の構成実態

神子柴遺跡の石器群分布の構成では、スポット b に典型的に見いだされたような単一器種からなる単位形成が認められる。最初に確認したように石槍4点は玉髓・凝灰質頁岩という日本海側に産出する稀少石材を用いていることで共通するばかりでなく、入念に加工されて全体のプロポーシオンでの形態的斉一性が顕著である。しかも No.15、16と No.14、17は尖頭部が向き合うように並んだ印象を与えているうえに、No.17の石槍については明らかに一部が重なって No.15、16の上に設置されており、また No.14はやや斜めの状態で出土している。扁平な形態的特徴を持つ石槍がただ偶然に置かれただけでこのような出土状態を持つことは到底考え難く、著者はピット状遺構内への埋納行為を考えている。

この4点の石槍に隣接して3点の黒曜石製品（No.28、29、30）が出土していることは先に注視したとおりであるが、蛍光X線による原産地分析の結果はいずれも諏訪星ヶ台群の黒曜石を用いていることが判明しており、形態的な類似が石器自体のライフヒストリーを通じて保持し続けられたことを証明している。翻ってみれば、スポット b とその周辺に石槍群からは遠い石材原産地に由来する石器群が、製作後の持ち出し・運搬という時間的経緯のなかでその単位性を崩さずに神子柴遺跡内へと運び込まれたことを明示している。スポット e の黒曜石製石核やスポット a に見る石斧などについても同様に理解されなければならず、遺跡から遠く離れた地域で産出する石材とその加工に見られた製作技術、形態などの単位制が崩されることなく、遺跡内へと持ち込まれ配置・保管・埋納されている現象こそが神子柴遺跡

の特徴の一つなのでもある。

次にスポット d・f について取り上げてみると、ここにも興味深い幾つかの事実が浮かび上がってくる。最初ここでは略南北軸方向に黒曜石製搔器 No.42 が設置され、その東側30cmに削器 No.50、更に東50cmには大型搔器 No.34 が置かれており、この3点は諏訪星ヶ台産の黒曜石を素材とし互いが接合関係を成立させている。No.42の搔器は末端がしの字状となる大型剥片を素材としているものの、その湾曲した主要剥離面側を上面にして検出されており、何らかの意図的配置である可能性が濃厚である。この上に直交するように置かれた珪質頁岩搔器も裏面を上にして置かれ、さらに90度に交わる位置に玉髓製削器が同じく裏面を上にして検出されている。同一器種でありながら並ばせることなく敢えて交叉させて設置された要因としては異種石材を素材としている点以外は考えられず、しかもその刃部を下方に設置(裏返)して重ねる行為には何等かの意図・意味があったと推察するのが妥当であろう。更に看過できないのはその玉髓製削器に平行するように置かれた磨製石斧であり、その南側に撒かれるように分布する黒曜石塊(和田鷹山群)の破片群である(この資料群についてはバラバラに割れたとされているが、剥片・破片の類が一切発見されず、しかも現存する17点が形態・重量に均一的様相が確認できる点は看過できない)。こうした石器群構成の形成背景に関しては推測の域を出るものではないが、同一器種でありながら石材を異にした場合には何らかの差別化がなされていたのであろうか。また、連続して剥離された剥片を素材に製作された複数の搔器がそのまま持ち込まれ、同じスポット内に置かれている事実も重要であり、スポット形成の時間的限定性を強く支持すると同時に総てのスポット形成が同時的ではない可能性も示唆している。

さて、スポット c は興味深い石器群構成と配置を持つ。中央部に異器種で異種石材である石槍 No.21(下呂石)と削器 No.44(珪質頁岩)を並べ、その両端部に同一器種でありながら石材を違えた搔削器 No.49・46を設置している。このような石器構成と配置は一部のデポにも特徴的に見られる現象であるが、ここ神子柴のスポット c ではそのような基軸石器配置に直交するように珪質頁岩製の石槍 No.26 と搔器 No.33 を設置している。凝灰岩製の石槍 No.27 もそれらに平行して置かれていると判断して良いのかも知れない。看過できないのは黒曜石製削器の両側、軸となる石槍・削器の左右に手を広げたように柳葉形状の珪質頁岩製削器が配置されていること、そして反対側に見事な碧玉製搔器が主要剥離面を上にした状態で出土した点にある。このスポットでも石器群の重なりや斜位状態の出土が確認され、更にその周囲が暗褐色土に覆われている点などからピット状の掘り込みが想定されるが、縁辺部付近に黒曜石製石槍や更にその周囲には石斧他が取り囲むように点在していることも興味

深い現象と言えようか。

4. 神子柴遺跡の機能

神子柴遺跡の石器群が在地/非在地と認識される原産地を違えた異系統の石器群に由来したものである点は研究の初期から注目され、近年では中村氏によって各系統の原産地特定研究が進んだことで石器群の構成・成立についてより踏み込んだ議論が可能となりつつある。まずは新潟県域(日本海側)に産出する珪質頁岩・玉髓を石材とする石槍、搔器、削器、石核、長野県中央部の諏訪・和田などの黒曜石を用いた石槍、搔器、削器、石核、神子柴遺跡周辺の伊那谷に産出する黒雲母粘板岩、砂石等を素材とした石斧、そして岐阜県中部の下呂石を用いた石槍、産地が不明ながら新潟県?とされた凝灰岩製の石斧。重要なことは同じ器種でありながらも石材によって明らかにその分布や配置性に食い違いが顕在化している点で、その典型としてスポット b の石槍類の存在を例に挙げることができようか。スポット c でも珪質頁岩の石槍と黒曜石のそれとは親和的とは言い難い分布状況を読み取ることが可能である。その点でスポット d に於ける搔器の在り方は象徴的でもあり、異種石材の場合はわざわざ差別化を図る為なのか交叉させて配置しているようにさえ見えることである。

石材による空間的な差別化の好例と認識されるのがスポット c の石斧である。石斧はスポット周辺に配置される傾向が強いとの印象があるが、小型の珪質頁岩製石器を中心に構成されるこの場所に付随する石斧は在地石材を用いたものではなくて非在地系石材(凝灰岩)を用いた小型の磨製石斧である。石器群の纏まりは器種や器種相互の結びつきに加えてそれぞれの石材を考慮することで、これまでとは違った切り口からの理解・解釈が可能となってくる可能性がある。このような観点から集中性を持たない単独出土資料へと目を向けると、例えば No.18 の大型石槍(下呂石製)や No.22 の石槍(黒曜石)も単独で出土し、珪質頁岩製の大型搔器 No.32、36 などと同様な分布状況を示す。これらの資料は積極的に近接した石器群との関係性を探るよりも寧ろ単独資料として石材による差別化を反映した単独分布、即ち遺跡への持ち込まれ方の違いを示していると理解すべきなのかも知れない。総てのスポットを時間的・行為的に独立した単位とは考えていないものの、数次回の石器配置や埋納などの行為が時間的経緯と共に重複した結果として略C字形状に近いサークル様の石器分布が形成された蓋然性こそがたかいたと判断する。先に指摘した同一石材を用いた石槍の形態的類似性とその分布(集積・埋納)、接合関係を成立させる搔・削器の同一スポット内での分布、石材や石器を意識して形成された埋納デポにも類似したスポット c の石器配置など、いずれもそれぞれの配置・埋納行為が単位制を帯びており、その形成は短期で相互スポット間での有機的関係性を見出し難い点については

改めて説明する必要もないであろう。従来の理解・学説では、これらスポット群の形成を共時的に捉えることを前提に議論がなされるのが通例であったが、その場合には必然的にスポット群相互の有機的な相互関係性を見出そうとする研究へと傾倒せざるを得なかったが、著者は報告書を子細に検討するなかでその可能性も根拠も希薄であるとの認識に至った。

同様な観点からすれば、大型の黒曜石製石核も同時に置かれたものではなく、No.58、60、61の3点の纏まりとNo.57、63などは時間差を持つ断続的行為の累積と見做すべきであろうか。当然のこととして石斧に関してもNo. 3、11やNo. 1、10、そしてNo. 2、4なども数次断続的な配置行為の結果、即ち遺跡形成に係る時間幅と同一的行為の反復を反映している可能性が強い。

では何故そのような断続的な行為が連続しつつも、厳格に石材別の纏まりや分布が形成され続けたのであろうか。実はそれこそがここ神子柴遺跡形成の背景であり、遺跡の果たした機能的役割であったと著者は考えている。例えば玉髓製石槍と黒曜石製石槍が同一集団によってここ神子柴遺跡へと持ち込まれたものであったとすれば、石材や製作技術に見る纏まりが製作・移動に関わる時間的経緯の過程でその単位性が崩されて当然であろうが、それではここ神子柴遺跡での単位性を保持した分布・埋納についての論理的説明ができない。石器製作の痕跡を留めない所謂「デポ」は移動の過程での仕分けや使用に伴う消費と補充のなかで製作直後の単位制は崩されて交易・消費へと転化してゆく運命にあった筈である。当該期の各地に認められるデポの殆どが製作遺跡での持ち出し用や移動経路上に設置された「石器集積デポ」であることは以前に指摘したとおりであり、そこでの石材や製作技術、特に石器形態に見る酷似性は極めて顕著となっている。しかし、ここ神子柴遺跡ではこうした括りで理解される石器集積は僅かに石槍群のそれだけであり、他には石斧、石核でそのような傾向を断片的に読み取ることができるに留まっている。

このように概観すると、ここ神子柴遺跡に残された石器群は当該期石器組成を構成する石器群が一括的に残されているのではなく、各地から継続的に持ち込まれた石器が指標となった小空間に累積的に保管・埋納されつつ互いが交換されて状況がよりその実態に近いと推察されてくる。しかも代表的な石器形態である石槍を取り上げても、石材から判断される由来・経由地は新潟方面（珪質頁岩・玉髓）、八ヶ岳周辺（黒曜石）、そして岐阜下呂付近（下呂石）と多方向へと向いた明確なベクトル差を認めることが可能となる。搔器や削器、そして石核なども加えた場合でも同様な指摘が可能と言えようか。こうした非在地系石材に依拠した石器群に対して、地元である伊那谷に産出する石材に拠って製作された石器が打製・磨製の石斧群のみであることは改めて指摘するまでもないが、注視しなくてはならない点は神子柴遺跡のな

かでほぼ唯一石斧のみが広範に、均等とも言える状況で分布形成している点であり、特に北側のC字状の分布域でその傾向が顕著である。石斧の多くは偶然なのであろうかその刃部を略西方向に揃えている傾向が見出されるが、それに対向するように石核を中心とした黒曜石製品が点在している印象を与えている。石斧や石核などの中に未製品が含まれていたり、それが剥片生産の素材である可能性を考えると、在地系と非在地系という来歴を異にした石器群が単位性をもちつつここ神子柴遺跡に残され、しかも時間的な幅を持ちつつ保持・形成されていたこととなる。当該期に於いて黒曜石原産地はともかく、珪質頁岩や凝灰岩、硬質頁岩産地までを包括的に生活領域とした集団の存在や広範な生活圏を予想することは困難であるし、神子柴遺跡を定点に据えた場合には異種石材に依拠した石器群のベクトル、即ち他地域に生活根拠を持ちつつ遊動する集団が複数方向からこの場所へと石器群の搬入を通じて目的とする非在地系石材によって製作された異系統石器の獲得を行う、そのような石器獲得行動に収斂・顕在化した遺跡こそがここ神子柴遺跡であったと判断されるのである。これまで生活跡などと捉えられることが多かった特異な石器分布を構成するそれぞれのスポットは、搬入時の集積、保管にともなう埋納、そして交換に際しての設置・展示など一連の行為・現象の累積を反映しているのであろう。

そのような意味に於いて石器群が持ち込まれた状況を端的に示しているのがスポットbであり、このような非在地系石材による異系統は纏められて（恐らく小ピット内収納）対価となる石器との交換契機を待ったのであろう。或いは彼らは既に対価（等価）と認識し、何らかの了解の基に自らが必要とした石器なり他の物資を入手してこの地を去ったとも考えることができる。そのような場合、多くの非在地系石材に抛る石器群を携えた人々が渴望して入手した石器は伊那谷に産出する石材を素材とした石斧であったと推察するのが最も妥当であろう。従来、他の石器群と同様に磨製・打製石斧群が完成品であるという点については疑われることなく受け入れられてきたが、報告書では在地系石材（黒雲母粘板岩・砂岩・緑色岩）を用いて製作された石斧類が未使用品であることが指摘されている。こうした分析結果に加え著者はNo. 2、5、11などに見られる基端部に残る自然面や平坦な剥離面などから判断して、これらの石斧が交換用の未使用・未製品であるとの見解を有している。石槍や搔器・削器製作に適した劈開性に富んだ石材に乏しい遺跡周辺の集団にとっては、それ等の入手の手段・方法として在地系石材を用いた石斧を数多く製作準備したのであろう。交換用の石斧群であったとの再評価については未使用・未製品であることに加えて、わざわざ彼らが整形・調整用に用いる敲石や砥石までも遺跡内へと持ち込み、言わばセットとしてその付加価値をも高めている点からも肯首されるであろう。

5. 石器交換の場としての神子柴遺跡

嘗て著者は神子柴遺跡を複数集団が集って石器を交換した場所であるとの認識を示したことがあった。それは当該期の生活跡と認識される神奈川県寺尾遺跡や月見野上野遺跡、勝坂遺跡、茨城県後野遺跡、青森県大平山元Ⅰ遺跡などとの比較からも明らかであるし、神子柴遺跡のような石器製作の痕跡を伴わず、完成した石器形態が纏まって出土すること、そして何よりも遺跡周辺では入手できない石材を用いた石器群、しかも複数系統のルートを介して持ち込まれた石器が多数を占めているという特異な実態を踏まえ注目したうえでの見解であった。

神子柴遺跡と共に唐沢B遺跡、そして小鍛冶原遺跡の報告書が刊行された意義は極めて大きいと言わざるを得ず、特に同じ長野県域に分布する3箇所遺跡を相互に比較することで、改めてそれぞれの遺跡の性格・機能が浮き上がってくると考えている。唐沢B遺跡には黒色頁岩を主要石材として用いた石斧群と硬質頁岩を主に用いた石槍・搔器・削器・剥片類とに概略二大別される。分布域の北側に石斧群が分布して南側を中心として非在地系石材である硬質頁岩製石器群が認められる。神子柴遺跡で見られたような注目すべき出土状態がここでも確認され、磨製石斧No.26に対峙するように頁岩製の削器が裏返して置かれている。石斧は側縁部を上にして出土しており意図的な埋設行為を伺わせている。また、ブロック1とされた石器集中の南端部では凝灰岩・頁岩製の石槍や搔器・石刃・剥片類が出土しているがその中央部には石槍が突き刺さったような状態で出土しており、このスポットは石槍を中心に石器群が配置されているとの印象を抱かせるに十分である。剥片石器に混じって大型の敲石が残されていることから、これに付随して石斧群がこの箇所に配置されていた可能性はたかく、その交換代償としてこれらの剥片石器群に意図的配置性を持たせて設置・埋納されていたとも考えることもできようか。

神子柴遺跡と同じくここ唐沢B遺跡に於いても遺跡形成が同時になされたような状況、言わば共時的背景を一切持たずに断絶を含む石器交換の累積的行為という背景を想定した方が良さそうである。大きく分けた場合でも北と南では時間差を考えるべきであろうし、石器No.7、26に見るような小さなスポットが一つの単位として機能していた蓋然性がたかいと判断される。No.7と同じくNo.4の片面加工の石槍も主要剥離面を上位として設置されているが、その対向箇所には何も検出されていない。前者の例を参考とするならば恐らくこの箇所には石斧が置かれていたと推測される。同様な見方をすればNo.16、22の凝灰岩製の剥片の在り方はブロック南側に在るNo.17、34と酷似しており、ここでは頁岩製の搔器・削器が抜け落ちていた代わりに北側には石斧が3本設置されている。頁岩製の石器が持ち去られその

代替品として、在地系石材を用いた石斧が設置されたとするのは飛躍した考えであろうか。

これら二つに遺跡に加えて興味深い調査事例がある。神子柴遺跡から更に天竜川を約20km下った同じく右岸河岸段丘上で発見された小鍛冶原遺跡からは、8点の黒曜石製石槍と1点の頁岩製石刃が採集されその内7点の石槍は「重なった状態」で発見されている。黒曜石石槍は形態的類似が著しく、その表裏或いはいずれかの面に平坦は自然面を残存させた未製品であり、蛍光X線を用いた原産地推定からは8点総てが諏訪星ヶ台産黒曜石を用いていることが判明している。原産地で製作された製品がその単位性を崩されることなく運ばれ、特定遺跡の中に埋納された好例と言えようが、著者が注目するのはここに頁岩製の石刃(搔削器素材?)が加わっている点である。頁岩製石刃の組成(単位)参入の意味することは、単純にこの石槍群が諏訪星ヶ台で製作されて8点の一つの纏まりとして包まれ一括状態のまま伊那谷中央の小鍛冶原遺跡へと運ばれたのではないことを示している。恐らく諏訪地域を生活領域にする集団が、その領域内で製作した黒曜石製品を一旦神子柴遺跡のような交換空間へと持ち込み、そこで黒曜石製品を渴望している在地集団が石斧等の提供を通じて石槍群を交換・入手したのではあるまいか。この場所ではより原産地が遠く離れた頁岩製石器の確保も可能であったことから、同時に搔器にも削器にも転用可能な石刃を獲得したと推察したいのである。

このように通常の移動生活の中での確保が困難な遠隔地域に産出する石材とそれを用いた優美な石器(恐らく当時、地域石材に適応した技術的格差が生成していた可能性がある)の確保、しかも複数の系統の石器獲得が可能となる機会と場所、そのような社会経済学的な機能を有していた空間こそが神子柴遺跡であったのだろう。唐沢遺跡Bにしても小鍛冶原遺跡にしても断言できることは、これらの遺跡を生活跡として捉えることは現実的に不可能であろう。唐沢B遺跡は散布地としての小規模遺跡が点在する高原地形の中にある。一方、河岸段丘上に位置する小鍛冶原遺跡は平成4年に周辺一帯が工業団地設置に伴って石器出土地点を中心として広大な面積を対象に発掘調査が実施されたが、その成果は「遺構、遺物ゼロという結果」であった。このような状況は神子柴遺跡と場合と全く同様で、ここでも土地改良工事に伴う大規模な調査が実施されたものの結果は僅かな遺物散布が見られただけで、肝心の石斧・石槍等の遺物や遺構の発見には至っていない。小鍛冶原遺跡にしても唐沢B遺跡にしても、そして何よりも神子柴遺跡などは人々が日常生活をおこなった通常の遺跡ではなく、普段は交わることのない生活領域を異にする人々が自ら石器群を持ち込み、保管・集積している異系統の石材・石器と交換する空間であったと評価しておきたい。そうした行為が対面的なものであったのか、或いは時間差を持つ

沈黙行為であったのかの判断は困難であるが、集積や埋納行為を伺わせる痕跡の顕在からは石器群交換が時間差を介在させている可能性を示している。恐らくスポット bなどは目的とした石器群確保の後に代替・交換を目的として集積・埋納された可能性が大きい。スポット f・dでは黒曜石・珪質頁岩製の同一器種を互いに裏向きに交叉させ、さらにその傍らに玉髓製削器と黒雲母粘板岩製石斧が配置されており、複数の人々が断続的に石器のやり取りをしたことを予想させている。裏向きに搔削器を置くことは何らかの意思表示、記号論的な意味を含んだ行為であったものと推察すべきである。

一方でスポット cではあたかも中心軸に石器を配置して、その左右に空間を設けているようにも見えるし、この目印を基準として目的とする石器群のやり取りを異なった集団どうしが進めていたのであろうか。そのように解すると北群の石斧の纏まりや黒曜石石核からなるスポット eなどはそれぞれが目的、希求した石器入手した後、彼らが携帯した石器を代替・交換用としてその場に置かれたのかも知れない。先に交換用の石器を提供した人々は再訪時にそれを持ち帰るか、或いは緊急でない場合は埋納して次回に備えるという選択行動もあったであろう。重量のある石斧・石槍等を生活用具として装備した当該期の人々は移動と石器製作の効率化とコスト削減を見極めてゆく中で、効果的に複数集団が石器装備の補充・確保を行えるような社会的システムが存在し、そうした言わば一種の兵站基地とも言える特異な空間、そこが神子柴遺跡であったと評価したいのである。

寺尾遺跡や勝坂遺跡、大平山元遺跡など、著者が当該期の通常遺跡と捉える場所は生活跡としての地形・環境的条件を満たすが故に通時的に居住利用されているのである。しかし、神子柴遺跡を始めとしてここに挙げた唐沢B遺跡や小鍛冶原遺跡などは、生活条件ではなくて当時の人々が認知・認識し易い景観やアプローチが容易で目立ち目印となるような地形学的特徴や移動経路上に形成された特殊な遺跡であったと推察される。例えば唐沢B遺跡は北信と南信（佐久）、そして吾妻川流域を介して群馬方面へと通ずる交通の要所に位置しているし、神子柴遺跡は南北方向には天竜川、東方向には三峯川を介して南アルプス、そして諏訪・八ヶ岳方面へ、西側へは中央アルプスの鞍部である権兵衛峠を超えて木曾や御岳、真北には三州街道を経て善治鳥峠が位置しており伊那谷と松本平を結ぶという四方へと開けた経路上の当に交点とも言える景観的位置に形成されていることを知るのである。

6. おわりに

嘗て著者は「神子柴文化が地域の様相を色濃く残す特殊な石器群と認識すべき、換言するならば神子柴遺跡を中心に設定された研究が進められてきたことへの反省」の必要性を力説したことがある（栗島 2010）。その際

に当該石器群の特徴や先行する細石器文化との関係、また出現期土器群との関係やその特徴などにも言及したが、その認識や見解についてはいささかなりとも修正の必要性を感じていない。今回は神子柴遺跡の正式な報告書刊行から時を隔てること10年という節目の年、改めてこの遺跡と向き合う機会を得たことに深く感謝している。特に神子柴遺跡、唐沢B遺跡、小鍛冶原遺跡の報告書を強い使命感と深い信念とを持って上梓された、堤氏を始めとする長野県在住の研究者の努力には当該期研究者の一人として頭の下がる思いである。

遺跡研究はその特徴を見極めつつ他遺跡との比較研究の中でその特徴・本質を浮かび上がらせることができるのとセオリーを貫くなかで、精緻な実測図や出土状況を記した微細図や分布図、写真などを検討することでこの遺跡が「石器群の交換」を主目的として形成されたとの見解を再度確認するに至った。この遺跡を巡っては研究者間でも多くの意見の食い違いがあるが、どの見解・解釈にも一長一短があるように感じるものの、最も重要なことは出土遺物自体の特徴やその出土状況、他の遺物との関係性など遺物や遺跡の実態に即した研究を頑なに固辞することであろう。そのような姿勢を若手研究者に示すことが「神子柴研究第二世代」と評価された我々の役割・使命であると思う。

本稿は表題のとおり遺跡論の展開を意図したことから、当初はその編年の位置の検討も意図していたにも関わらず神子柴遺跡の機能・性格問題に終始せざるを得なかった。先にも述べたように神子柴遺跡では不可視的となっているが、当該期の他遺跡の様相を念頭におく限り土器群（有文土器）の伴出は疑いないし、また細石器石器群の共伴についてもその可能性は極めてたかいものと判断している。仮に今後、移行期としての当該文化を追研してゆく場合、或る意味で極めて特異とも言い得る神子柴遺跡を過大に評価すべきではなく、生活跡遺跡を基軸に据えたうえで生産跡遺跡や所謂デポ遺跡などとの関係性のなかで評価すべきと理解している。では何故、本論で提示したような広域的な生活財や物資の集積・埋納行為が景観を見据えた地理的空間や移動経路上に設けられたのか、その意味については前後する細石器文化や隆起線文文化との関連性のなかで、後日改めて論じてみたいと考えている。（2018年7月26日校了）

引用参考文献

- 千曲川水系古代文化研究所 1998『唐沢B遺跡』信毎書籍出版センター
- 林 茂樹・上伊那考古学会編 2008『神子柴』信毎書籍出版センター
- 下村修・戸谷今朝登・田中清文・中村由克・望月明彦・堤 隆 2009『小鍛冶原／唐沢B』信毎書籍出版センター
- 堤 隆 2013『狩猟採集民のコスモロジー・神子柴遺跡』新泉社

長野県考古学会 2004 「シンポジウム 神子柴系石器群をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』107
稲田孝司 1991 「細石刃文化と神子柴文化の接点 ―縄文時代初頭の集団と分業・予察―」『考古学研究』40-2
稲田孝司 2018 「神子柴石器群の成立過程とその意義」『シンポジウム 神子柴系石器群とはなにか?』第20回 長野県旧石器研究交流会
岡本東三 2006 「細石器文化と神子柴文化の危険な関係」『石器

に学ぶ 第9号』石器に学ぶ会
栗島義明 1990 「デポの意義」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』7
栗島義明 2004 「神子柴文化 ―その実像と虚像―」『長野県考古学会誌』107
栗島義明 2010 「神子柴遺跡 ―移行期としての文化」『旧石器時代 下』講座日本の考古学 青木書店

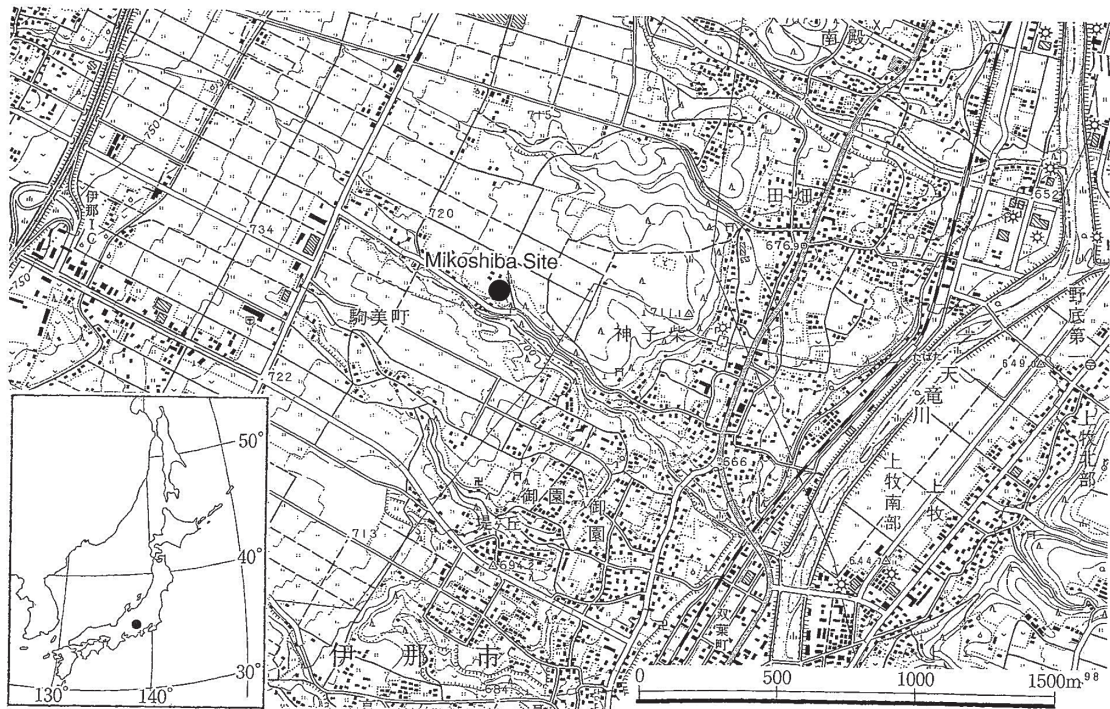


図1 神子柴遺跡の位置



図2 長野県の遺跡分布

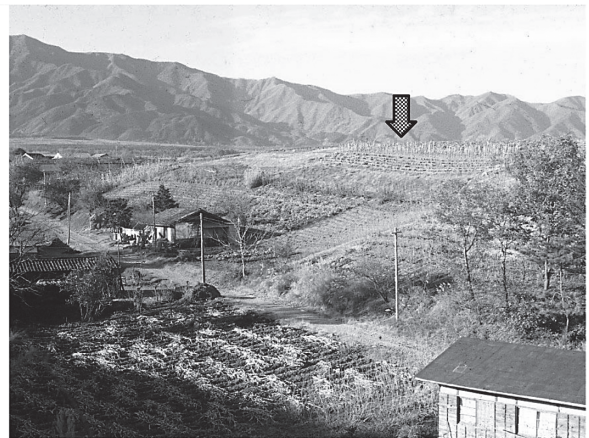


写真1 神子柴遺跡近景 (矢印: 遺跡)



写真2 神子柴遺跡調査風景

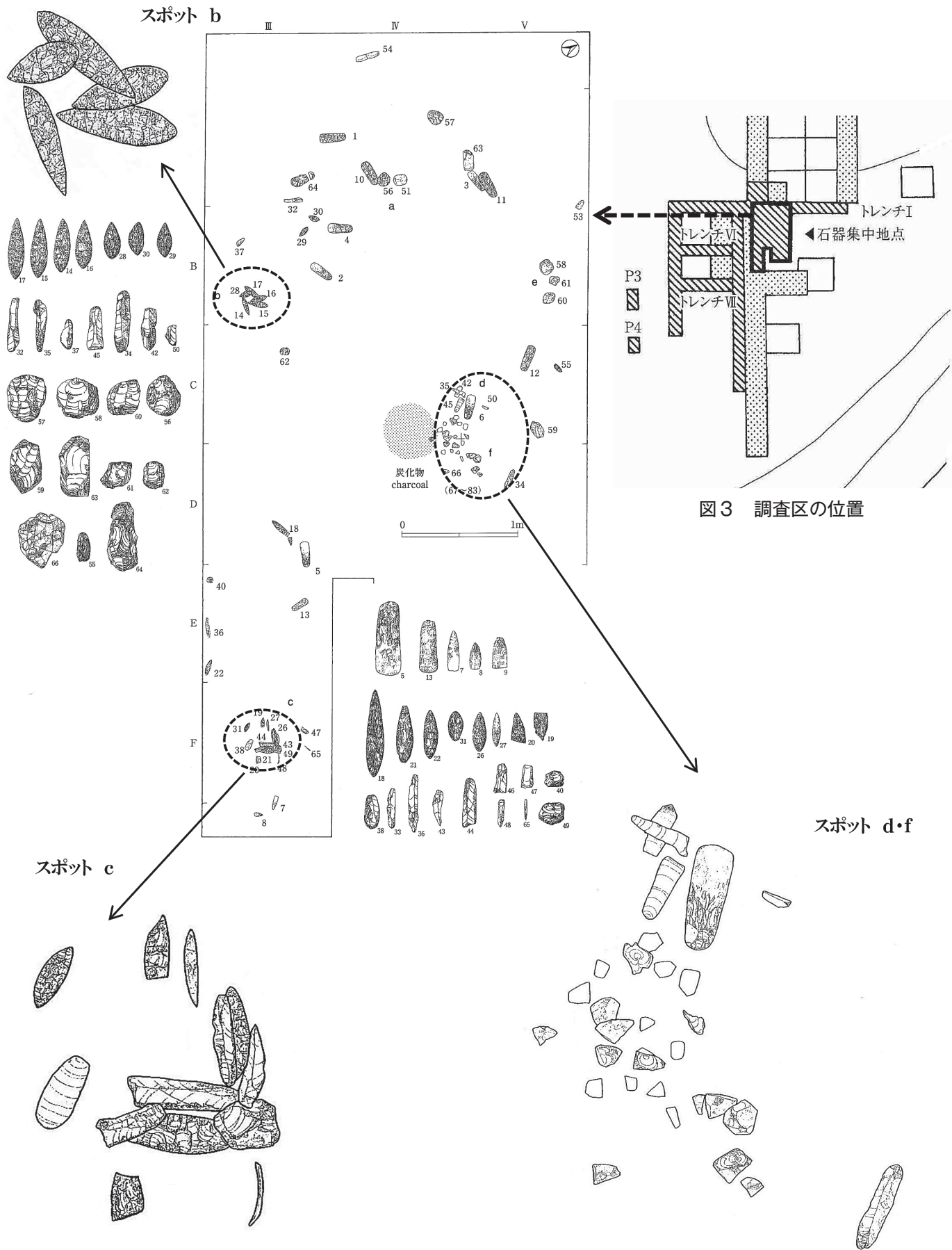


図4 石器群の分布



スポット b



スポット d・f



スポット c

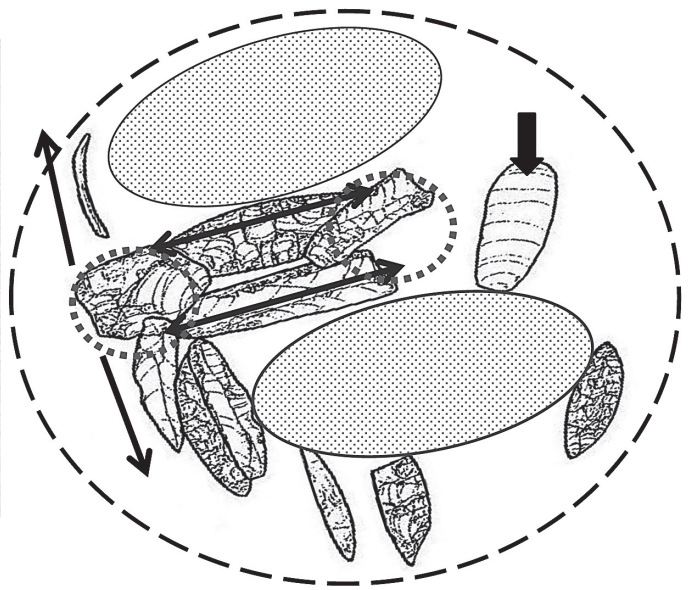


図5 石器集中の詳細

PLATE 32

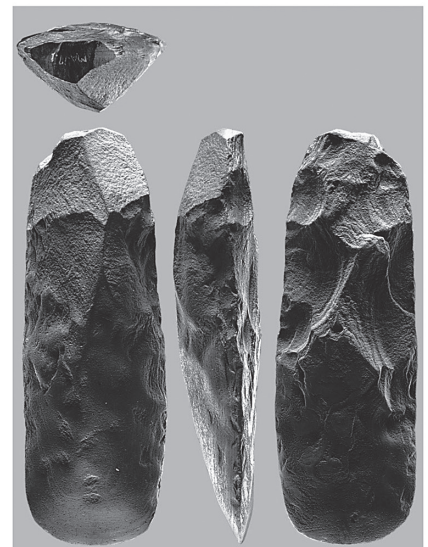
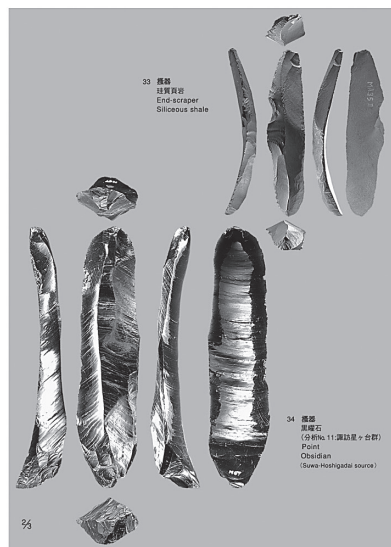
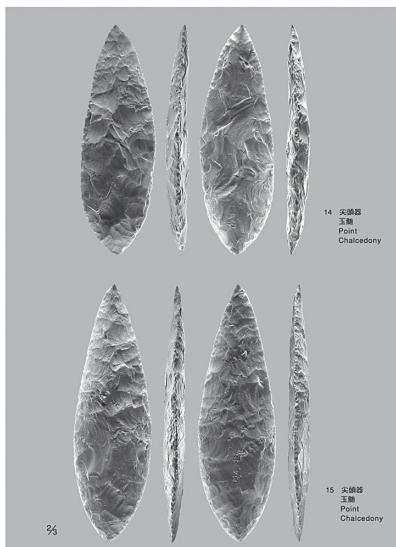


写真3 交換用に仕上げられた石器群

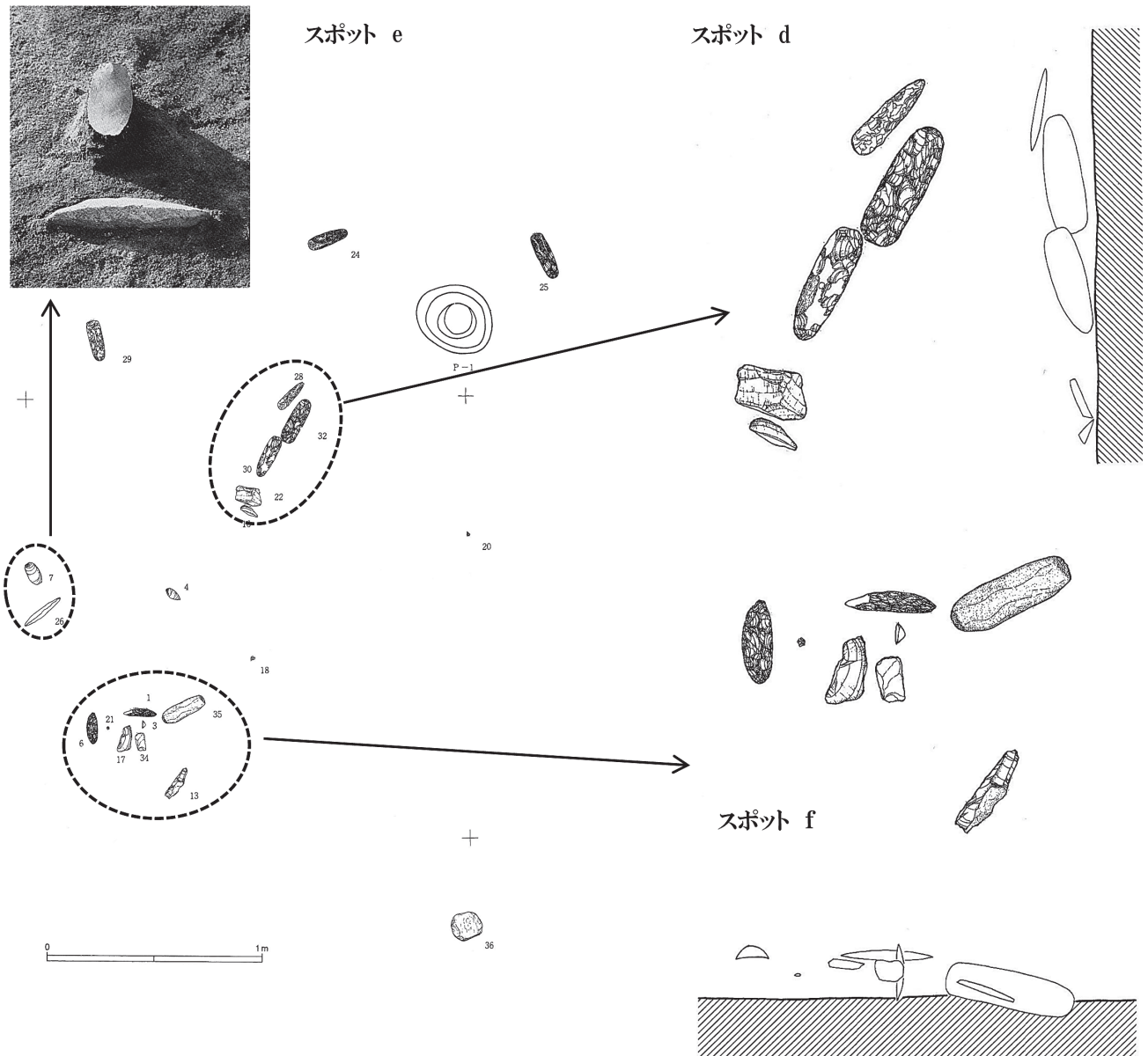


図3 唐沢 B 遺跡の石器分布



写真4 小鍛冶原遺跡の石器

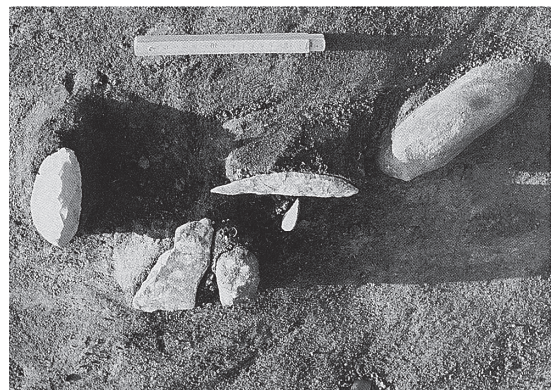


写真5 唐沢 B 遺跡スポット f

1. はじめに

大形かつ甲高の磨製石斧と大形の尖頭器、この2つが神子柴系石器群を規定する示準の石器である。ところが静岡東部ではこの2つの器種がそろって組成する事例は皆無であり、神子柴系石器群とは異なる石器群が存在している。

しかしこの地域の発掘調査の中には、資料の公表が十分ではなかった例があり、また石器群としての評価が不足しているものも含まれている。また国指定史跡となった大鹿窪遺跡の総括報告書が今年になって刊行され、その中には溶岩流を剥がし取った「竪穴状遺構」から、尖頭器石器群が土器を伴わずに出土するという注目すべき事例も含まれている。

本稿ではこうした出土例を紹介し、この地域で展開された“非神子柴的世界”の環境的な背景についても検討を加える。なお、ここでは隆線文系土器群以前を「草創期前葉」、隆線文系土器群の時期を「草創期中葉」、押圧縄文～表裏縄文の時期を「草創期後葉」として記述する。

2. 東海地方東部における草創期の枠組み

1) 遺跡分布

東海東部における草創期の遺跡は、富士山西南麓（芝川流域）、愛鷹山南麓、天城山北麓に分かれて分布している（図1）。箱根山麓においても有茎尖頭器が少なからず出土するが、石器製作址あるいは生活址としての内容を備えた遺跡は発見されていない。富士山西南麓に立地する大鹿窪遺跡では、草創期後葉の押圧縄文段階に属する竪穴住居址が10軒以上発見され（富士宮市教育委員会2018）、初期定住のプロセスを示す集落として注目されているが、この付近では草創期包含層までの堆積が厚いため遺跡発見が難しく、発掘調査事例も少ないことから、多くの未発見の遺跡が潜在している可能性が高い。

2) 気温平準化装置としての駿河湾と定住化

この地域の気候環境を推定するうえで、駿河湾の存在を無視することはできない。駿河湾は湾口（御前崎－石廊崎ライン）の深度が約1,500mあり、黒潮本流の位置と流軸にもよるが、その分流が入り込むことによって、沿岸地域の気候を温暖で湿潤なものにしている。最終氷期～完新世にかけての黒潮の流路は不明であるものの、駿河湾のような湾口が開いた深い湾は、外洋海水の影響を受けやすく、沿岸域の急激な気温変動を平準化する作用がある。縄文時代草創期（16ka～11.7ka）は、最後のハインリッヒイベント（HL 1）を契機とする急激な

温暖化とともに開始され、激しい気候変動が繰り返されたことが知られている。ヤングドライアス期（YD：13ka～11.5ka）は本稿での草創期後葉におおむね相当するが、関東地方では押圧縄文～表裏縄文段階の遺跡が極端に減少する。いっぽう隣接するこの地域では大鹿窪遺跡や葛原沢第IV遺跡において定住化の進行が認められ、駿河湾の「気温平準化作用」がその要因の一つとし

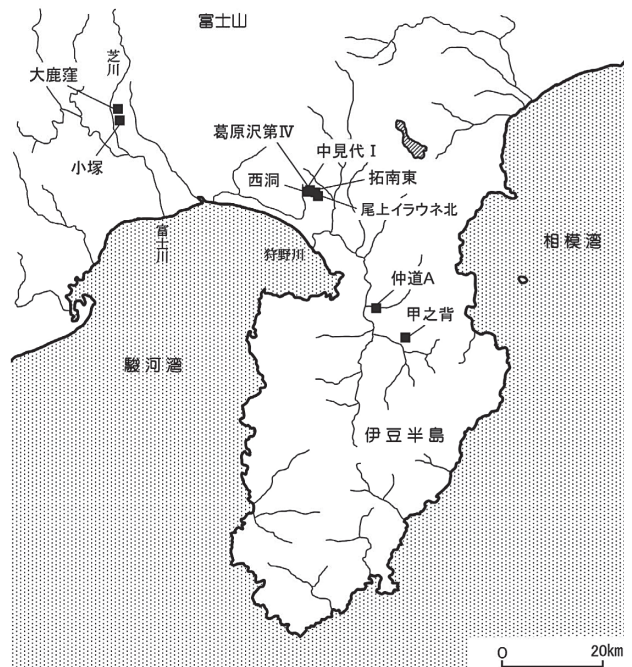


図1 草創期主要遺跡位置図

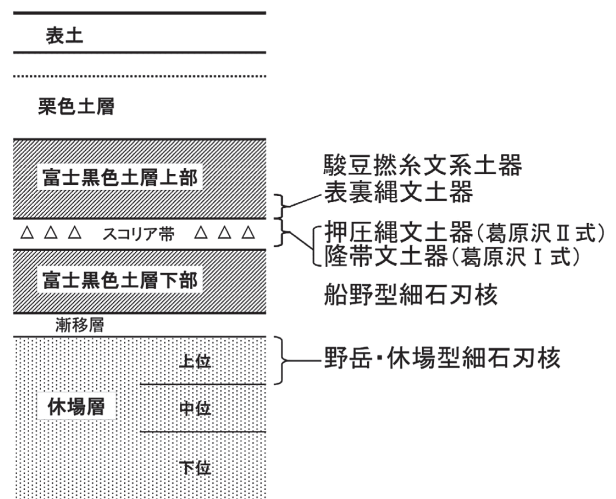


図2 愛鷹山麓埋没谷の層位と出土遺物

て考えられる。

3) 層位的出土例と土器編年

愛鷹山麓の埋没谷では多くの場合、富士黒土層の中位やや下に風化の進んだ赤色スコリア層が認められる(FBsc)。このスコリア層が隆帯文土器(葛原沢Ⅰ式)と押圧縄文土器(葛原沢Ⅱ式)の包含層となっている(図2)。FBsc層の下位から船野型細石刃核が出土した事

例があり(沼津市教育委員会1999)、さらにその下の休場層上位(YLU)は野岳・休場型細石刃核の包含層となっている。葛原沢第Ⅳ遺跡ではFBsc層の直上から表裏縄文土器が出土しており、葛原沢Ⅱ式とは明確な層位差がある。駿豆燃糸文系土器群は関東地方燃糸文土器群と平行するが、表裏縄文土器と層位差をもって出土した事例はない。

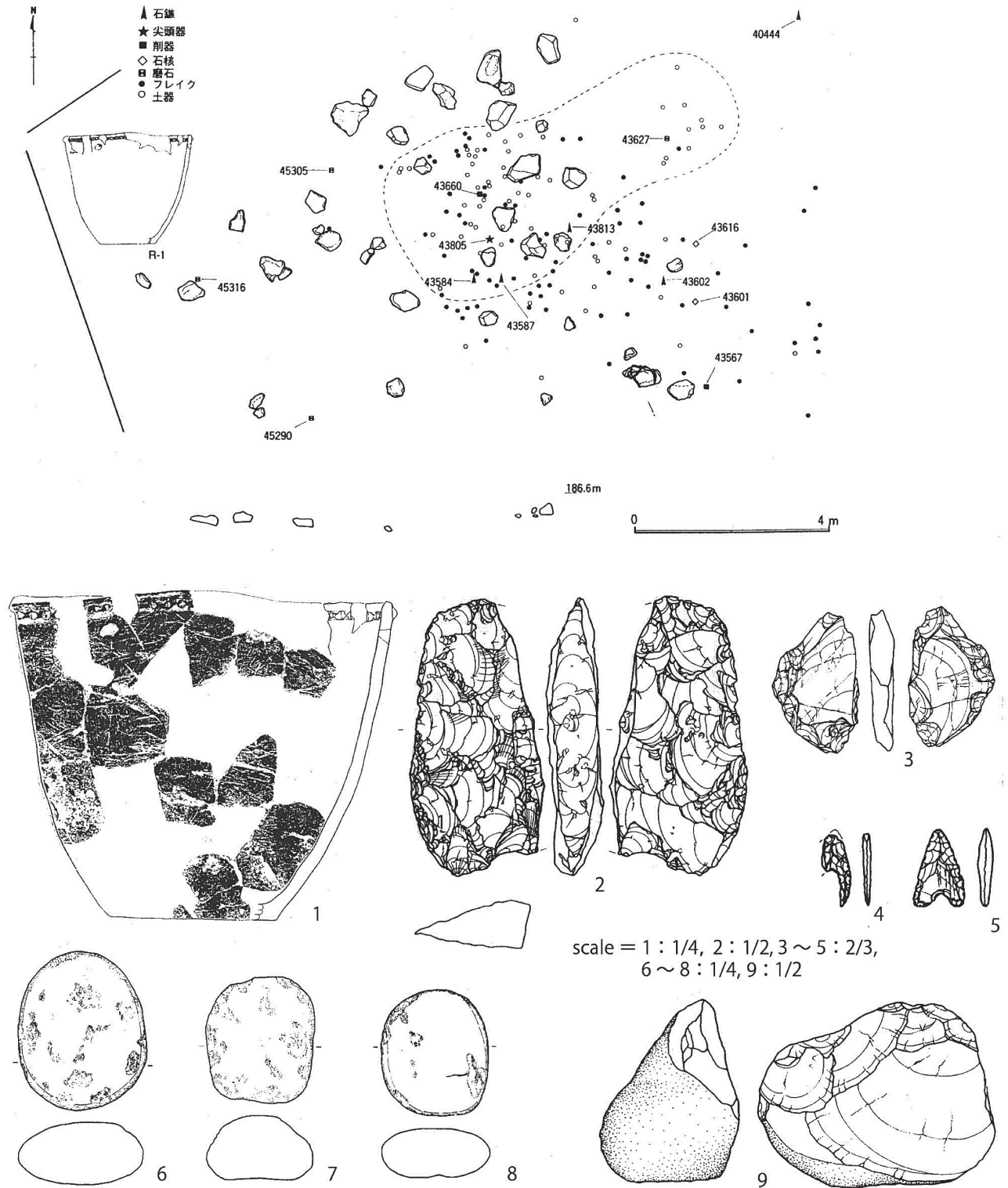


図3 葛原沢第Ⅳ遺跡第1号配石址と出土遺物

葛原沢Ⅰ式・Ⅱ式の内容についてはやや詳しく述べたことがある(池谷2003)が、簡潔に紹介しておきたい。葛原沢Ⅰ式は中部・関東地方の隆線文系土器に大略平行するが、口縁部に1~2条巡る隆帯はやや太く、その上から爪先などによる刺突が加えられる。しかし隆線文系土器のような隆帯の「ひねり」は認められない。底部は平底で器厚は厚く、胎土には多量の繊維を含んでいる。大鹿窪遺跡(富士宮市教育委員会2018)や小塚遺跡(芝川町教育委員会1995)からは、中部・関東地方でもみられる細隆起線文土器あるいは微隆起線文土器が出土しているが、これらは胎土に繊維を含まず、隆帯の太さやその貼り付けの方法が葛原沢Ⅰ式とは異なっている。

葛原沢Ⅱ式は絡条体圧痕文が密接して施文されるが、その方向は横位展開を基調としながらも、斜位・縦位へ規則的に切り替えられる例を含む。器壁は葛原沢Ⅰ式よりも薄手であり、胎土には繊維が含まれず、黒雲母が目立つものが多い。葛原沢第Ⅳ遺跡では「自縄自巻」の原体が認められないが、大鹿窪遺跡には少量ながらこれが含まれ、仲道A遺跡では自縄自巻が主要な施文手法となる(大仁町教育委員会1986)。したがって葛原沢Ⅳ→大鹿窪→仲道Aという相対的な変遷を想定しうる。

3. 事例検討

1) 葛原沢第Ⅳ遺跡

愛鷹山麓の南側斜面には、愛鷹火山の最終段階に流出した溶岩流上に愛鷹ローム層が堆積することによって形成された「足高尾上丘陵」が広がる。葛原沢第Ⅳ遺跡は足高尾上丘陵の標高200mの尾根上に立地し(沼津市教

育委員会2001)、遺跡の西側を流れる中沢川から2つの埋没谷が貫入している。

第1号配石址 この配石址は埋没谷Aの下端近くに構築されている。ここでは板状に節理するデイスイトが平坦面を水平にするように配置され、その範囲内のFBsc層から葛原沢Ⅰ式土器1個体、石鏃5点、尖頭器1点、削器2点、石核2点、磨石4点が出土した(図3)。

図3-2は黒曜石製の尖頭器未製品で、産地推定は未実施となっているが、神津島恩馳島産の外観を示す。図3-4の石鏃は脚長が全長の1/2以上となるもので、諏訪星ヶ台産の外観を示す。爪形文段階に特徴的とされている長脚鏃に加え、磨石が葛原沢Ⅰ式段階に伴うことを示す遺構として重要であり、出土状況から配石を「台石」として扱い、磨石や土器を用いる作業が行われたと考えられる。

埋没谷B 同じく中沢川から貫入する埋没谷Bから出土した土器は、葛原沢Ⅰ式2個体分に限定され、後続する葛原沢Ⅱ式等をほとんど含まない。

図4-1は特に多く繊維を含み、一条の隆帯上には棒状の工具による刺突が加えられるが、側面へのナデ等の調整が認められない点で葛原沢Ⅰ式の中でも古相の特徴を示す。図4-2も口縁下に一条の隆帯が巡るが、そのほとんどが剥落している。

これに伴う石器は神津島恩馳島産黒曜石の尖頭器(図4-3)、尖頭器?(図4-5)、有茎尖頭器(図4-4・6)等であるが、葛原沢Ⅰ式に長脚の石鏃(図4-7:諏訪星ヶ台産)と磨石(図4-10)が伴う点は、上記の第1号配石址と共通する。

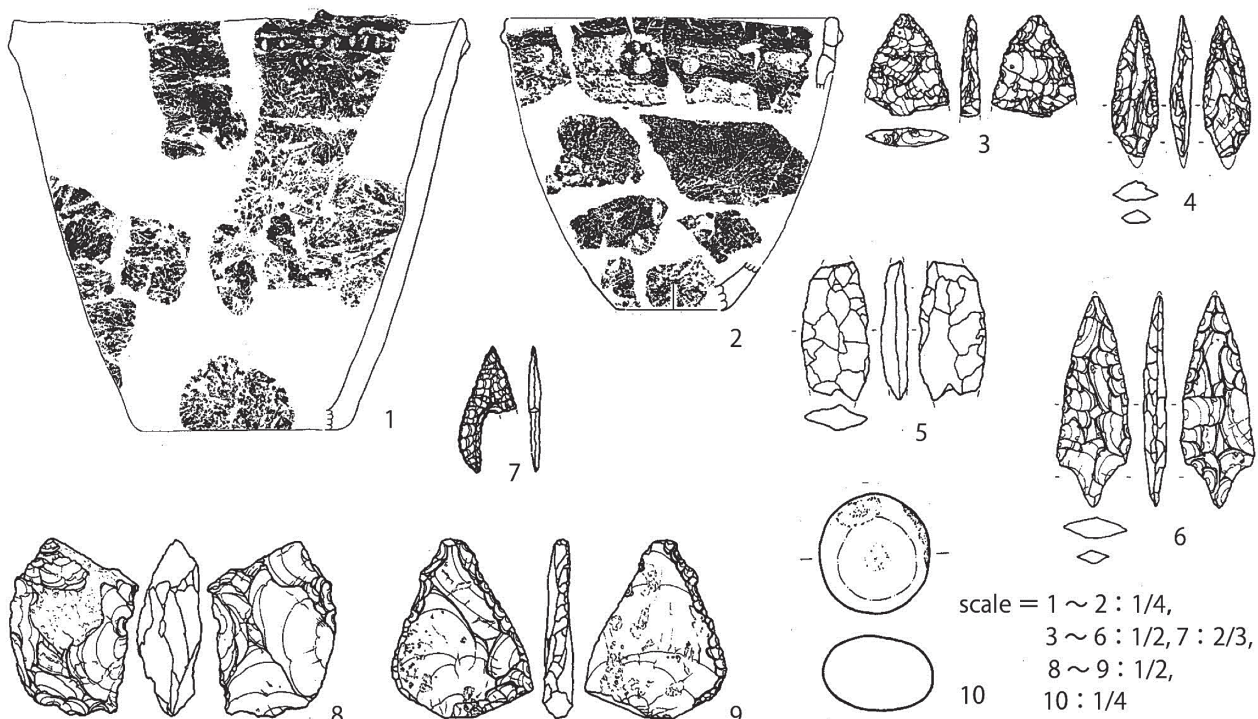


図4 葛原沢第Ⅳ遺跡埋没谷Bの出土遺物

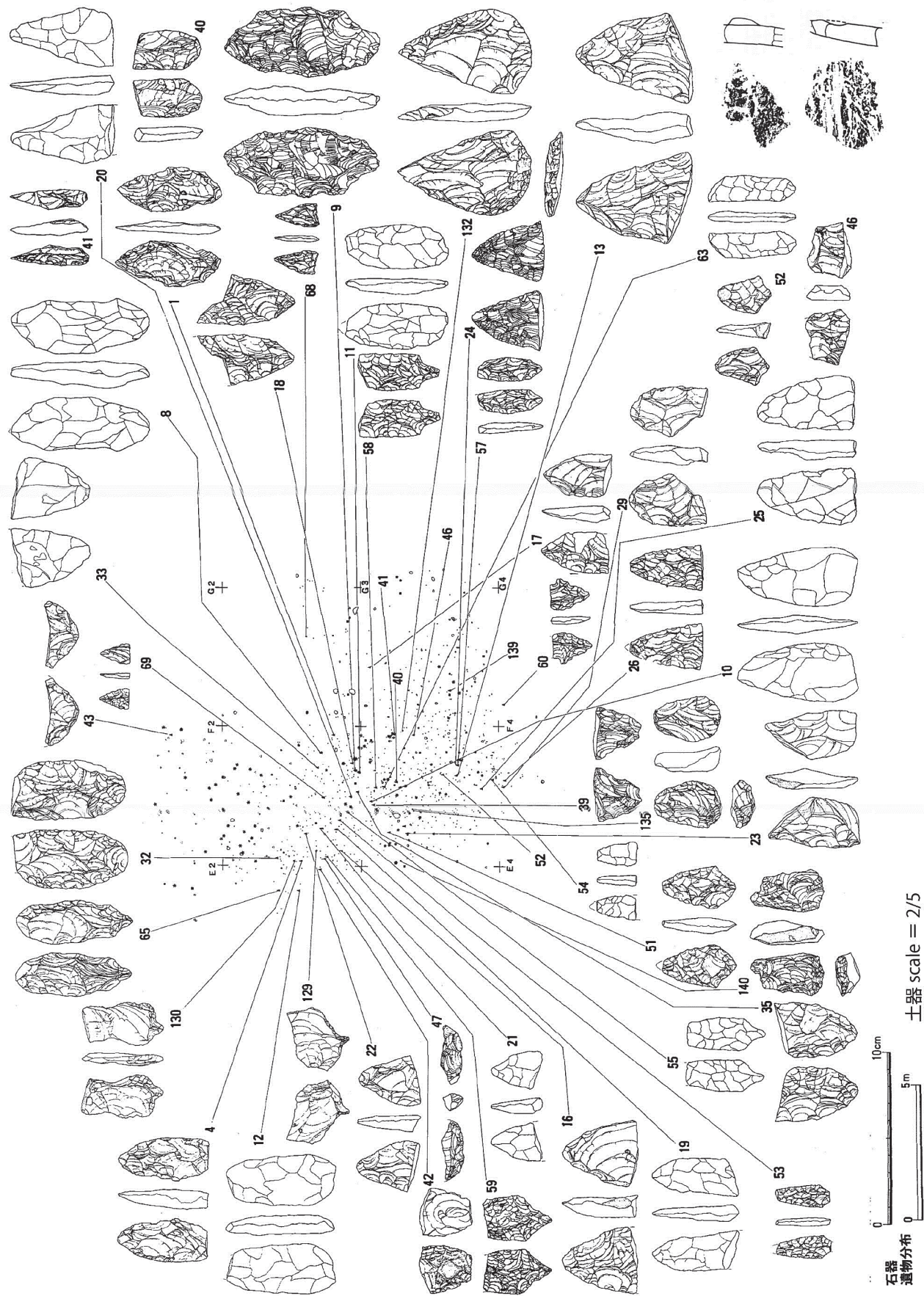


図5 甲之背遺跡の石器製作址

2) 甲之背遺跡

甲之背遺跡は天城山の北麓、狩野川支流の大見川とさらにその支流である城川との分岐点に向けて突き出した丘陵先端に立地する（中伊豆町教育委員会1996）。

ここからは葛原沢I式期の尖頭器・有茎尖頭器等の集中的な製作址が検出された（図5）。この範囲の草創期相当層（8層下部～10層）から出土した石器の内訳は、尖頭器31点・有茎尖頭器11点・石鏃22点・搔器5点・削器8点・楔形石器2点・石錐3点・ハンマー17点・石核6点と報告されている。ただし上層には縄文早期の包含層があり、8層上下の区分が明瞭でないこともあり、上層からの多少の混在が疑われる。

尖頭器の主たる石材はガラス質黒色安山岩であるが、その中には遺跡直近の城川河床に産するものと、箱根系の外観を示すものが含まれている。また少数ながら黒曜

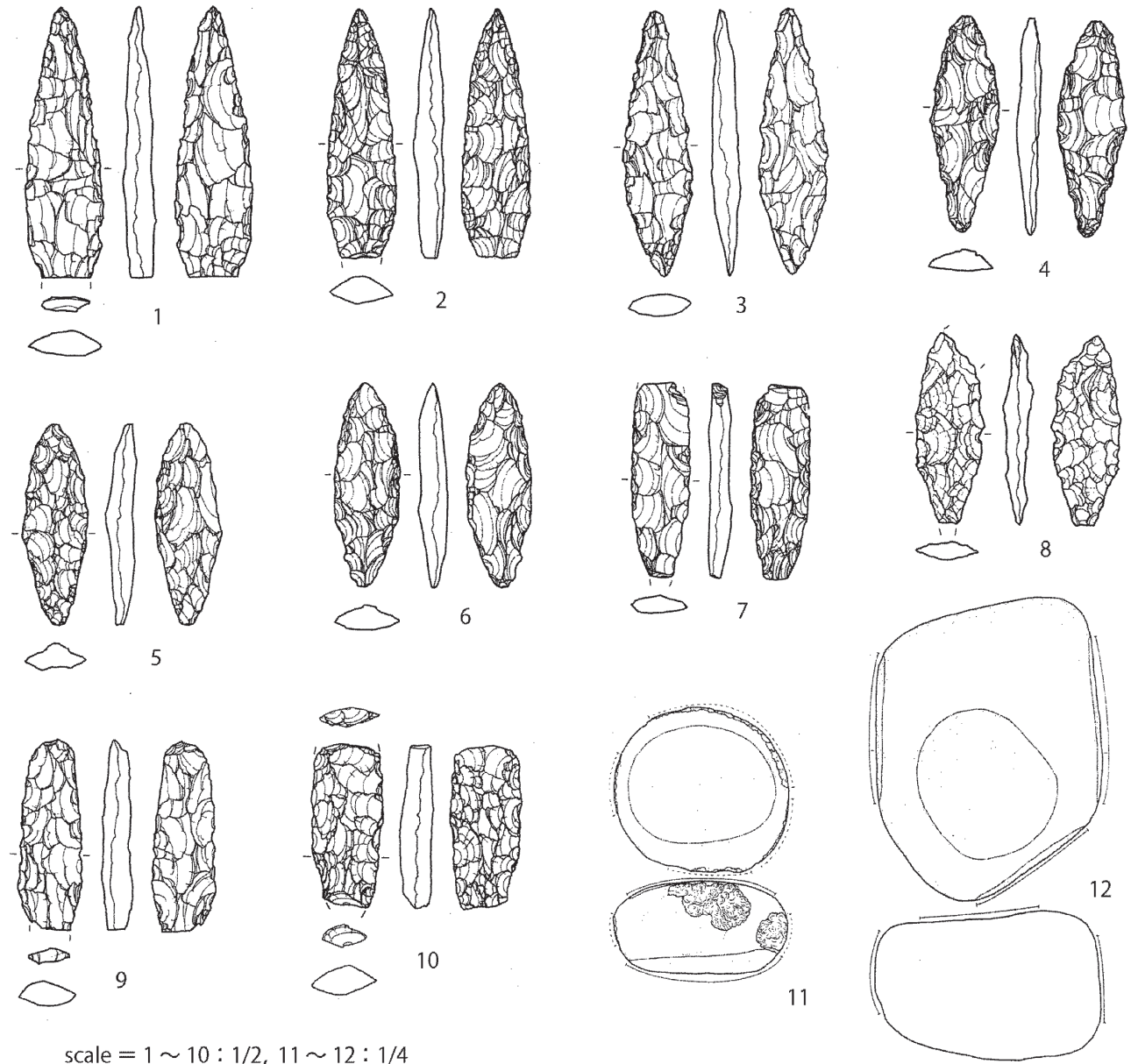
石も含まれており（図5-9・24・39）、その外観は神津島恩馳島産に類似する。

これらの石器群に葛原沢I式の隆帯文土器が相伴している。図5には2点を示したのみであるが、さらに隆帯のある破片1点、無文部数十点が出土している。かなり太めの隆帯上には爪先らしき刺突が加えられる。隆帯側面へのナデ等の調整がほとんど認められないことなど、葛原沢I式でも古相の特徴を備えている。

なお22点が出土したとされる石鏃には、長脚鏃は含まれていない。

3) 大鹿窪遺跡

大鹿窪遺跡の立地する羽鮒丘陵は、その東縁を画する安居山断層の活動によって富士山麓から切り離され、さらに芝川断層に沿って流れる芝川によってその西側を侵食されている。芝川左岸（遺跡側）には、富士火山活動



scale = 1 ~ 10 : 1/2, 11 ~ 12 : 1/4

図6 大鹿窪遺跡第8号竪穴状遺構出土石器

史のなかで「富士宮期」(15,000~6,000B.C.)に位置付けられる溶岩流が露出しているが、その一部は遺跡内部の表層付近にも現れており、住居址や配石遺構はこれら避けるように、あるいは一部を剥がし取りながら構築されている。

遺跡と現在の芝川河床面との比高差は約20mであるが、芝川断層が現在もこの谷を深めつつあることから、1万数千年前の大鹿窪遺跡は現在よりさらに親水的な環境にあった可能性がある。この遺跡からは草創期後葉(葛原沢Ⅱ式段階)の住居址10軒以上と、配石遺構、土坑などが検出されており、初期定住の進行を示す重要な

資料となっている。

8号竪穴状遺構 遺跡の東端近くに設けられたトレンチ(3-3E 調査区)で検出され、隣接する13号竪穴とともに溶岩流を剥がして構築されているが、柱穴が確認されていないため「竪穴状遺構」として取り扱われている。

ここからはガラス質黒色安山岩を主要な石材とする柳葉形の尖頭器がまとめて出土しており(図6-1~10)、磨石(図6-11)、石皿(図6-12)が伴う。なおこの調査区の上層では、尖頭器数点の他は木島式小片が少量出土したのみであり、異なった時期の遺物が住居址内に混入する可能性は少ない。また住居址およびその周辺

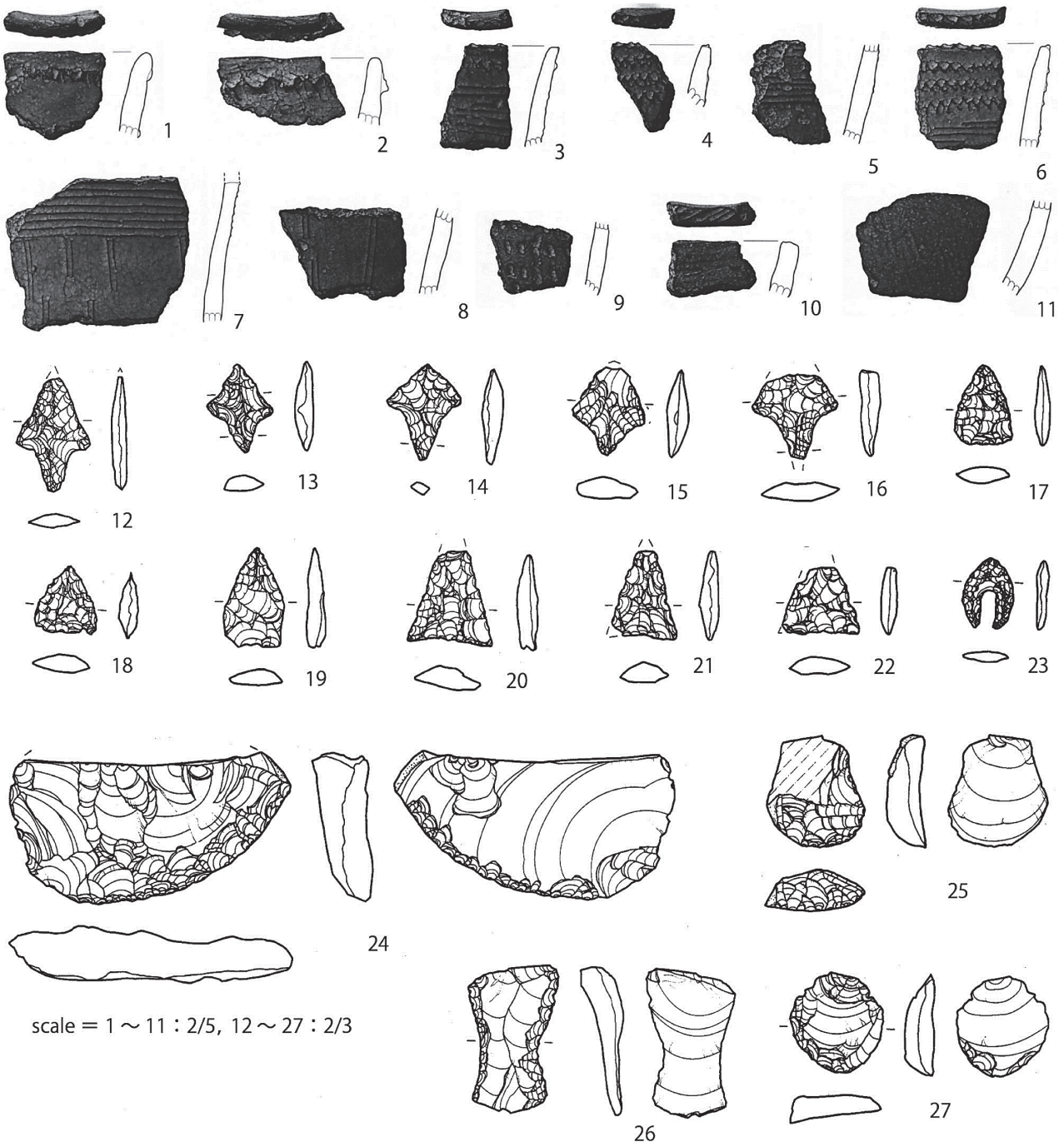


図7 大鹿窪遺跡第10号住居址出土遺物

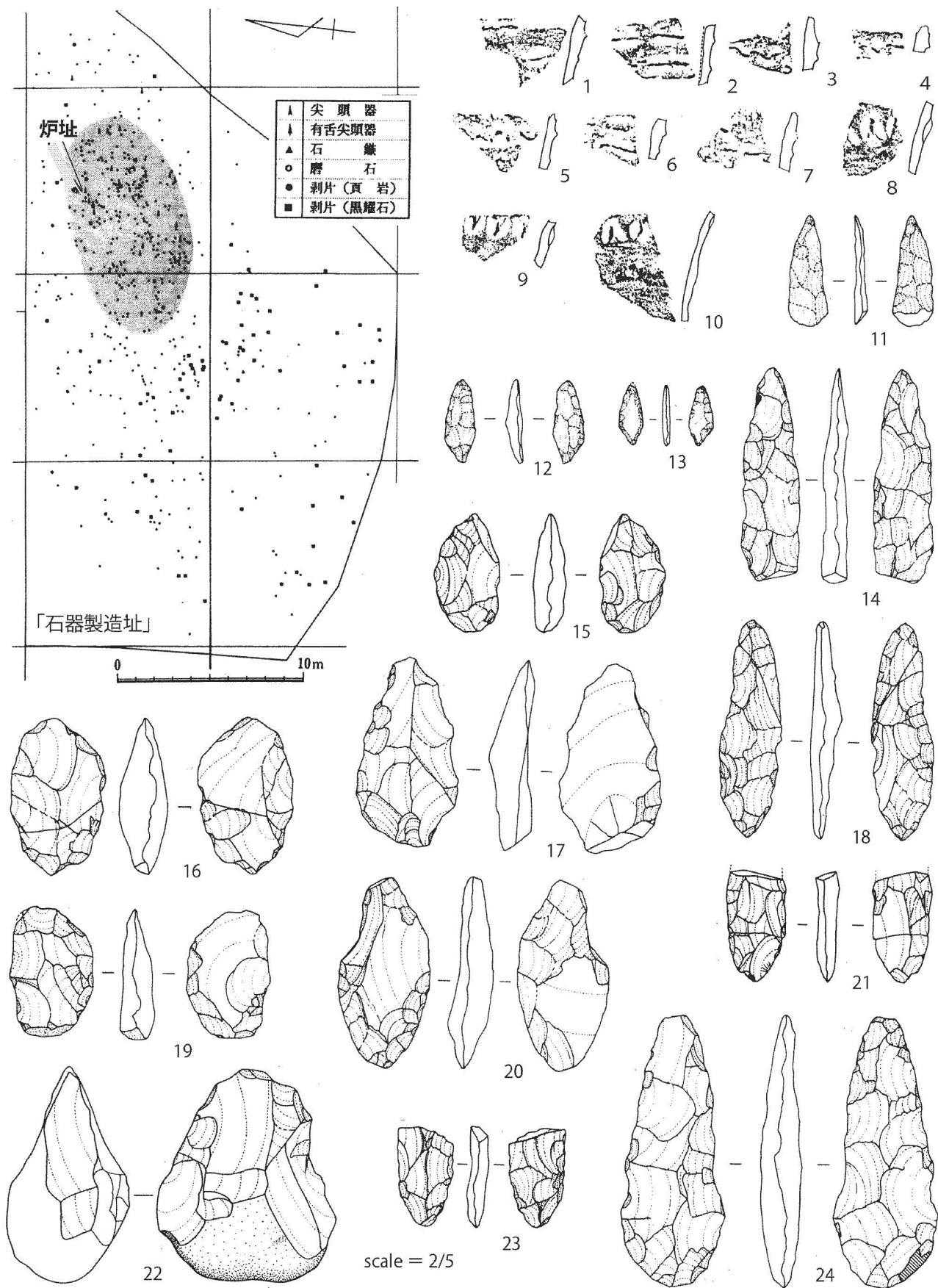


図8 小塚遺跡「石器製造址」と出土遺物

の出土状況に、これら尖頭器の製作にかかわる明確な痕跡は見いだせない。

尖頭器の長径は6～10cmの範囲にほとんどが収まり、平面形状は柳葉形に近いが、基部側に着柄を意識したと思われる作り出しが認められるものが多く、基端にかけての側縁は直線的に整形されている。

土器の出土はなく、尖頭器の形態が有茎尖頭器出現直前の状況を示すことから、草創期前葉に位置付けることが可能である。

10号住居址 葛原沢Ⅱ式段階の住居址群から東にやや離れた場所に設定されたトレンチ内で検出されているが、傾斜地に構築されたためか壁の一部が失われている。

ここからは葛原沢Ⅰ式(図7-1)、細隆起線文土器(図7-2)、細隆起線と微隆起線が個体内で共存する土器(図7-3～8)などが出土している。図7-1は胎土に少量ながら繊維を含み、隆帯上に爪先の刺突が加えられ、「ひねり」が認められない点などから葛原沢Ⅰ式の範疇で理解できるが、隆帯がやや細く低く、器厚も薄いことから、その新相あるいは新出の段階を示すものと思われる。なお大鹿窪遺跡出土の葛原沢Ⅰ式土器の多くは、この図7-1に共通する特徴を有している。また図7-3～8は繊維を含まず、色調や調整等の共通性から同一個体と考えられ、6と7が接合する。

これらに伴って花見山型に近似する有茎尖頭器(図7-12～16)と、長脚かつ円脚の形態を示す黒曜石製の石鏃(図7-23 諏訪星ヶ台産)が出土している。ここに示した有茎尖頭器は黒曜石製でいずれも天城柏峠産であるが、神津島恩馳島産のものが1点存在する(報告書図354-647)。図7-24は諏訪星ヶ台産黒曜石の幅広い剥片を素材とした削器であるが、類例は葛原沢第Ⅳ遺跡にも複数存在し(報告書74図2・4・7など)、この地域の草創期中葉を示準する石器となっている。

4) 小塚遺跡

小塚遺跡は大鹿窪遺跡と同様に、芝川左岸となる羽鮒丘陵上に立地している。かつて『駿河小塚』という名の下でなされた第1次調査の報告では、愛鷹・箱根第4期のナイフ形石器と富士川系ホルンフェルス素材とした船野型細石刃核が紹介されている(芝川町教育委員会1972)。

「石器製造址」第3次調査では「石器製造址」とされた遺構から、富士川系ホルンフェルス素材とした尖頭器およびその調整剥片、石核などが大量に出土している。(芝川町教育委員会1995)。このホルンフェルスは直近の芝川でも採取可能であり、円礫面の残る石核や剥片の存在などから、河床礫を遺跡内に持ち込んだうえで継続的な尖頭器製作が行われていたと考えられる。また集中範囲の北側では地床炉が発見されており、石器石材の加熱処理と関係する可能性がある。

この遺構周辺から繊維を含まず比較的薄手な細隆起線文土器(図8-1～7)と、さらに薄手な爪形文土器(図

8-8～10)が出土している。細隆起線文土器は石器集中範囲(グレーの楕円で表示)の南西側からの出土であるが、爪形文土器は発掘調査区の西端に分布しているため、尖頭器との同時性には検討を要する。

尖頭器は小形の有茎尖頭器(図8-12・13)、柳葉形(図8-11・14・18・21・23・24)、中～小形の木葉形(図8-15・16・17・19・20)に大別することができる。

本遺跡の微隆起線文土器と大鹿窪10号住居址出土の細隆起線文土器・微隆起線文土器との間に決定的な時間差を認めるのは難しいが、尖頭器の形態あるいはその組成は大きく異なっている。細身長身の尖頭器は石材こそ異なるものの大鹿窪8号竪穴状遺構の尖頭器と形態的な共通性があり、そこでは土器も有茎尖頭器も出土していない。したがって本遺跡「石器製造址」には時間的な累積を考慮する必要があり、微隆起線文土器・爪形文土器との相伴関係についても資料の充実を待って再検討する必要がある。

4. 黒曜石原産地について

表1に細石器段階～草創期にかかわる黒曜石原産地の推定結果を示した。

細石器段階で神津島恩馳島産が圧倒的多数を占める状況が出現し、その基本的な傾向は草創期後葉まで継続する。ただし草創期中葉～後葉の葛原沢第Ⅳ遺跡FBSc層では、諏訪星ヶ台産が一定量(70点)含まれている。葛原沢Ⅰ式には諏訪星ヶ台産の比較的大形の削器、同産地の長脚鏃が組成するが、原産地推定結果にもこうした石器組成が反映されている。草創期前葉が中心となる大鹿窪遺跡3-3E区でも諏訪星ヶ台産が神津島産と同数(5点)含まれていた。

葛原沢Ⅰ式に後続する大鹿窪第10号住居址では天城柏峠産が主体となっている。この住居址では、同産地の黒曜石を石材とする有茎尖頭器が出土するとともに、その整形にかかわる剥片も存在する。

葛原沢Ⅱ式段階では神津島産の身の厚い「両面体石器」や木葉形尖頭器、さらにこれらのリダクションによって得られたヘラ状石器・削器・楔形石器などが特徴的に存在するが、こうした石器運用は原産地推定結果にも神津島恩馳島産主体として表われている。

5. おわりに

この地域の遺跡分布は、後期旧石器時代を通して愛鷹南麓と箱根西麓の尾根上に偏在する傾向があった。しかし細石器段階の終末から縄文時代草創期にかけて、富士川支流の芝川や狩野川支流ぞいにも遺跡が出現する。大鹿窪遺跡では発掘調査は広大な範囲のごく一部に及んだに過ぎず、またこの地域に未発見の草創期遺跡が潜在する可能性が高いことを念頭におけば、愛鷹山麓の尾根上に居住地を残しつつも、河川沿いに新たな生業活動域を開拓しつつあったことが了解されよう。

表1 細石器段階～草創期の黒曜石原産地推定結果

遺跡名	時期	原産地(エリア)								推定 不可	分析 総数	文献
		和田(WD)	和田(WO)	蓼科	諏訪	NK	箱根	天城	神津島			
大鹿窪1号住居址	後葉(葛原沢Ⅱ式)	0	0	0	1	0	0	1	18	1	21	富士宮市教育委員会2018
大鹿窪2号住居址	後葉(葛原沢Ⅱ式)	0	0	0	2	0	0	0	30	1	33	富士宮市教育委員会2018
大鹿窪7号住居址	後葉(葛原沢Ⅱ式)	0	0	0	2	0	0	10	56	4	72	富士宮市教育委員会2018
大鹿窪10号住居址	中葉(細・微隆起線)	1	0	0	8	0	0	111	15	29	164	富士宮市教育委員会2018
大鹿窪3-3E区	前葉中心	3	0	0	5	0	0	1	5	2	16	富士宮市教育委員会2018
葛原沢Ⅳ1号住居址	後葉(葛原沢Ⅱ式)	1	0	1	2	0	2	3	153	10	172	望月・池谷2001
葛原沢ⅣFBsc	中葉～後葉	6	0	3	70	3	13	2	86	7	190	望月・池谷2001
中見代ⅢYLU	細石器	0	0	0	1	0	1	2	139	0	143	池谷・望月1998
西洞aYLU	細石器	1	0	0	2	0	1	6	67	10	87	池谷・望月1998

大鹿窪遺跡における柳葉形尖頭器と竪穴状遺構（第8号）という組み合わせは、秋川での河川漁撈が想定されている前田耕地遺跡の状況とよく類似する。新たな活動域での生業の一つに河川漁撈が採用されていた可能性があるだろう。

葛原沢Ⅰ式とした隆帯文土器は太めの隆帯上に爪先や棒状工具が垂直方向から押し当てられている。こうした特徴をもつ土器は、東海地方東部を東限として西日本の特に南岸沿いに分布している。同時にこの地域は神子柴系石器群の主体的分布圏外にあり、隆線文段階において既に石鎌が登場するという点にも共通性が認められる（池谷2003）。冒頭で気候変化の激しい草創期において、駿河湾が気温を平準化する作用を有していたことを指摘した。列島南岸におけるこうした共通性が、具体的な情報の伝達や一定の集団の移動に伴うものだとすれば、その媒介として想起されるのは、駿河湾奥まで入り込む黒潮の流れであろう。

引用文献

池谷信之 2018 「大鹿窪出土土黒曜石製石器の原産地推定」『史

跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』（第2分冊）pp.605-616
 池谷信之 2003 「本州中部の様相—東海地方の隆帯文土器と列島南岸—」季刊考古学83 pp.55-58 雄山閣
 池谷信之・望月明彦 1998 「愛鷹山麓における石材組成の変遷」静岡県考古学研究30 pp.21-44
 望月明彦・池谷信之 2001 「葛原沢第Ⅳ遺跡出土草創期石器の黒曜石原産地推定」『葛原沢第Ⅳ遺跡（a・b区）発掘調査報告書1』沼津市文化財調査報告書77 pp.318-332
 中伊豆町教育委員会 1996 『甲之背遺跡』
 大仁町教育委員会 1986 『仲道A遺跡』大仁町埋蔵文化財調査報告9
 沼津市教育委員会 2001 『葛原沢第Ⅳ遺跡（a・b区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書69
 沼津市教育委員会 1999 『西洞遺跡（b区-1）発掘調査報告書1』沼津市文化財調査報告書77
 富士宮市教育委員会 2018 『史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』（第1分冊・第2分冊）
 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡』（第3次・4次）
 芝川町教育委員会 1972 『駿河小塚』

1. はじめに

まず、「神子柴系石器群が北海道に存在するかどうか」、という問いをもちだしたとき、われわれはそれに答えることによって、一体何を明らかにしようとしているのであろうか。神子柴系石器群を文化の発露ととらえ、その地域を超えた広がりに対して考古学的文化の発生と展開という構図を見出し、背後にある人間集団の移動・移住を確認することはひとつのアプローチであり、分布論（チャイルド1956、佐原1985など）と呼ばれる考古学的現象の広がりや、その意味を問うような定式化された課題設定でもある。

神子柴系石器群を包摂する「神子柴・長者久保文化」は、先学諸氏によってたびたび論じられてきた点である（安斎2003、岡本2012、長沼2005など）。すなわち、ロシア沿海州のオシポフカ文化から発し、北海道を経由して本州まで南下する文化の伝播による説明（いわゆる、文化系統論）である。この北方系という位置づけは、神子柴型石斧が、豊富な中部地方に対して地理的に北に位置する北海道でほとんどみられないことや、ロシア沿海州のオシポフカ文化の年代観の整備などを根拠に、否定されつつある（安斎2003、堤2013、長沼2005など）。ただし、北方系という考え方は完全に否定されたわけではなく、北方系細石刃石器群をもたらした集団と本州在地の集団との接触・融合による文化変容も想定されている（稲田2018）。一方で、こうした文化系統に基づく文化変化の説明の前提には、文化を担う主体である人間集団がある起源地から発して別の場所へ移住する結果、起源地と移住先の集団の間に情報が共有される、もしくは新たな集団が移住することでその文化に入れ替わることによって表れたのが考古学的文化であるとする理解がある。前者の例としては、シャテルペロニアンのようにホモ・ネアンデルターレンシスがホモ・サピエンスの文化を受容した例（d'Errico et al. 1998）や、後者には新石器時代のヨーロッパに農耕民が拡散していく過程（Bramanti et al., 2009）などが例として挙げられる。そこでは、ある程度の幅のある時間単位の中での文化の並行関係、もしくはそれよりも短い時間幅における起源地と移住先における前後関係が問われるが、先史時代の文化現象は世代を超えたスケールで継続することで可視化されることが多い。したがって、中心地（起源地）と周辺（その文化が広がる末端）という関係を明らかにするためには、離れた地域間においてもそれぞれの集団が文化を継承しつつも、これらの異集団の中で文化要素が

共有される際に、「中心」から「周縁」へとという一定方向のベクトルが認められることが条件となる。

より明確に文化を把握するならば、ある時間幅を保った同時面におかれる石器群の側方連関ということになるが、同時面の把握自体が、石器群の形態的特徴の共有などを基準とする仮説的な文化編年案であることも多く、トートロジカルな議論に終始しがちである。例えば、ふたつの石器群は形態的特徴が共通しているのは、それは両者が時間的に同じだからである。そして、時間的に同じなので、異なる集団間で情報が共有され、残された石器群は同じ形態をもつことになった、という循環である。神子柴系石器群の北方起源説については、オシポフカ石器群などのロシア沿海州の石器群－北海道の当該石器群－本州の神子柴系石器群、が仮定されたが、実際には同時面が成立しないため、神子柴系石器群と同時代の北東アジアの考古学的文化の時間的並行関係は否定されたことになる。しかしこれは、文化系統の前提となる同時面という一要素を検証したのみであり、広範囲に広がる考古学的文化を形成した背景にある集団の伝統（文化的連続性）や集団間の情報共有のあり方（共有したか、したならばどのようにしたのかなど）を検討したことにはならないであろう。こうした流れでとらえると、冒頭の「神子柴系石器群が北海道に存在するかどうか」という問いは、ふりだしに戻ることになる。

2. 神子柴系石器群の存在論

存在論的な観点からは、ある現象（神子柴系石器群）が存在する場合と、存在しない場合が想定されるだろう。また、いずれの状態においても、なぜ存在するのか、もしくはなぜ存在しないのかという理由が問われるはずである。つまり、存在する場合、しない場合について、それぞれいかなる意味をもつかが問われる。このような設問は、神子柴系石器群をめぐる議論の本筋ではないが、神子柴系石器群という非常にユニークなインダストリー（あるいはコンプレックス）に代表される文化現象の広がりをつかむことは、日本列島内のある特定の文化がいかにして形成されたのかという問題にかかわるため、無意味な課題ではない。移住を背景とする文化伝播によって文化の広がりを説明するというオーソドックスな系統論が疑われる今日、わたしたちはいかなるアプローチをとることによって過去の文化を理解することが適切であろうか。ここでは、北方系という前提から離れ、分布論的視点から、いわゆる神子柴系石器群が多数

では、両面調整石器、石斧、石刃（石刃素材の石器を含む）の三者がそろそろ（表1）。そして、神子柴型石斧に代表されるように大形品が多い点も特徴的である。

寺崎（2006）は「片鱗」と形容する根拠に、当該期に相当すると考えられている忍路子型細石刃核を伴う石器群や小形舟底形石器を主体とする石器群に、石斧が伴うことをあげた。前者の忍路子石器群には、千歳市・丸子山上層石器群（千歳市教育委員会1990）や近年再発掘された留辺蘂町・吉井沢遺跡（大場ほか1983、夏木2016）などが該当する。後者の小形舟底形石器には北見市・中本遺跡（加藤・桑原1969）、下川町・モサナル遺跡（下川町教育委員会1981）、帯広市・落合遺跡（帯広市教育委員会1999）などから出土した石斧が相当する。これらの石器群には、細石刃や小形の舟底形石器という特徴的な器種が伴うケースもある。

幕別町・札内N遺跡（幕別町教育委員会2000）のように、石刃を素材とする石器（彫刻刀形石器、搔器）と尖頭器や両面調整石器（パイフェイス）が顕著な石器群もあるが、有舌尖頭器を中心とする尖頭器石器群であり、神子柴系石器群にあるような大形品は少ない。加えて、陸別町・斗満台地遺跡（明石1973）出土の石器群に、神子柴系石器群との共通性があると思われることから、組上にのせる。

これらの神子柴系と関連付けられる可能性のある北海道の石器群は、石器群の組成という観点からすると、総じて、本州の神子柴系石器群との違いが目立つ（表1）。剥片剥離の痕跡が顕著である点、尖頭器・両面調整石器よりも石刃の点数が多い点、舟底形石器など本州の神子柴系石器群にない器種が伴う点、などに違いがある。逆に神子柴遺跡では、尖頭器もしくは両面調整石器、石刃、局部磨製石斧の三者が特徴的である。北海道ではこれらの3種類の石器がセットとなる遺跡はほとんどない。ただし、神子柴系の中心である中部地方においても、一様ではない。例えば、小鍛冶原遺跡では石斧が欠落しており、セット関係にはない。

神子柴遺跡や小鍛冶原遺跡の石器群に限らず、特定の器種から石器群が構成される状態は、石器群の規模が小さいために生じているサンプルサイズ効果の問題（Grayson 1984）か、遺跡では限定された種類の作業がなされたことによる結果か、という点が区別される（中沢2016）。その区別のために、当該石器群について石器群の規模と組成する石器の豊富さの関係をみてみる。両者の関係は基本的には、石器群の規模が大きくなる程石器の器種は増えるという傾向にある（図1）。中部地方の神子柴系石器群（神子柴、小鍛冶原、唐沢B）は石器群の規模が小さく器種が限定されるためグラフの左側にあるが、その範囲には北海道東部の斗満台地石器群が含まれる。一方、その他の北海道の石器群は右側の領域になる。その中でも比較的神子柴石器群に近いのは、日出11（訓子府町教育委員会1985）やモサナル石器群であ

る。石器群の中の器種の比率（tool率）と器種の豊富さの関係については、相関関係はないようであるが、tool率が60%以上となる高いグループと、50%未満の低いグループに分かれる（図2）。神子柴石器群や唐沢B石器群は前者の高いグループになる。この高いグループの中で、器種のヴァリエーションが乏しい一群があり、これらは小鍛冶原石器群と斗満台地石器群である。

ある程度のサンプルサイズ効果によって、器種組成の豊富さは石器群の規模の大小によることが明らかとなった。同時に、中部地方の神子柴系石器群は石器群の規模も小さく、器種も限定されることがわかる。こうした中部地方の神子柴系石器群に、北海道の斗満台地石器群が含まれていることは特異である。斗満台地石器群は神子柴遺跡、唐沢B遺跡、小鍛冶原遺跡と同様、神子柴系石器群が空間の特定範囲に集積する状態で発見されたことから、デポとしての認識が持たれている点（栗島1990、鶴丸1985、山原1996）も特徴的である。石器組成、器種組成という共通点からは、中部地方の神子柴系石器群と斗満台地石器群との共通性がうかがえる。なお、石器組成は特定の考古学的文化の特徴となる場合もあるが、ビンフォードらがムステリアン石器群の分析から解釈したように遺跡の機能を示すという考えもある（Binford and Binford 1967）。同様に、神子柴系石

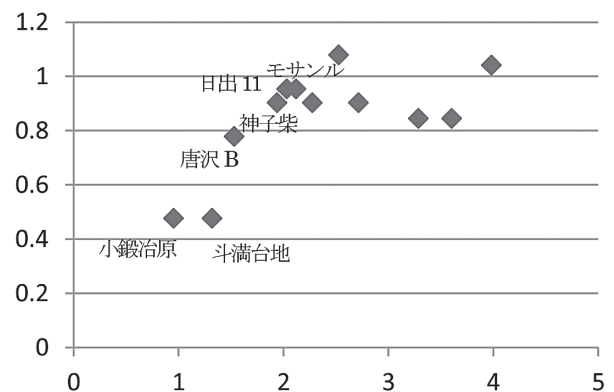


図1 神子柴系石器群における石器群の規模と豊富さの関係（数値は対数）

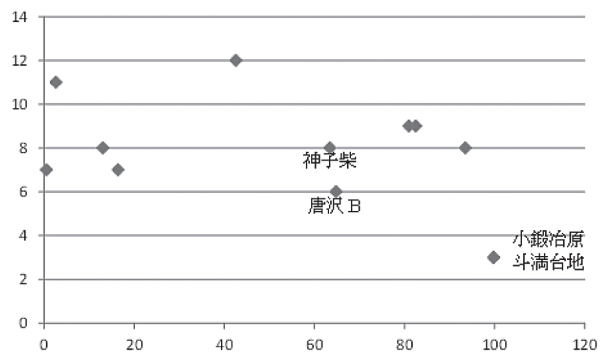


図2 神子柴系石器群とその関連石器群における器種組成率に対する器種の豊富さの関連

器群については、局部磨製石斧が森林環境で用いられた道具であるという環境適応的説明がなされることもあるが（安斎2003）、ここで表れたような神子柴系石器群における石器組成の変異がいかなる意味をもつのかはもう少し議論が必要かもしれない。

以下、石器組成以外の文化要素について斗満台地石器群の分析を行いたい。

3. 陸別町斗満台地石器群の分析

斗満台地遺跡は、北海道東部陸別町の西部に流れるトナム川の南の標高370mの台地上に位置する遺跡である。1972年に、地元の石橋建設による農道改良工事中に大形の石器が10点見つかったことにより、1973年に陸別町教育委員会から依頼された明石博志氏（北海道遺跡等調査員）が発掘調査を実施した。その結果、多数の石器が一か所に集められたようにして残された状態が確認された。石器は、地表面から50cm下に包含されており、第I層（腐食土層）の下の第II層とされるローム層の上面から25cm下に位置したという（明石1973）。その後、市史における要約（明石1991）を経て、山原敏朗（1996）による資料の再実測を含めた形態的な検討が行われた（図3）。

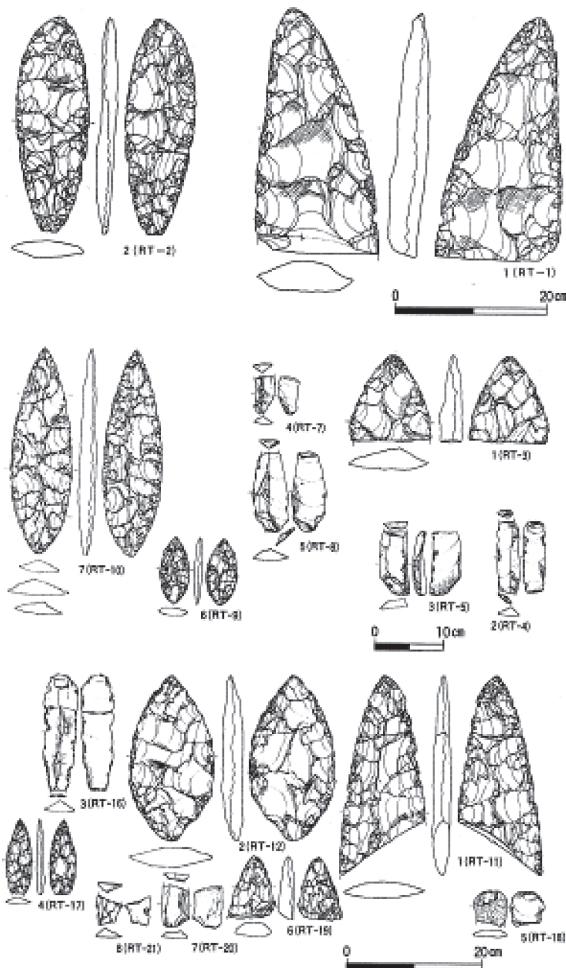


図3 斗満台地石器群（明石1991より）

この間、神子柴遺跡についてはデポとしての理解や（栗島1990、田中1982）、編年の位置づけと旧石器・縄文の時代区分論（岡本1979）などがなされているが、北海道の資料は、モサナル遺跡の石斧などが神子柴系石器群とみなされ（岡本1979）、やがて安斎（2002）や堤（2013）らによって包括的に取り上げられるに至る。しかし、斗満台地遺跡出土の石器群に関しては、縄文時代草創期という時代的背景の中でとらえられたものの（山原1996）、時代区分論に対応するような細石刃石器群や有舌尖頭器石器群との関係性（夏木2018、山原1999など）、神子柴系石器群の存在などと関連付けた考察はきわめて少ない。その主たる理由は、北海道にはいまだに斗満台地石器群に比較可能な一括資料が乏しい点、限られた層位的な関係や年代測定値の少なさから、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての石器群の時間的変遷を整合的に序列できるだけのデータがない点にあるであろう。また、広大な土地に比して研究者が少ないこともあり、一度報告された資料は再検討される機会が少ないという傾向もある。こうした中、筆者らは斗満台地遺跡の石器群について再検討を行っている（中沢ほか2018）。

(1) キャッシュとしての残され方

先述したように斗満台地石器群の発見は偶然だったが、発掘調査によって得られた所見では石器は50cm四方のくぼみの中からまとまって出土したとされている（明石1973）。これはデポもしくはキャッシュと呼ばれる出土状況であり、神子柴遺跡や小鍛冶原遺跡と共通する。道路脇の調査地点から台地の中央へと発掘調査はなされておらず、このキャッシュが単独であったのか集落の一部であったのかどうかは検討の余地がある。それにもかかわらず、まとめ置かれていたという状況とそれを構成する石器群は、器種が両面調整石器を主とし、尖頭器や石刃を含む限定された内容にある点や、調整剥片など石器製作の痕跡を伴わない点で特異である。同じく両面調整石器のキャッシュと呼ばれている仙台市野川遺跡の土坑からは多数の剥片が検出されており（仙台市教育委員会1996）、様相を異にする。石器に利用されている石材は、黒曜石と硬質頁岩の2種類であり、ヴァリエーションに乏しい。このうち、出穂雅実らによる黒曜石の蛍光X線分析によるとすべて置戸所山産であるという結果が得られているが、頁岩については産地が特定できていない（中沢ほか2018）。

(2) 年代

斗満台地遺跡については、発掘報告書の段階から旧石器時代の所産であるとされている（明石1973）。おそらく、土器がなく石器しか出土しなかった点、石器が尖頭器や石刃である点、ローム層中に包含されていた点、などを根拠としていたと考えられる。一方で、年代的な裏

付けについては乏しく、「C14法あるいは黒曜石水和層測定によって編年位置の検討がなされることが望まれる」(明石1973:20)とされた。その後、遺跡の再発掘もなく、年代的検討についてもなされていない。筆者は、2017年にプラスチック袋の中に管理されている黒曜石の両面調整石器とともに破片(剥片)があることに気づき、それらが同じ袋内の石器から欠落したと判断できたため、水和層観察用の薄片作成を依頼した。製作された薄片を400-500倍の偏光顕微鏡を用いて観察した結果、2点の両面調整石器に由来する黒曜石の破片の表面には水和層が形成されていた。これらの黒曜石水和層の計測を行った結果、2点の資料について4.67と4.5の平均値が得られ、4.2-4.8 μm の95%信頼区間が得られている(表2)。2点のみであるが、この近接した計測値は黒曜石の両面調整石器が同じ場所にキャッシュされた状態で見つかったこと、すなわち同時期に残されたことを反映していると思われる。陸別アメダスの過去30年間の温度データを利用し、Rogers(2007)の効果水和温度推定の公式と渡辺・鈴木(2006)で公開されている置戸産黒曜石の水和速度を利用した結果、推定される年代は14607-11168 cal BPに95%の確率で収まる。これは、晩水期の中でも15000 cal BP以降の比較的温暖な時期から、ヤングドライアスの終了直後くらいまでの期間となる。タイトな計測値であるものの、誤差は3500年程となりヤングドライアスなど1000年スケールの気候変動との関連づけは難しい。参考までに、両面に水和層が残っていたサンプル(RT15)の平均値である4.5 μm を用いると、12830 cal BPとなる。これは、ヤングドライアスの初頭にあたる。神子柴系石器群との関連では、95%の信頼区間に基づくと15000年以前となる大平山元I遺跡や、併行関係が想定された長者久保遺跡(工藤2012)よりは、新期であろうことがうかがえる。なお、15000-13000 cal BPは温暖期にあり、北海道の大正3遺跡の土器の年代である15000-14000 cal BPを含み(帯広市教育委員会2006)、本州では両面調整の狩猟具である有舌尖頭器が利用され弓矢猟への変化が想定されている(橋詰2015)。すなわち、斗満台地石器群は土器を伴わず、石器組成からみると旧石器的ではあるが、年代値は本州でいうところの縄文時代草創期相当になる。

表2 斗満台地遺跡出土の両面調整石器の水和層計測値と推定年代

遺物番号	器種	計測値	平均値	標準偏差	95%CI	推定年代(cal BPに換算)	年代(中央値)
14	両面調整石器	4.4, 4.8, 4.8	4.67	0.23	4.2-5.1	-	-
15	両面調整石器	4.6, 4.6, 4.2, 4.5, 4.5, 4.6	4.5	0.15	4.2-4.8	14607 - 11168	12830

(3) 大形石器の集合としての神子柴系石器群：サイズの比較

神子柴系石器群のもつ特徴に、通常よりも大形の石器が顕著に伴う点がある。神子柴遺跡、唐沢B遺跡、小

鍛冶原遺跡では大形の尖頭器、両面調整石器、石斧が伴うことから、大形石器は神子柴系の文化要素のひとつとみなすことができよう。このうち尖頭器・両面調整石器についてサイズを石器群間で比較すると、その違いは明らかである。長さは欠損している場合に元来の大きさを減じてしまうため、幅に対する厚さを比較すると、北海道の斗満台地石器群の両面調整石器はそのほかの石器群よりも大きい(図4)。小鍛冶原の両面調整石器の中でも比較的大形の製品は斗満台地のグループに近いが、小鍛冶原、神子柴、唐沢Bのほとんどは幅60mm未満厚さ20mm未満に収まる。この範囲には、斗満台地の頁岩製の尖頭器も含まれる。

尖頭器・両面調整石器の大きさ(幅と厚さの関係)からは、北海道斗満台地の異質性が際立つのに対し、中部地方の神子柴系石器群の均質性がみられる。斗満台地の黒曜石製の両面調整石器は特異な大形品であり、槍先として用いるには常軌を逸している。威信財・象徴財(田村2017)や墓の副葬品(鶴丸1985、中沢ほか2018)としての機能的解釈が妥当であろう。

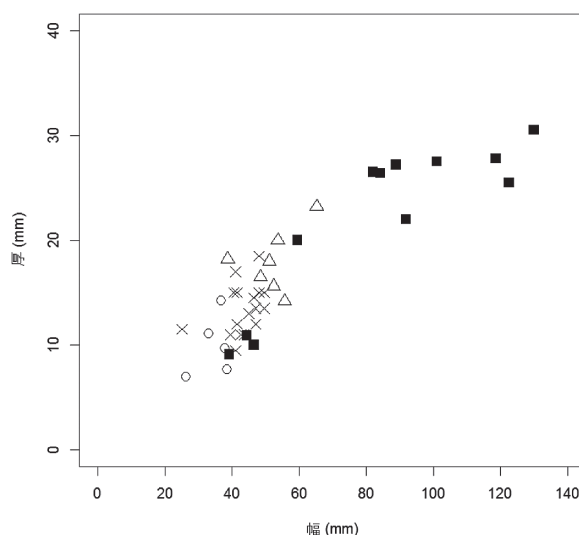


図4 尖頭器・両面調整石器の大きさ(黒の記号が北海道斗満台地の資料。白抜きの記号は中部地方の神子柴系石器群の資料)

4. 北海道に神子柴系石器群は存在するのか

北海道で神子柴系と呼ばれている石器群には、尖頭器・両面調整石器、石刃、石斧のセット関係が少ない点、斗満台地遺跡の年代が大平山元Iの年代におそらく1000年以上は後出する点、尖頭器・両面調整石器のサイズが神子柴系石器群の中心である中部地方のものよりもさらに大きい点などからみると、「中心」との違いがある。それに対して、特定器種の大形石器をキャッシュする点については共通する。これらの状況から判断すると、「周縁」にあたる北海道には、神子柴系石器群が存在するというよりも、むしろ神子柴系と共通要素をもつ石器群が存在するということが妥当であろう。文化伝

達様式からすると、水平方向の伝達によって文化要素のパッケージがもたらされたのではなく、相似・収斂進化のプロセスを考えることが適切であろうか。

一方で、「中心」と「周縁」の関係の観点からは、水平方向の文化伝達が全くなかったとまでは断言しにくい。「中心」から「周縁」へと文化要素が伝達されたが、一部のみが残されたといった史的背景があることが考えられる。しかし、中心部で15000年前以前であり、北海道では13000年前くらいとなるならば、伝達された情報が物質文化として可視化されるまでにタイムラグが生じたことになる。今回検討した結果に基づき、筆者は以下のような仮説を考えている。15000年より前に「中心」地域の集団ではより多くの文化要素が共有されていたが、「周縁」へと伝達される中で「周縁」の受け入れた側の集団の中で取捨選択が働き、部分的な文化要素が「周縁」に残された。受け入れた側において、世代間で伝達された文化要素のパッケージは、15000年前以降に何らかの要因で集団の分断や縮小が生じたことにより、伝達された文化要素（道具に関する考え方、知識・情報）が部分的にしか残されなかったことが「周縁」の「片鱗」と形容される特徴を生んだ。

LGM以降の15000年前以降の北海道の後期旧石器時代後半期には多様な細石刃石器群や小形舟底形石器群などの非細石刃石器群が展開しており、それらは時間的に複数共存していることが予想される（佐藤2016、中沢2016）。また、器種組成においても石器群間の多様性の高さは顕著である（Nakazawa and Yamada 2015）。これらの石器群間の多様性は、地域内の集団にある種のボトルネック効果（Ambrose 1998, Henrich2004）が働き、集団の構成員が減ったために知識の伝達が消失した場合や、集団の規模が回復した際に新たな技術が発明された状況などによって生じたのではと思われる。

本稿では、神子柴系とされる石器群をアприオリに取り上げ、その中にみられる文化要素のごく一部を取り扱ったにすぎない。そのため、北海道に神子柴系石器群は存在するかという問いについては、結論を出すのは時期尚早である。しかし、北海道に神子柴系石器群が存在するかという問いは、考古学的文化の「中心」と「周縁」に成立した情報伝達のネットワークを解明する意義があるだろう。今後、文化進合理論に依拠した上記の仮説を検証するためには、15000年前からそれ以降の中部地方、東北地方、北海道地方の考古学的データや関連する年代測定値、環境データの比較検討が必要であろう。とくに今回果たせなかった石器の技術的分析については、文化の中心／周縁の枠組みにおいても重要であり、機会を改めて検討したい。

引用文献

- 明石博志 1973 『陸別遺跡』、陸別町教育委員会
明石博志 1991 『斗満遺跡』、『陸別町史』資料編、pp.322-336.

- 安斎正人 2003 『「神子柴・長者久保文化」の大陸渡來說批判—伝播系統論から形成過程論へ—』、『物質文化』72、1-20.
稲田孝司 2018 「神子柴石器群の成立過程とその意義」、『シンポジウム神子柴系石器群とはなにか?』堤 隆編、pp.5-10頁.
大場利夫・近堂祐弘・久保勝範・宮 宏明 1983 「吉井沢遺跡発掘調査報告」、『北見郷土博物館紀要』13：1-37.
岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」、『奈良国立文化財研究所研究論集』V.
岡本東三 2012 『縄紋文化起源論序説』、六一書房.
帯広市教育委員会 1992 『帯広・落合遺跡』、帯広市教育委員会.
帯広市教育委員会 2006 『帯広・大正遺跡群2』、帯広市教育委員会.
加藤晋平・桑原 護 1969 『中本遺跡』、永立出版.
工藤雄一郎 2012 「日本列島における土器出現期の較正年代について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第172集：101-116.
栗島義明 1990 「デポの意義」、『研究紀要』7：1-44.
訓子府町教育委員会 1985 『日出一11遺跡』、訓子府町教育委員会.
佐藤宏之 2016 「総論：晩氷期の人類社会」、『晩氷期の人類社会』佐藤宏之ほか編、pp.3-22頁、六一書房.
佐原 真 1985 「分布論」、『岩波講座日本考古学1 研究の方法』、岩波書店
下川町教育委員会 1981 『モザンル遺跡』、下川町教育委員会.
仙台市教育委員会 1996 『野川遺跡』、仙台市教育委員会
田中英司 1982 「神子柴遺跡におけるデポの認識」、『考古学研究』29-3：56-78.
田村 隆 2017 「日本列島後期旧石器時代の新編年」、『理論考古学の実践II 実践篇』安斎正人編、pp.55-90、同成社.
千歳市教育委員会 1990 『丸子山遺跡における考古学的調査』、千歳市教育委員会.
チャイルド、V.G. 1956 『考古学とは何か』、岩波書店.
堤 隆(編) 2009 『小鍛冶原/唐沢B』、信濃書籍出版センター.
堤 隆 2013 『狩猟採集民のコスモロジー：神子柴遺跡』、新泉社.
鶴丸俊明 1985 「黒曜石供給の一形態とその技術」、『考古学ジャーナル』249：29-31.
寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」、『旧石器時代の地域編年の研究』安斎正人・佐藤宏之編、pp.275-314頁、同成社.
中沢祐一 2016 「北海道中央部の旧石器について」、『晩氷期の人類社会』佐藤宏之ほか編、pp.169-187頁、六一書房.
中沢祐一・岩瀬彬・尾田識好・赤井文人・廣松晃一・出穂雅実・大島居仁 2018 「陸別町斗満台地遺跡出土石器群の再検討」北海道旧石器文化研究会2017年度定例研究会.
長沼正樹 2005 「日本列島における更新世終末期の考古学的研究」、『論集忍路子』I：57-73.
夏木大吾 2016 「北海道における晩氷期人類の居住生活—吉井沢遺跡の事例から—」、『晩氷期の人類社会』佐藤宏之ほか編、pp.43-63頁、六一書房.
夏木大吾 2018 「北海道における縄文時代草創期文化」、『論集忍路子』V：59-77.

- 橋詰 潤 2015 「後期更新世末期の本州中央部における両面加工狩猟具利用の変遷」『第四紀研究』第54巻第5号：235-255.
- 林茂樹・上伊那考古学会編 『神子柴』、信毎書籍出版センター.
- 森嶋 稔ほか編 1998 『唐沢B遺跡』、信毎書籍出版センター.
- 渡辺圭太・鈴木正男 2006 「黒曜石の水和速度と化学組成の関係について」『考古学と自然科学』54、1-12.
- 山原敏朗 1996 「陸別町斗満台地遺跡出土の資料」『北海道旧石器文化研究』1：13-24.
- 山原敏朗 1998 「北海道の旧石器時代終末期についての覚書き」『北海道考古学』34：77-92.
- Ambrose, S.H. 1998 Late Pleistocene human population bottlenecks, volcanic winter, and differentiation of modern humans. *Journal of Human Evolution* 34: 623-651.
- Boyd, R., Bogerhoff-Mulder, M., and P.J., Richerson 1997 Are cultural phylogenies possible? In *Human by Nature: between biology and the social sciences*, edited by P. Weingart et al., pp. 355-386. Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum.
- Binford, L.R. and Binford, S.R. 1966 A preliminary analysis of functional variability in the Mousterian of Levallois facies. *American Anthropologist* 68: 238-295.
- Bramanti et al., 2009 Genetic discontinuity between local hunter-gatherers and central Europe's first farmers. *Science* 326: 137-140.
- Cavalli-Sforza, L.L. and M. Feldman 1981 *Cultural Transmission and Evolution: a quantitative approach*. Princeton, Princeton University Press.
- d'Errico, F. et al., 1998 Neanderthal acculturation in Western Europe? A critical review of evidence and its interpretation. *Current Anthropology* 30: 125-155.
- Grayson, D. 1984 *Quantitative Zooarchaeology*. New York, Academic Press.
- Henrich, J. 2004 Demography and cultural evolution: how adaptive cultural processes can produce maladaptive losses – the Tasmanian case. *American Antiquity* 69: 197-214.
- Nakazawa, Y. and S. Yamada 2015 On the processes of diversification in microblade technocomplexes in the Late Glacial Hokkaido. In *The Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Palaeolithic Asia*, edited by Y. Kaifu, M. Izuhō, T. Goebel, H. Sato, and A. Ono, pp.418-433. Texas A&M University Press.
- Neiman, F.D. 1995 Stylistic variation in evolutionary perspective: inferences from decorative diversity and interassemblage distance in Illinois Woodland ceramic assemblages. *American Antiquity* 60: 7-36.
- O'Brien, M.J. (editor) 2008 *Cultural Transmission and Archaeology: issues and case studies*. Washington DC, SAA Press.
- Powell, A. et al. 2009 Late Pleistocene demography and the appearance of modern human behavior. *Science* 324: 1298-1301.
- Richardson, P.J., and R. Boyd 2005 *Not by Genes Alone: how culture transformed human evolution*. University of Chicago Press, Chicago.
- Rogers, A. 2007 Effective hydration temperature of obsidian: a diffusion theory analysis of time-dependent hydration rates. *Journal of Archaeological Science* 34: 656-665.
- Shennan, S. 2002 *Genes, Memes and Human History*. Thames and Hudson, London.
- Shennan, S. 2011 Descent with modification and the archaeological record. *Philosophical transactions of the Royal Society B* 366: 1070-1079.
- Shennan et al., 2015 Isolation by distance, homophily, and “core” vs. “package” cultural evolution models in Neolithic Europe. *Evolution and Human Behavior* 36: 103-109.
- VanPool, T., Palmer, C.T., and C.S. VanPool 2008 Horned serpents, tradition, and tapestry of culture. In *Cultural Transmission and Archaeology*, edited by M. J. O'Brien, pp.77-90. Washington DC, SAA Press.

謝辞：本稿で紹介した斗満台地遺跡出土の石器群の検討には、大鳥居仁氏（陸別町教育委員会）から多大なご助力を頂戴した。黒曜石水和層観察用の岩石薄片は、野村秀彦氏（北海道大学薄片技術室）に作製いただいた。本稿作成にあたり、堤 隆、長沼 孝、高倉 純、長沼正樹の諸氏よりご教示をいただいた。

神子柴遺跡とその石器群

明治大学黒曜石研究センター・八ヶ岳旧石器研究グループ

堤 隆

1. はじめに

本稿においては、議論の対象となる神子柴遺跡の石器群の基本的要素を記載する。詳細については神子柴遺跡の発掘調査報告書（林編2008）を参照されたい。

2. 神子柴遺跡

位置 神子柴遺跡は、長野県上伊那郡南箕輪村神子柴大清水7888番地、本州のほぼ中央部にあたり、北緯35度51分45秒、東経137度57分40秒にある。

遺跡は、天竜川より1 kmほど離れた段丘の突端部にあり、石器の出土したA地点の標高は714mである。遺跡のある段丘の下には豊富な湧水がある。遺跡からは、東に南アルプスが、西には中央アルプスの山々が遠望できる。

発掘調査 神子柴遺跡は、伊那の考古学研究者である林茂樹の綿密な調査によって1958年に発見され、一度の試掘調査と三度の発掘調査がなされた。

試掘調査と1回目の発掘調査が1958年11月、2回目の発掘調査が1959年11月、3回目の発掘調査が1968年11月になされた。発掘調査地点は、A地点からF地点までであるが、議論の対象となるのは、試掘調査と1・2次の発掘調査によって検出されたA地点の石器群である。

層序と年代 神子柴遺跡の地層は、I層が表土、II層が漸移層、III層がソフトローム層、IV層がハードローム層の順になる。このうち石器群が出土したのはIII層のソフトローム層で、その上面から10cmほどのレベルに集中した。ローム層中の火山灰分析の結果では、約30,000cal BPの始良丹沢火山灰（AT）が、石器群のレベルより下位から検出された。したがって、神子柴の石器群はそれより新しい。また、黒曜石の水和層年代測定によると、12,400±400年の値が6点ほど算定されており、石器群の年代により近い年代を示していると考えられる。

石器分布 A地点の石器の総数は87点で、神子柴遺跡の石器分布は、7 m×3 mの範囲に広がり、径3 mの環状を呈する北群とそれに隣接する南群とに分かれる。その特色は、剥片など一部の石器を除き、完成された石器ばかりが出土した点にある。また、それらの石器の状態は明らかに配置されたと思えるものが多数あった。尖頭器数点が並べて置かれた場所、石核がまとめて置かれた場所、搔器・削器・尖頭器などが集積された場所など、石器を配置したスポットがいくつか残されていた。

また、北群では炭化物らしき集中個所もみられた。

3. 石器群について

石器 石器の内訳は、局部磨製石斧9点・打製石斧4点・尖頭器18点・搔器11点・削器8点・敲石2点・砥石2点・石核10点・石刃1点・削片1点・剥片21点である。これらのうち所在不明な石刃1点と剥片4点を除く全石器が、この時期を代表する重要かつ精巧な作りの石器群として、1988年に国の重要文化財に指定された。

石材 石器に用いられていた石材は、黒曜石、下呂石、珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰岩、「玉髓」、碧玉（鉄石英）、黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩、安山岩の12種類である（中村2008）。このうち黒曜石全点は、遺跡から50 kmほど離れた和田峠黒曜石原産地群を構成するいくつかの産地から運ばれたものであることが、放射化分析や蛍光X線分析によって明らかになった（望月2008）。また、下呂石も遺跡より約60km西方の岐阜県下呂市湯ヶ峰産であることが蛍光X線分析によって明らかになった。尖頭器や搔器に使用されている「玉髓」は、新潟県中・北部で確認されており、日本海側に産地が推定される。また、珪質頁岩も新潟以北のものであろう。

一方、石斧石材の黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩は、地元の領家帯に由来するもので、天竜川上流の西側の木曾山脈に分布する。おそらく採集地は天竜川右岸で、遺跡近傍の大きな河川だったと推定される。つまり、神子柴遺跡は石斧の石材獲得に優位な場所であった。

以上、石斧の石材は遺跡近隣（10kkm圏内）から、黒曜石類は和田峠（約50km）から、下呂石は岐阜県湯ヶ峰（約60km）から、「玉髓」や珪質頁岩などは新潟以北（約150kkm以上）の遠隔地から神子柴遺跡に運ばれたということになる。

使用痕 神子柴遺跡では、石器全点の使用痕分析がおこなわれた（堤2008）。このうち、黒曜石の尖頭器7点と黒曜石の搔器1点に使用痕が認められた。とくに尖頭器は、いずれもナイフのように切ったり削ったりする機能が使用痕から想定され、乾燥した皮によって生じる使用光沢も一部に認められた。尖頭器は、通常その形から狩猟具の“槍先”として使用されたとみられがちであるが、この使用痕分析の結果は従来の想定を再考をうながす結果となった。また、黒曜石の搔器も搔きとるのではなく切削に用いていることがわかった。神子柴の石器は、ほぼ完成品だけが残ることから、一般に未使用のイメージが付きまとうが、明らかに実際使用された石器の

グループがあることが、使用痕分析から論証された。しかし、一方で、大形の石斧等には使用痕が残るものがない。神子柴の大形石斧については、実用品という認識と、実用品でなく財であるという認識、あるいはその双方の意味を兼ね備えたものという三つの認識がある。使用痕がみあたらないことは、これらの見解のいずれも成り立ちうることを示している。

運搬痕 前述したように「尖頭器」に分類された黒曜石両面加工石器には明確な使用痕が残り、ナイフのように使用された切削具であることが判明したが、これらのうち3つには激しい運搬痕が残され、かなりの長距離をおそらくいくつかの場所を経由しながら神子柴に運ばれ、遺棄されたものと考えられた(堤2018)。

4. 神子柴遺跡をめぐる議論

神子柴遺跡をめぐる議論は、主に4つの議論が今日までなされている(堤2013)。

時代論 旧石器か縄文か、時代的位置付けをめぐるもの。旧石器・縄文の時代観にもかかわってくるが、石刃技法の存在、土器の共伴の有無、交換をめぐる社会システムのあり方などが争点となっている。また、あえて両時代の「移行期」とする見方もある(谷口2011)。

出自論 渡来石器か、列島内自生か。当初シベリアなど大陸起源とされたが(山内・佐藤1962)、今日では列島内自生をとる研究者も少なくない(安斎2001)。

機能論 使用か、未使用か、その機能とは何か。大形の局部磨製石斧をめぐる議論は、威信材などシンボルとみる見解がある。

性格論 遺跡は、デボか、住居か、交換の場か、墓か。モノの交換をめぐる社会システムの発露としてのデボ(山内1969、岡本1979)、祭祀に関する象徴的空間(安斎2001)、テント状の住居空間への器物の配置(稲田2008)、そして今回の新たな問題提起では副葬品を埋納した廃屋墓(佐藤2018)など様々な認識があり、議論のハイライトともいえる。

5. おわりに

本2018年は、1958年の神子柴遺跡の最初の調査から60年という節目にあたる。時代論、出自論、機能論、性格論など今後もさまざまな議論が尽きる事はないかもしれないが、このシンポジウムを契機により深化した解釈がなされることを期待したい。

本研究は、堤隆に交付されたJSPS 科研費基盤研究(C)「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」(課題番号17K03216)による。

引用文献

- 安斎正人 2001「長野県神子柴遺跡の象徴性：方法としての景観考古学と象徴考古学」『先史考古学論集』1 先史考古学研究会
- 稲田孝司 2008「神子柴遺跡の生活と集団」『神子柴』信毎書籍出版センター
- 岡本東三 1979「長者久保・神子柴文化について」『奈良国立文化財研究所学報』35 奈良国立文化財研究所
- 佐藤宏之 2018「神子柴遺跡はなぜ残されたか」『シンポジウム 神子柴系石器群：その存在と影響』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 谷口康浩 2011『縄文文化起源論の再構築』同成社
- 堤 隆 2008「神子柴遺跡における石器の機能推定」『神子柴』信毎書籍出版センター
- 堤 隆 2013『狩猟採集民のコスモロジー：神子柴遺跡』新泉社
- 堤 隆 2018「バイフェイスを携えて：神子柴遺跡に残されたモバイル・ツール」『シンポジウム 神子柴系石器群とは何か』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 中村由克 2008「神子柴遺跡出土石器の石材とその原産地の推定」『神子柴』信毎書籍出版センター
- 林茂樹・上伊那考古学会編 2008『神子柴』信毎書籍出版センター
- 望月明彦 2008「神子柴遺跡出土石器の産地推定」『神子柴』信毎書籍出版センター
- 山内清男 1969「縄紋草創期の諸問題」『ミュージアム』224
- 山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』12-13 読売新聞社



図1 神子柴遺跡の発掘調査(1958)

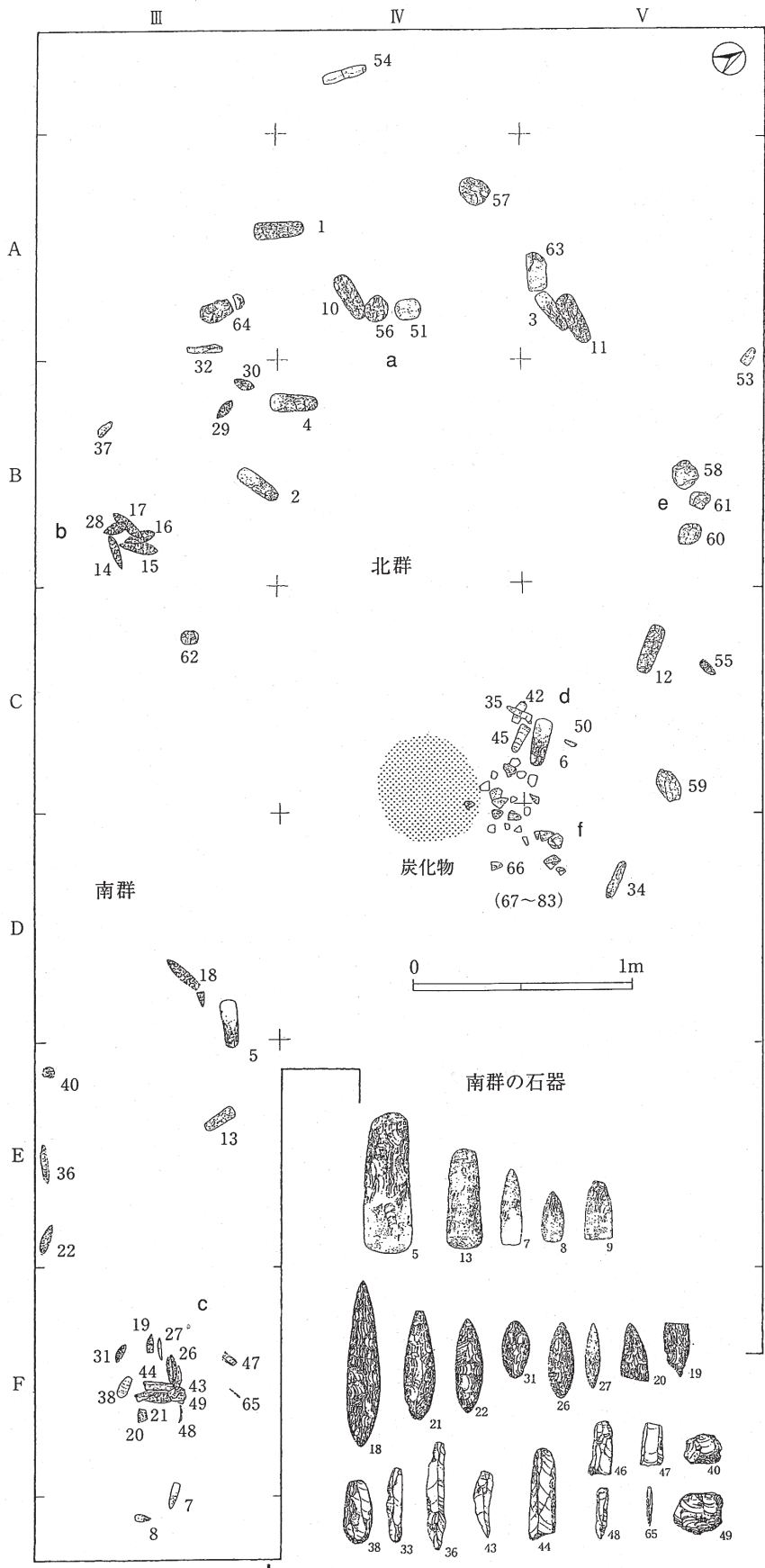
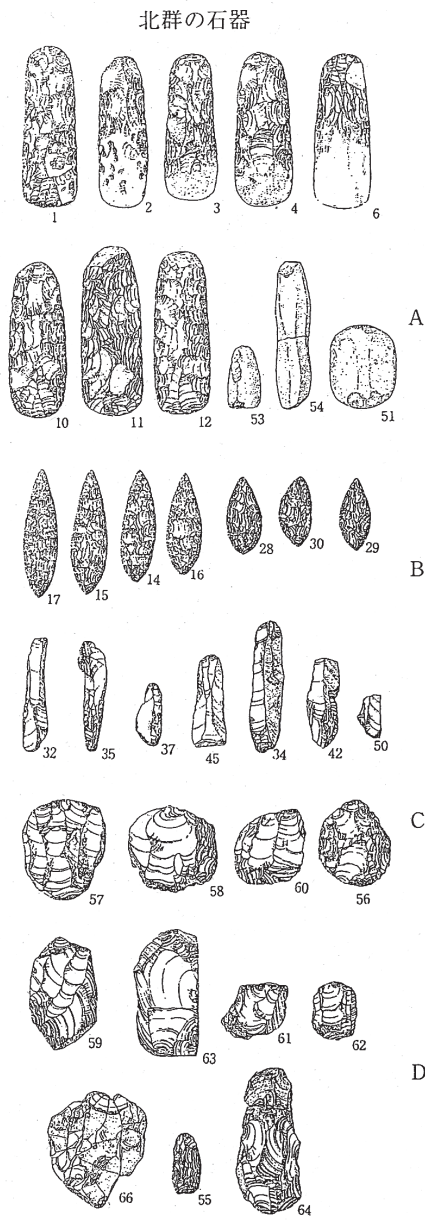


図2 神子柴遺跡の石器分布

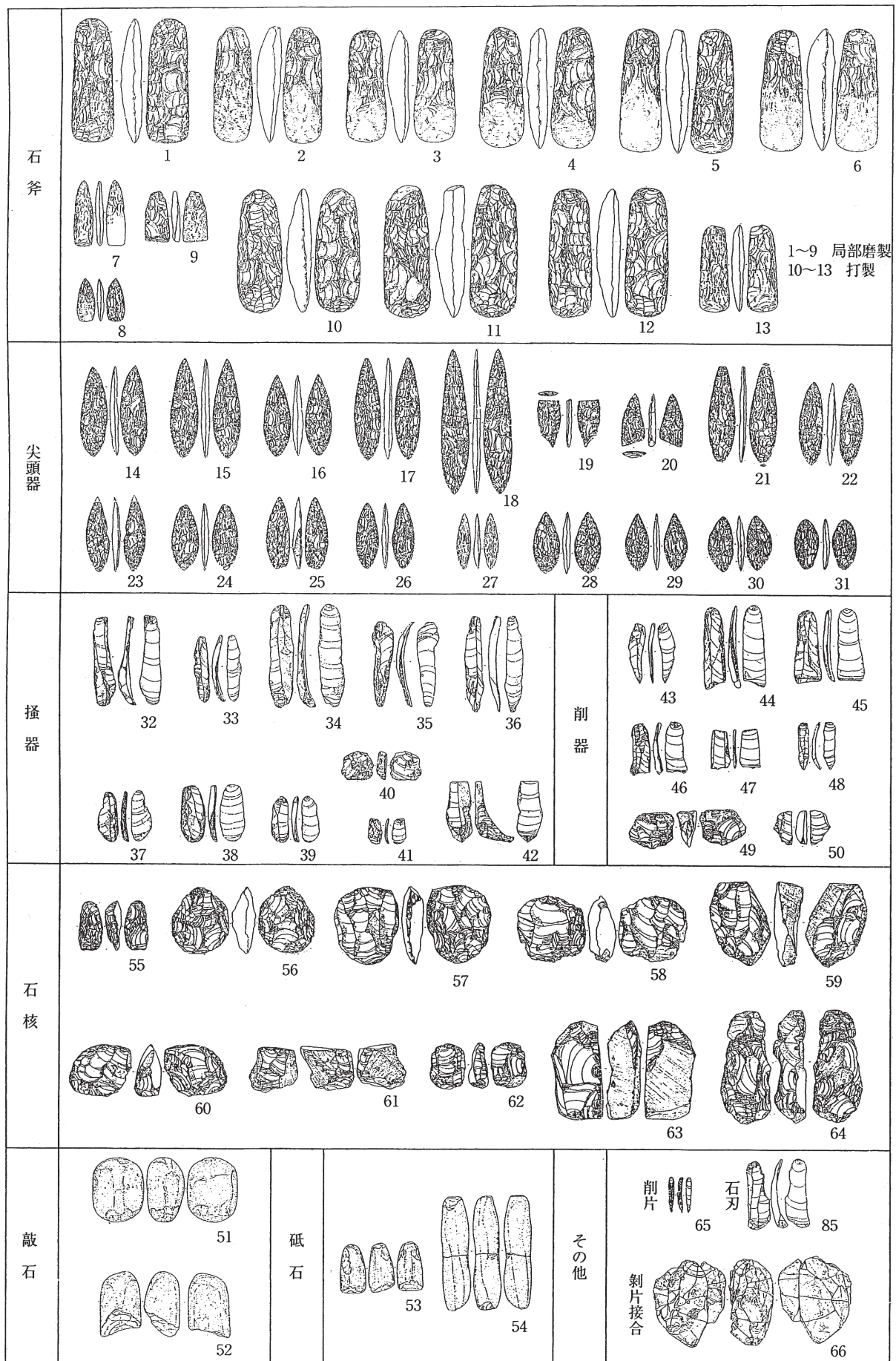


図3 神子柴遺跡の出土石器

表1 神子柴遺跡出土石器一覽表

番号	重文 番号	注記番号	器種	石材	分析 番号	産地	最大長 (cm)	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考
1	1	MA6	局部磨製石斧	凝灰岩			22.05	7.50	3.70	734.1	
2	2	MA17	〃	黒雲母粘板岩			20.40	7.00	4.30	653.7	
3	3	MA18	〃	〃			19.75	7.25	4.00	608.5	
4	4	MA46	〃	砂岩			20.90	7.85	3.80	717.8	
5	5	MA45	〃	黒雲母粘板岩			21.20	7.40	4.25	762.7	
6	6	MA70	〃	〃			20.80	7.60	4.75	860.5	
7	7	MA43	〃	凝灰岩			11.25	3.35	1.40	56.7	
8	8	MA41	〃	〃			7.45	3.25	1.20	30.0	
9	9	MA33	〃	〃			8.70	4.30	1.55	54.7	
10	1	MA3	打製石斧	砂岩			21.20	8.00	4.35	805.6	
11	2	MA19	〃	緑色岩(苦鉄質火山岩)			23.00	8.20	5.35	1203.1	
12	3	MA53	〃	砂岩			22.25	7.60	4.20	842.5	
13	4	MA24	〃	凝灰岩			15.05	5.20	2.20	199.0	
14	1	MA12	尖頭器	玉髓			15.35	4.80	1.50	103.3	
15	2	MA14	〃	〃			17.10	4.95	1.50	115.0	
16	3	MA15	〃	〃			13.95	4.80	1.85	105.7	
17	4	MA16	〃	凝灰質頁岩			17.60	4.65	1.45	110.2	
18	5	MA23.47.48	〃	下呂石	26	下呂石	25.10	4.95	1.35	141.7	
19	6	MA26	〃	黒曜石	1	和田土屋橋西群	8.05	4.10	0.95	32.4	
20	7	MA27.44	〃	黒曜石	2	和田土屋橋北群	9.05	4.15	1.20	41.9	
21	8	MA34	〃	下呂石	27	下呂石	16.45	4.70	1.20	89.0	
22	9	MA49	〃	黒曜石	3	諏訪星ヶ台群	14.25	4.15	1.50	78.7	
23	10	M 採集02	〃	黒曜石	4	諏訪星ヶ台群	11.95	4.05	1.50	59.3	表面採集
24	11	MA01	〃	黒曜石	5	諏訪星ヶ台群	10.95	4.70	1.35	69.7	表面採集
25	12	MA04	〃	黒曜石	6	諏訪星ヶ台群	12.35	4.10	1.70	71.4	表面採集
26	13	MA36Ⅲ	〃	珪質頁岩			11.30	3.95	1.10	49.4	
27	14	MA38	〃	凝灰岩			9.60	2.50	1.15	21.5	
28	15	MA11Ⅲ	〃	黒曜石	7	諏訪星ヶ台群	10.55	4.70	1.35	59.5	
29	16	MA10-3-9	〃	黒曜石	8	諏訪星ヶ台群	9.95	4.25	1.10	40.2	
30	17	MA9	〃	黒曜石	9	諏訪星ヶ台群	9.55	4.50	1.30	47.2	
31	18	C-25-Ⅲ	〃	黒曜石	10	諏訪星ヶ台群	8.60	4.35	1.10	37.4	
32	1	A-8Ⅲ-10	搔器	珪質頁岩			15.50	3.80	3.20	87.2	
33	2	MA35Ⅲ	〃	〃			11.40	2.60	2.10	28.7	
34	3	MA67	〃	黒曜石	11	諏訪星ヶ台群	17.82	4.50	3.50	123.2	
35	4	MA71.55	〃	珪質頁岩			14.65	3.80	3.15	62.8	
36	5	MA50	〃	〃			16.60	3.27	2.23	64.8	
37	6	MA22Ⅲ	〃	玉髓			8.60	3.60	1.29	30.1	
38	7	MA32Ⅲ	〃	碧玉(鉄石英)			9.70	4.35	1.63	68.1	
39	8	MA84	〃	玉髓			7.90	3.10	1.34	23.4	出土位置不明
40	9	MA51	〃	黒曜石	12	和田鷹山群	4.82	5.60	1.90	49.0	
41	10	MA94	〃	玉髓			4.44	2.50	0.72	4.9	出土位置不明
42	11	MA72	〃	黒曜石	13	諏訪星ヶ台群	10.65	4.60	6.78	114.4	
43	1	C-29-Ⅲ	削器	珪質頁岩			10.40	3.04	1.20	15.1	

番号	重文 番号	注記番号	器種	石材	分析 番号	産地	最大長 (cm)	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考
44	2	C-31-Ⅲ	削器	珪質頁岩			14.10	3.90	2.08	86.1	
45	3	C73	〃	玉髓			12.58	4.80	1.75	74.0	
46	4	MA28	〃	〃			8.70	3.55	1.65	26.9	
47	5	MA39	〃	珪質頁岩			6.70	3.60	0.60	15.8	
48	6	C-37-Ⅲ	〃	〃			8.00	2.02	1.42	10.4	
49	7	MA87	〃	黒曜石	14	諏訪星ヶ台群	6.27	8.18	3.50	151.2	
50	8	MA52	〃	黒曜石	15	諏訪星ヶ台群	5.85	3.49	2.05	30.1	注記14
51	1	MA5Ⅲ	敲石	安山岩			11.30	8.85	6.60	984.3	
52	2	MA05	〃	〃			11.50	7.20	6.35	667.0	表面採集
53	1	MA97	砥石	砂岩			8.43	4.40	4.60	195.0	
54	2	MA96	〃	〃			20.20	4.95	4.80	588.9	
55	1	MA03	石核	黒曜石	16	諏訪星ヶ台群	8.50	4.30	2.80	91.1	
56	2	MA4	〃	玉髓			11.80	9.80	4.20	440.0	
57	3	MA7Ⅲ	〃	黒曜石	17	和田鷹山群	13.60	11.20	3.80	560.9	
58	4	MA91	〃	〃	18	和田鷹山群	11.70	12.00	4.75	621.5	
59	5	MA54	〃	〃	19	諏訪星ヶ台群	14.60	10.70	5.20	657.2	
60	6	MA89	〃	〃	20	和田鷹山群	9.10	10.85	4.70	425.3	
61	7	MA90	〃	〃	21	諏訪星ヶ台群	79.50	8.58	9.30	667.2	
62	8	MA13	〃	〃	22	諏訪星ヶ台群	8.00	6.20	3.57	154.3	
63	9	MA20	〃	〃	23	諏訪星ヶ台群	17.30	9.15	6.30	963.2	
64	10	MA1・2	〃	〃	24	和田鷹山群	19.70	8.70	5.90	849.0	
65	1	MA40	削片	玉髓			6.10	0.98	0.95	4.5	
66	1		剥片(一括)	黒曜石		和田鷹山群	12.90	15.60	7.70	1397.5	17個の接合状態
67	1	69	〃	〃		〃	6.30	7.60	6.60	291.0	
68	1	80?	〃	〃		〃	6.62	5.30	6.60	240.3	
69	1	81(66)	〃	〃		〃	64.50	4.80	7.10	276.3	
70.71.72	1	68.59.84	〃	〃		〃	11.20	5.65	3.90	202.9	
70	1	68	〃	〃		〃	6.70	5.65	3.50	100.6	
71	1	59	〃	〃		〃	3.50	4.50	3.90	44.8	
72	1	84	〃	〃	25	和田鷹山群	4.10	4.35	3.90	57.5	
73.74	1	65.77(E30)	〃	〃		〃	6.00	6.80	6.00	84.2	
73	1	65	〃	〃		〃	4.95	3.50	6.00	84.2	
74	1	77(E30)	〃	〃		〃	6.00	3.75	3.85	50.3	
75.76	1	なし・64	〃	〃		〃	7.05	3.60	2.40	44.6	
75	1	不明	〃	〃		〃	3.25	3.60	2.15	20.6	
76	1	64	〃	〃		〃	4.20	3.60	2.40	24.0	
77	1	85	〃	〃		〃	5.23	4.10	1.70	22.0	
78	1		〃	〃		〃	4.35	6.30	1.60	56.3	
79	1	57	〃	〃		〃	2.75	2.00	1.30	3.9	
80	1		〃	〃		〃	5.10	4.85	1.20	20.8	
81	1		〃	〃		〃	5.75	6.20	0.85	30.2	
82	1		〃	〃		〃	5.68	8.10	27.60	6.3	
83	1		〃	〃		〃	45.50	35.00	63.00	68.4	
84		MA67.72.52	接合資料		111315	諏訪星ヶ台群	17.82	6.20	6.90	267.7	
85		MA30	石刃				12.15	3.95	2.90	不明	重文指定時所在不明。重文未指定品

引用のための書誌情報

書籍名 『シンポジウム 神子柴系石器群その存在と影響』
刊行者 八ヶ岳旧石器研究グループ（主催4団体のうちの刊行主体者）
編集者 堤 隆
刊行日 2018年9月29日
刊行所 長野県伊那市
総頁数 50頁
査読 有



シンポジウム 神子柴系石器群その存在と影響

刊行日 2018年9月29日
編集者 堤 隆
主催者 伊那市創造館・上伊那考古学会
明治大学黒耀石研究センター・八ヶ岳旧石器研究グループ
印刷 ほおずき書籍株式会社
長野市柳原2133-5 TEL026-244-0235

※科学研究費 基盤研究(C) 研究代表者：堤 隆 (17K03216)
「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」活用事業
